

仙台市文化財調査報告書 第44集

宮城県仙台市

鳴・菴 遺跡

—発掘調査報告書—

1982.12

仙 台 市 教 育 委 員 会

鴻ノ巣遺跡正誤表

項	誤	正
P. 3 下1	觀応2年(1321)	觀応2年(1351)
P. 4 上1	擬定地	擬定地
P. 4 上2	嘉慶2年	嘉慶2年
P. 5 上4	古墳時代の	古墳時代の
P. 13 上5～P. 69 上9	三面底	三面底
P. 13 上13	掘立柱建立跡	掘立柱建物跡
P. 13 下10	柱穴掘り方	柱穴掘り方
P. 13 下4	SD-11井戸跡	SD-11溝跡
P. 14 上3	SE-7	SE-11
P. 14 上8	南北方面	南北方向
P. 34 上12	SD-12溝跡に切られている	SD-12溝跡を切る
P. 51 下7	第12トシチ	第12トレンチ
P. 58 上9	小型手握ね土器	小型手捏ね土器
P. 58 上11	堆積土	堆積土
P. 61 下14	第47図13・14・15	第47図11・12・13
P. 66 上7	摩滅	磨滅
P. 68 下11	2・3の問題	1・2の問題
P. 71 上8	桑原滋郎	桑原滋郎

仙台市文化財調査報告書 第44集

宮城県仙台市

鴻巣遺跡

—発掘調査報告書—

1982.12

仙 台 市 教 育 委 員 会

序

この報告は、岩切地区の鴻ノ巣遺跡にかかる宅地造成に伴う、事前の発掘調査の成果をまとめたものであります。

岩切地区を貫流する七北田川は仙台の沃野を潤す三河川の一つで、古代・中世時代には河川交通路としても営まれていたとも伝えられています。とくにこの地区は、留守氏の居城として著名な岩切城（昭和57年8月史跡指定）を中心に、この流域には冠嶺市や五日市等の市場が開かれ、黒川以北や多賀城・塙釜へ通ずる古街道とも会合し、水陸両交通の結接地点と云う地理とも相まって、中世時代の政治・交通・商業の文化の中心的役割をはたしたところとして、歴史上重要な所とされてきたところであります。

近年、この地区にも市街化の影響が及び、土地区画整理事業や宅地造成、あるいは東北新幹線建設工事等々の開発事業の進展に伴い、埋蔵文化財包蔵地にかかる発掘調査の機会が増えつつあり、こうした中で古記にはない、先人の残した文化や歴史の解明が少しづつなされ、その土地に根ざした歴史的風土が明らかにされつつあります。

仙台市教育委員会では、こうした貴重な文化遺産を少しでも多く後世に継承すべく、その保護や啓蒙に努めております。しかし、これとでも市民一人ひとりの御理解がなければ成し得ない事業であることは云うまでもありません。一片の土器、一握りの土が、その土地の歴史を語る貴重な資料であることを考えるとき、記録にとどめる発掘調査の重要性を市民と共に認識しなければならないと考えるのであります。

この遺跡の発掘調査に際し、たくさんの方々の御協力をいただき、ここに立派な報告書を刊行することが出来ましたこと、心から感謝を申し上げる次第であります。この報告が学兄諸氏をはじめ、多くの方々の研究活動に利用されること、また、永く後世に継承されるべき歴史的財産となることを念じて序とする次第であります。

昭和57年12月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 黎

例　　言

1. 本報告書は仙台市岩切字油ノ巣に所在する鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書である。
2. 本文の執筆は下記の通り分担した。

本文執筆　青沼一民……Ⅰ、Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ2～5、Ⅶ1、2、Ⅷ。
長島栄……Ⅲ、Ⅵ1、6、Ⅶ1、2、Ⅷ。
遺構トレス……高橋燕子・真中信三
遺物実測……相沢尚子・池田真弓・菊地雅之・遠藤正昭・菊池豊・三浦和子
氏家弘子・青沼一民・長島栄…
遺物トレス……小林広美・神尾紀以子・渡辺紀雄・赤間郁子・神尾恵美子
遺物復元・拓影……菊地宣之・鈴木康弘・三浦和子・氏家弘子
遺物写真……長島栄…・小島真弓・鈴木康弘
図面整理……菊地雅之・菊地宣之・遠藤正昭・菊池豊・鈴木康弘
遺構写真……青沼一民・長島栄…
図表作成・台帳整理…相沢尚子・池田真弓・三浦和子・氏家弘子
編集は青沼一民・長島栄…が行なった。
3. 本報告書中の土色は「新版標準土色帖」(小山・佐原:1970)を使用した。
4. 本調査においては、次の通りの遺構略分を使用した。

S B : 掘立柱建物跡

S D : 溝跡

S E : 井戸跡

S I : 穴穴住居跡

S K : 土壙

S X : その他の遺構

5. 本報告書の実測図中の方位は磁北で統一してある。
6. 遺物の分類は下記の通りである。

A	縄文土器	I	自然遺物
B	弥生土器	J	陶磁器
C	土師器(非ロクロ)	K	石製品
D	土師器(ロクロ)	L	木製品
E	須恵器	N	鉄製品
F	瓦	P	上製品
G	瓦		

本文目次

序文	
例言	
I. 調査に経る経過	1
II. 調査要項	1
III. 遺跡の位置と環境	2
IV. 調査の方法と概要	5
V. 基本層位	7
VI. 発見遺構と出土遺物	9
1. 竪穴住居跡	9
2. 挖立柱建物跡	12
3. 溝跡	14
4. 井戸跡	25
5. 土壙	33
6. その他	37
(1) SX-1 性格不明遺構	37
(2) 周溝墓 (SK-6 土壙、SD-15溝跡)	41
VII. 遺構・遺物の検討	47
1. 遺構	47
(1) 竪穴住居跡	47
(2) 挖立柱建物跡	47
(3) 溝跡	48
(4) 井戸跡	49
(5) 土壙	50
(6) SX-1 性格不明遺構	50
(7) 周溝墓 (SK-6、土壙、SD-15溝跡)	51
2. 遺物	53
(1) 楕文土器	53
(2) 土師器	54
(3) 須恵器	60
(4) 赤焼土器	61
(5) 瓦	63
(6) 自然遺物	63
(7) 陶磁器	63
(8) 石製品	65
(9) 木製品	66
(10) 鉄製品	66
(11) 土製品	66
(12) 動物遺存体	66
VIII. まとめ	68

挿入図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡	2	第26図 S K-2 遺物出土状況平面図	33
第2図 調査区設定図	5	第27図 S K-7 遺物出土状況平面図	33
第3図 調査区位置図	6	第28図 S K-6 出土遺物実測図	34
第4図 基本層位模式図	7	第29図 S K土壤実測図	35
第5図 II区東・北壁断面図	8	第30図 S K-7 出土遺物実測図	36
第6図 I区東・南壁断面図	9	第31図 S X-1 遺物出土状況平面図	37
第7図 調査I区遺構配置図	10	第32図 S X-1 出土遺物実測図(1)	38
第8図 調査II区遺構配置図	11	第33図 S X-1 出土遺物実測図(2)	39
第9図 S B 1~3 据立柱建物跡平面図	12	第34図 S X-1 出土遺物実測図(3)	40
第10図 S B4・5 据立柱建物跡平面図	14	第35図 S X-1 出土遺物実測図(4)	41
第11図 S D-1 出土遺物実測図(1)	15	第36図 S K-6 SD-15平面図	41
第12図 S D-1 出土遺物実測図(2)	16	第37図 遺構検出面出土遺物実測図	42
第13図 S D-1 出土遺物実測図(3)	17	第38図 その他各遺構出土遺物実測図(1)	43
第14図 S D溝跡断面図(1)	18	第39図 その他各遺構出土遺物実測図(2)	44
第15図 S D溝跡断面図(2)	19	第40図 その他各遺構出土遺物実測図(3)	45
第16図 S D-21溝跡遺物出土状況平面図	22	第41図 耕作土中出土遺物実測図(1)	45
第17図 S D-21溝跡出土遺物実測図(1)	23	第42図 耕作土中出土遺物実測図(2)	46
第18図 S D-21溝跡出土遺物実測図(2)	24	第43図 土師器壺実測図	55
第19図 S E-1~3井戸跡平面図断面図	26	第44図 土師器壺実測図	56
第20図 S E-4~7井戸跡平面図断面図	27	第45図 土師器甕実測図	57
第21図 S E-8~10井戸跡平面図断面図	28	第46図 坯口径と底径の比・坯口径と器高 の比	58
第22図 S E-11~12井戸跡平面図断面図	29	第47図 赤焼土器実測図	62
第23図 S E井戸跡出土遺物実測図(1)	30	第48図 研磨痕のある須恵器片・陶磁片実 測図	64
第24図 S E井戸跡出土遺物実測図(2)	31		
第25図 S E井戸跡出土木製品	32		

表 目 次

第1表 据立柱建物跡一覧表	47	第3表 井戸跡一覧表	50
第2表 溝跡一覧表	49	第4表 S X-1 出土土師器破片集計表	51

第5表 宮城県内発見方形周溝墓・円形周
溝一覧表(昭和57年10月現在).....52

第6表 SD-1溝跡出土遺物破片集計表
.....67

図版目次

図版1	I区全景	73
図版2	II区全景	74
図版3	SE-1 井戸跡検出状況	75
図版4	SE-1 井戸跡	75
図版5	SE-1 井戸跡断面	75
図版6	SE-2 井戸跡	76
図版7	SE-2 井戸跡断面	76
図版8	SE-3 井戸跡	77
図版9	SE-4 井戸跡	77
図版10	SE-5 井戸跡	77
図版11	SE-6 井戸跡	78
図版12	SE-6 井戸跡遺物出土状況	78
図版13	SE-6 井戸跡断面	78
図版14	SE-9 井戸跡	79
図版15	SE-9 井戸跡断面	79
図版16	SE-11 井戸跡	80
図版17	SE-11 井戸跡断面	80
図版18	SE-12 井戸跡	81
図版19	SE-12 井戸跡断面	81
図版20	SD-1 溝跡	82
図版21	SD-1 溝跡遺物出土状況	82
図版22	SD-1 溝跡断面	82
図版23	SD-20 溝跡断面	83
図版24	SD-21 溝跡遺物出土状況	83
図版25	SK-13 土壙	83
図版26	SK-2 土壙遺物出土状況	84
図版27	SK-16 土壙遺物出土状況	84
図版28	P-12 遺物出土状況	84
図版29	SI-1 住居跡	85
図版30	SK-6, SD-15 周溝墓	85
図版31	SK-6 土壙遺物出土状況	85
図版32	SX-1 性格不明造構造物出土状況	86
図版33	SX-1	86
図版34	SX-3	87
図版35	現地見学会風景	87
図版36	調査参加者	87
図版37	出土遺物土師器・赤焼土器	88
図版38	出土遺物赤焼土器	89
図版39	出土遺物土師器	90
図版40	出土遺物土師器	91
図版41	出土遺物土師器・土製品・縄文土器	92
図版42	出土遺物中世陶器・青磁・青白磁	93
図版43	出土遺物石製品・鉄製品	94
図版44	出土遺物木製品	96

I. 調査に至る経過

鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号C-135）は、仙台市岩切字鴻ノ巣にあり、七北山川右岸の自然堤防上に位置する遺跡である。

鴻ノ巣遺跡は過去に昭和48年、昭和55年と二度調査が行なわれた。昭和48年の宮城県教育委員会による東北新幹線工事に伴う事前調査では、5世紀頃の竪穴住居跡2軒、中世の井戸跡等が発見され、多くの遺物が出土した。また昭和55年、仙台市教育委員会による調査でも、平安時代から中世に至る溝跡、井戸跡、掘立柱建物跡が発見された。

仙台市近郊の宅地化は同遺跡にも及び、昭和56年5月岩切字鴻ノ巣168-1外において宅地造成に伴う発掘届が提出された為、仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係では、この開発地が遺跡の範囲内に位置していることから、開発者城不動産商事と協議の上、開発予定地の記録保存を目的とした発掘調査を昭和57年4月12日から同年6月31日の間で実施した。

II. 調査要項

遺跡の名称 鴻ノ巣遺跡（仙台市文化財登録番号 C-135）

遺跡所在地 仙台市岩切字鴻ノ巣168-1外

調査面積 993m² 対象面積 2530m²

調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査協力 南城不動産商事

調査担当 仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

課長 永野昌一

主幹兼文化財調査係長 早坂春一

文化財調査係 教諭 齋沼一民 主事 長島栄一

発掘調査・整理及び報告書作成に際しては、下記の方々諸機関から適切な教示・協力をいたしました。記して感謝したい。名古屋大学教授 橋崎彰一氏、東北歴史資料館 藤沼邦彦氏、多賀城跡研究所 白鳥良一氏、東北大学医学部第一解剖学教室 山田格氏、仙台市科学館 佐々木隆氏、宮城県教育庁文化財保護課 小井川和夫氏、加藤道男氏、手塚均氏、森貞喜氏、多賀城市教育委員会 高倉敏明氏、岩切中区町内会々長 相沢林三郎

調査参加者

相沢尚子、菊地雅之、菊地宣之、遠藤正昭、菊池豊、鈴木康弘、池田真弓、莊司真理、守浩子、高橋薰子、三浦和子、氏家弘子、小林広美、神尾恵美子、神尾紀以子、赤間郁子、渡辺紀雄、小島真弓、真中信三、(以上整理も含む)、相沢林三郎、石森留吉、大泉林造、小野寺庄三郎、佐藤徳右二門、斎藤惣一、斎藤敏雄、但木はな子、但木吉蔵、畠中虎勝、永野正、横田要七、永野のぶ子

III. 遺跡の位置と環境

位置と地形環境

位置：鴻ノ巣遺跡は、仙台駅の北東約7kmの仙台市岩切字鴻ノ巣に位置する。本遺跡は、石巻街道を塩釜方向に進み、岩切の今市から高砂方面に向かって七北田川沿いに行くと、東北本線を越えたあたりから余目に至る七北田川右岸に広がっている。岩切駅から南南西約0.5km、多賀城政府地区より西南西3.5kmの地点である。遺跡の範囲は、東西約600m、南北約300mの約18万m²に及んでいる。



- 1. 鴻ノ巣遺跡 (C-135)
- 2. 善應寺横穴群 (C-027)
- 3. 台原横穴群 (C-029)
- 4. 入生沢横穴群 (C-030)
- 5. 東光寺横穴群 (C-032)
- 6. 燐浜遺跡 (C-101)
- 7. 高柳A遺跡 (C-173)
- 8. 高柳B遺跡 (C-174)
- 9. 出花遺跡 (C-176)
- 10. 入生沢遺跡 (C-184)
- 11. 今市遺跡 (C-200)
- 12. 濱下遺跡 (C-218)
- 13. 新宿岡遺跡 (C-219)
- 14. 大正園遺跡 (C-220)
- 15. 岩切畠中遺跡 (C-221)
- 16. 北畠遺跡 (C-237)
- 17. 大蓮寺窯跡 (C-415)
- 18. 高森城跡 (C-502)
- 19. 小幡城跡 (C-509)
- 20. 笹森城跡 (C-512)
- 21. 多賀城跡
- 22. 市川橋遺跡
- 23. 山王遺跡
- 24. 新田遺跡

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

地形環境：鴻ノ巣遺跡の位置する七北田川流域の地形を概観すると、七北田川流域には4段の段丘面が発達し、Ⅰ面は現河床との比高30m、Ⅱ面は13~18m、Ⅲ面は8~10m、Ⅳ面は1~6mの比高を有し、Ⅳ面は下流において沖積面下に没する。泉ヶ岳に源を発する七北田川は、これらの段丘面の間を蛇行し、土砂の堆積と氾濫を繰り返し両岸に自然堤防を発達させている。自然堤防の発達は、国道4号線沿いの七北田方面より下流域が顕著である。（註1）

鴻ノ巣遺跡は沖積面の自然堤防上に立地し、標高は8~9m、七北田川との比高は3m前後である。また、南側の水田面より1~2m程高くなっている。自然堤防上は、これまで畠地として利用されてきたが、近年宅地化が著しい。

歴史的環境

鴻ノ巣遺跡周辺の遺跡をみると、古墳時代以前の遺跡は現在のところ確認されておらず、不明な点が多い。よって、ここでは古墳時代以降の遺跡、遺物について概観する。

古墳時代：高塚を有する古墳は、燕沢遺跡と同一丘陵上に千人塚古墳が一基のみ確認されている。千人塚古墳は、すでに墳丘の形も崩れしており、詳細は不明である。また、高塚古墳のあった可能性は、本遺跡対岸の新田遺跡で指摘されている。さらに、岩切小学校所蔵の円筒埴輪は、同校庭より出土したとされ、観察によれば体部に三本の凸帯が貼付けられ、底部から二段目と三段目に互いに直交する凹孔が二対穿っていたと考えられる。周辺に古墳のあった可能性を示すものと思われる。

集落としては、本遺跡対岸の自然堤防上に新田遺跡があり、古墳時代中期（南小泉式期）の遺物を出土している。また、岩切畠中遺跡からは、古墳時代後期（栗原式期）の住居跡2軒が検出されている。

古墳時代終末～奈良時代：西方の丘陵地帯に横穴古墳群が形成され始める。善応寺横穴古墳群は、推定で100基をこえると言われ、これまでそのうちの23基が調査されている。古墳からは直刀、刀子、金環、勾玉等が出土し、7世紀から8世紀頃までの古墳群と考えられている。また、人生沢、台屋敷古墳群は総数70基ほどで、中には薔薇形や家形の玄室が残っているものもある。この時代には、本遺跡の東北約3kmに多賀城が造営され、東北の一中心地として陸奥国の国府、鎮守府等がおかれたのである。

平安時代：西方丘陵上の燕沢遺跡には、宮衙風建物が建っていたと考えられ、周辺から施主文軒丸瓦等が採集されている。本遺跡でも平安時代以降中世に至るまで、数多くの遺物を出土し、集落としての発達を窺うことができる。

中世以降：源賴朝の平泉征伐の後、陸奥國留守職に任命された伊澤家景以来の留守氏の居城と言われる岩切城が、高森山の頂上部に構築された。岩切城が記録に出るのは、觀応の擾乱—觀応2年（1321年）一の時で、岩切城の他に余目城という名も現れる。この他にも以前より稲

荷館の凝定地とされていた(註2)、稻荷神社のある岩切畠中遺跡では中世の大溝、掘立柱建物跡等が検出され、館の存在が考えられる。また、東光寺境内には嘉慶2年銘(1327年)の板碑、鎌倉時代の作と推定される磨崖仏等が残っている。留守家文書には、鎌倉時代後半に冠屋市場・河原宿五日市場・在家などの記載が見られ、七北田川(冠川)沿いに商業活動が営まれていたことが指摘されている。このように岩切を中心とする附近一帯は中世における仙台平野の政治・経済・文化の「中心地」として発達を遂げたのである。

以上のように鴻ノ巣遺跡の周辺は、古墳時代より人々の生活の跡を知ることができる。中でも、中世に至っては留守氏との関係で著しい発展を遂げ、郷土史の中でも極めて重要な地域であると言えよう。

鴻ノ巣遺跡の考古学的調査：これまで鴻ノ巣遺跡で行なわれた発掘調査の概要を述べておく。
○昭和48年、宮城県教育委員会による東北新幹線工事に伴う事前調査。

調査地点：東北新幹線路線敷地内

七北田川南岸からC区、A区、B区の3調査区を設定し、路線敷地内約2700m²のうち約1100m²について発掘調査を実施している。C区からは古墳時代中期(南小泉式期)の住居跡2軒、焼土遺構1基、土壙1基等が検出され、A区からは焼土遺構が2基、B区からは井戸跡1基、土壙5基、溝跡9条等が検出されている。遺物は、ほとんどが遺物包含層からで、土師器、須恵器、中世陶器、石製模造品、砥石、石器、土製品、鉄製品、古錢等が出土している。(註3)

○昭和55年、仙台市教育委員会による宅地造成に伴う事前調査

調査地点：岩切字鴻ノ巣80外

開発予定地内の約540m²について発掘調査を実施し、調査の結果、井戸跡11基、土壙19基、焼土遺構1基、溝跡10条、掘立柱建物跡13棟等が検出されている。遺物は、土師器、須恵器、中世陶器、青磁、瓦、小刀、古錢、石臼、木桶等が出土している。遺構、遺物とも平安時代から中世にかけてのものであり、古墳時代にまで遡るものは検出されていない。(註4)

○昭和56年、仙台市教育委員会による住宅新築に伴う試掘調査

調査地点：(I) 岩切字鴻ノ巣96-1

(II) 岩切字鴻ノ巣71-1

鴻ノ巣遺跡内の二ヶ所において住宅新築が行なわれることにより、各々トレーナーを設定し、試掘調査を実施している。

(I) 地点では溝跡1条のみ検出され、基本層位は第1層暗褐色粘土あるいは粘土質シルト(旧耕作土)、第2層黒褐色あるいは褐灰色粘土、第3層にぶい黄褐色砂(地山)である。旧表土から第3層上面までは120cm程度である。

(II) 地点では溝跡2条のみ検出され、基本層位は第1層にぶい黄褐色シルトあるいは粘土

質シルト(旧耕作土)、第2層褐灰色粘土質シルト、第3層黒褐色あるいは褐灰色粘土、第4層浅黄色粘土(地山)である。旧耕作土から第4層上面まで100~120cm程である。

これらのことから、鴻ノ巣遺跡内において遺構の分布する密度に違いはあるものの、遺構は遺跡全体に拡がっていると考えられる。しかし、古墳時の遺構、遺物、遺物包含層の分布については、遺跡の中で限られているようである。

IV 調査の方法と概要

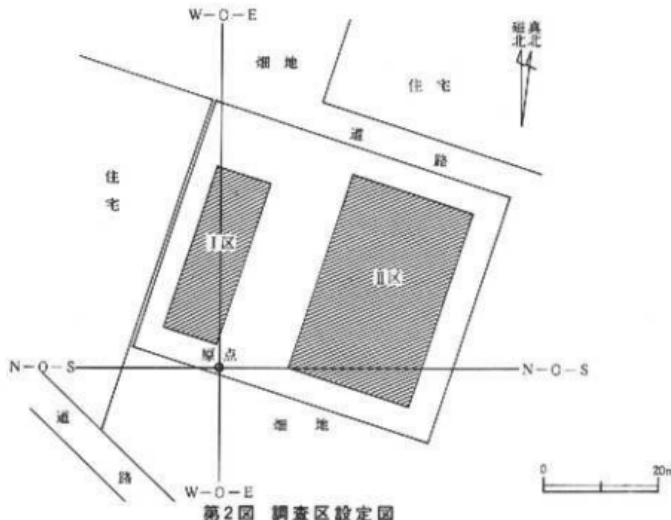
4月5日に基本層位の観察の為、試掘調査を行ない、その結果、耕作土から深さ60cm程で地山面を検出した。本調査は4月12日より実施し、対象面積2530m²のうち排土等を考慮して調査区(I区南北28m×東西10m、II区南北35m×東西20m)総面積993m²を設定した。I、II、III層まで重機で排土し、遺構の検出を行なった。

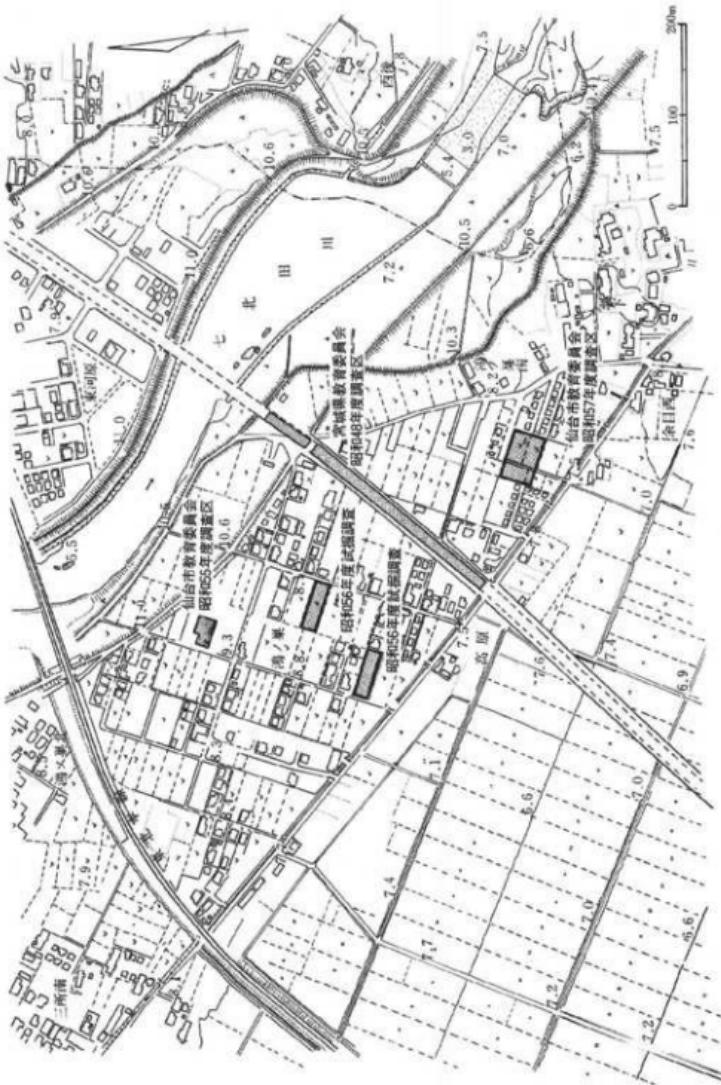
○測量の基準原点は、I区調査区真北方向に3mの地点とした。測量基準線は、原点より磁北に合わせて設定し、北側のラインN—、南側のラインS—、東側のラインE—、西側のラインW—とし、基本単位とする距離数で表示した。

○標高は仙台市道路部設置のA—No.267原点7.357mから用い、水系の標高はI、II区とも7.500mに統一した。

○平面図、断面図は²⁰に統一し、特に遺物の出土量の多い遺構、及び実測の必要と考えられる遺構に関しては²⁰に作成した。

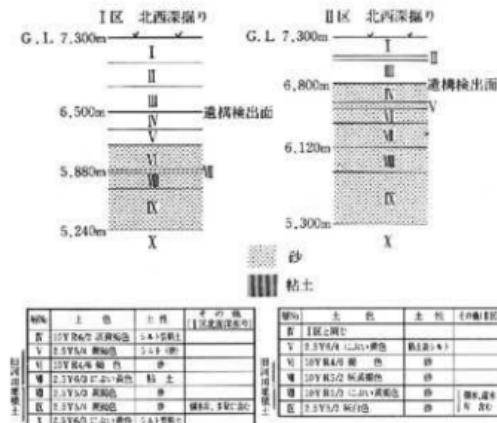
○整理作業の結果、SK—1、4、9、10土壤、SD—9溝跡は消滅する。





第3図 調査区位置図

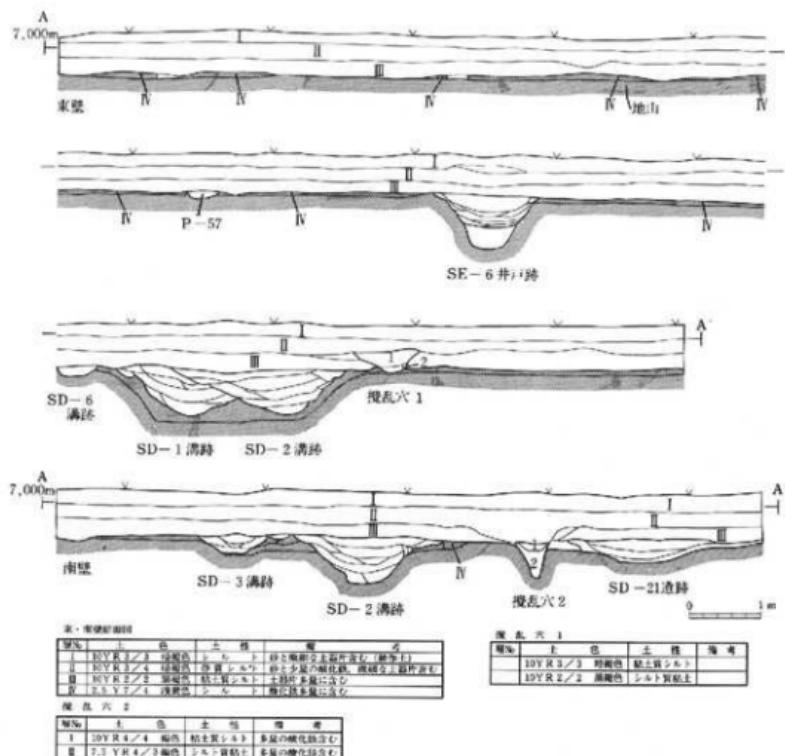
V 基本層位



第4図 基本層位模式図

表土から遺構確認面までは、I区で60~70cm程、II区で50~60cm程ある。調査区の基本層位は4層に分けられる。I・II層は耕作土で厚さ40cm前後、暗褐色シルト及び砂質シルトである。少量の遺物を含む。III層は旧耕作土で厚さ30cm前後、黒褐色粘土質シルトである。少量の土器片を含む。IV層は浅黄色シルトの地山面で、表土から50~70cm下で検出した。

IV層より下層においては、遺構、遺物等は発見されなかった。



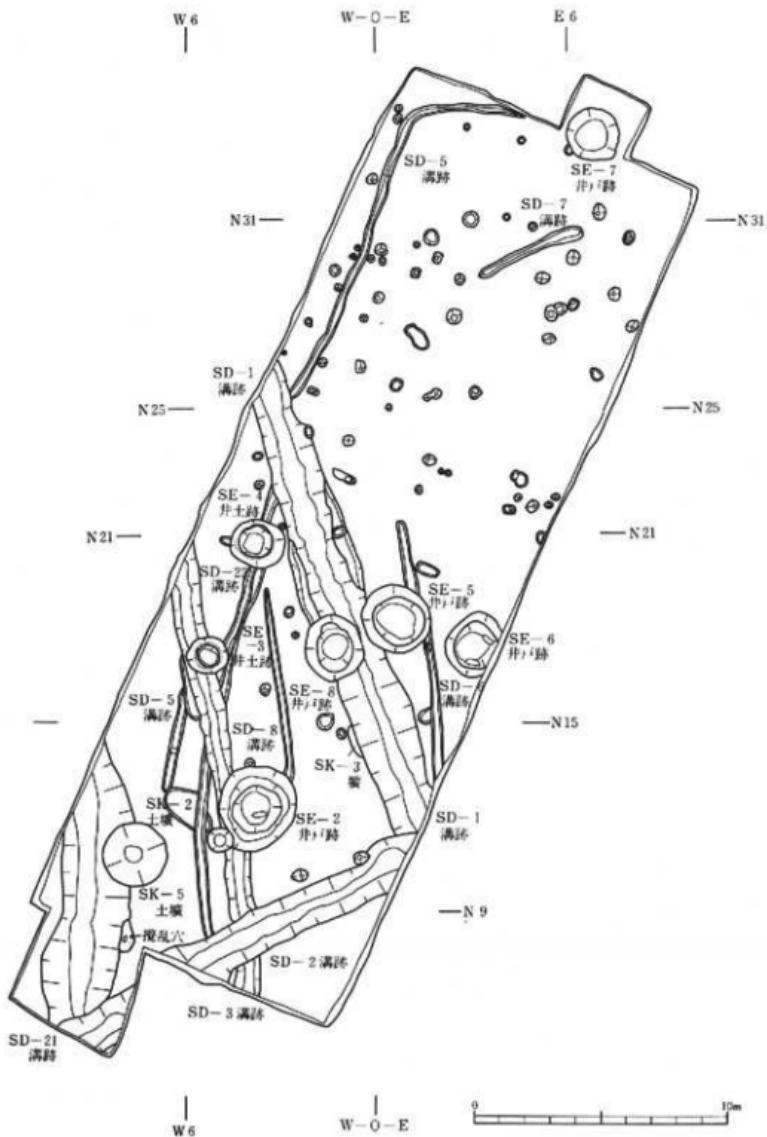
第6図 I区東・南壁断面図

VI 発見遺構と出土遺物

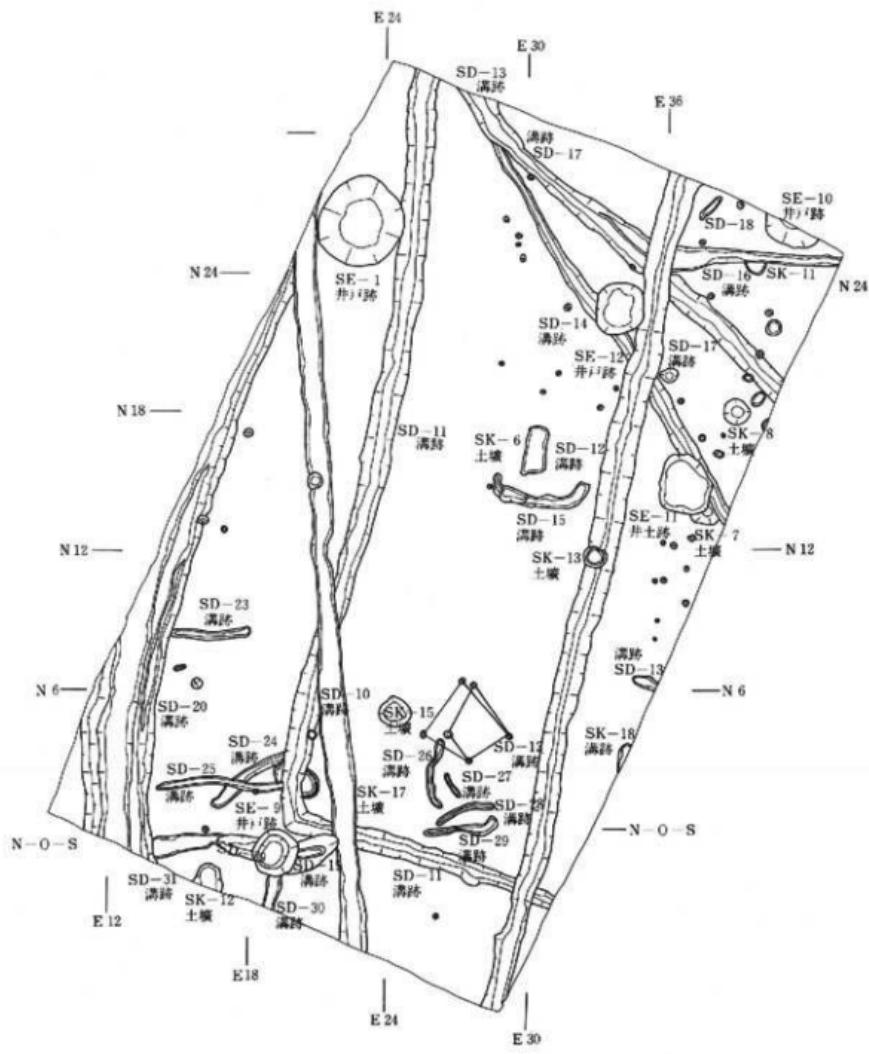
今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4軒、掘立柱列1棟、井戸跡12基、溝跡31条、土壤14基、性格不明遺構2等である。これらの各遺構、遺物について記述する。

1. 竪穴住居跡

S I-1 竪穴住居跡 SX-1 堆積土を除去したのち地山上面を精査した結果、ピットを6ヶ検出した。壁、床面等は削平されていたが、検出されたピットの配列関係から主柱穴としてピット1、2、3、4とピット1、2、3、5が考えられた。柱穴間の距離はピット1—ピット2が220cm、ピット2—ピット3が200cm、ピット3—ピット4が270cm、ピット4—ピット1が300cm、ピット3—ピット5が310cm、ピット5—ピット1が280cmを計り、いずれも柱穴の配置は台形を呈す。



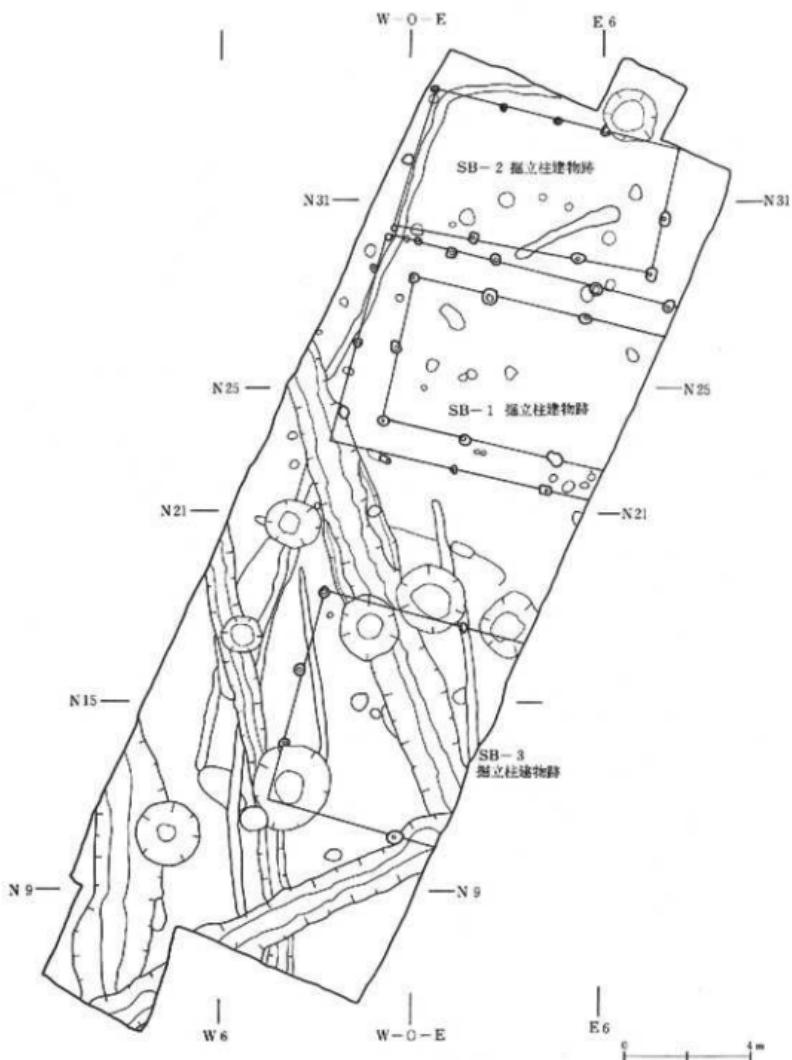
第7図 調査区I区遺構配置図



第8図 調査区II区遺構配置図

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

2. 捶立柱建物跡



第9図 SB 1～3 捶立柱建物跡平面図

掘立柱建物跡は掘立柱列も含めて5棟確認された。また柱穴は調査区内で約130を数え、さらに多くの建物跡が存在していたと考えられるが、明確な建物跡として確認されるに至らなかった。柱穴からの出土遺物はSB-1・2掘立柱建物跡から出土したのみで、その他は殆どなく、時代の決定は困難であるが、他の構造との重複関係から中世のものと考えられるに至った。

SB-1 掘立柱建物跡 SB-1はI区北半で検出された三面に庇が付く東西棟建物跡である。東西桁行2間以上(西から2.7+3.0m)、梁行2間(2.4+2.4m)、桁行総長5.5m以上、梁行総長4.8mである。庇の出は、南側で1.0m、西側で1.2m、北側で1.0~1.1mである。建物の方向は南北柱列でN-5°-Eである。柱穴掘り方はほぼ円形・方形で一辺30~50cm、深さ10~20cm、柱痕跡は平均直径10~15cm程である。柱穴掘り方埋土は、黒褐色シルトである。SD-1、5溝跡を切る。

〈出土遺物〉 ピット22、ピット25、ピット27からロクロ使用の上師器環、甕、ピット56から陶器片等を出土している。

SB-2 掘立柱建立跡 SB-2はSB-1建物跡の50cm北側に近接して検出された東西棟建物跡である。東西桁行4間(西から2.3+1.8+1.5+2.4m)、梁行2間(2.4+2.4m)、桁行総長8.0m、桁行総長4.8mである。建物の方向はN-9°-Eである。東側桁柱の南1東3の柱穴は検出されなかった。柱穴掘り方は円形、方形で一辺20~40cm、深さ10~40cm、柱痕跡は平均直径10cm程である。柱穴掘り方埋土は黒褐色シルト及び、暗褐色シルトである。SD-5溝跡を切り、SE-7井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉 ピット19からロクロ使用の上師器環、甕片を出土している。

SB-3 掘立柱建物跡 SB-3はI区南半で検出された東西棟建物跡である。井戸跡、溝跡との重複で北側桁柱列は検出されなかった。東西桁行2間以上、梁行3間(北より2.6+2.4+2.1)、桁行総長4.0m以上、梁行総長7.1mである。建物の方向は南北柱列でN-8°-Eである。柱穴掘り方はほぼ円形で直径30~50cm、深さ20cm程、柱痕跡は直径10cm程である。柱穴掘り方埋土は黒褐色及び、灰黄褐色シルトである。SD-1、6溝跡、SE-2井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉 ピット68より土師器片を1点出土している。

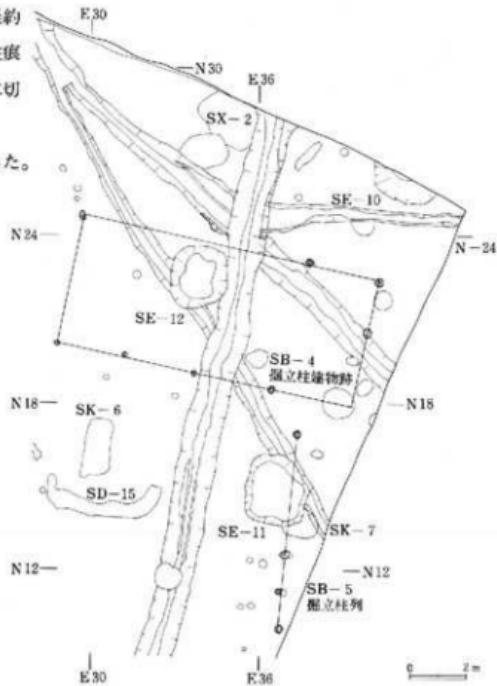
SB-4 掘立柱建物跡 SB-4はII区北半で検出された東西棟建物跡である。東西桁行4間(西より2.5+2.5+2.8+2.9m)、梁行(北より1.9+2.7m)、桁行総長10.7m、梁行総長4.6mである。建物方向はN-12°-Eである。柱穴掘り方はI形及び梢円形で、直径約20~35cm、深さ6~20cm程である。柱痕跡は認められない。SD-11井戸跡、SK-8土壤に切られている。

〈出土遺物〉 ピット81より上師器片を1点出土している。

SB-5 掘立柱建物跡 SB-5はII区中央部東側で検出された一本柱列である。南北5間と推定され、柱間寸法は1.4~1.5mで総長は7m程である。柱列方向はN-5°-Eである。柱

穴掘り方は円形及び梢円形で、直径約20~30cm、深さ10~27cmである。柱痕跡は認められない。SE-7 井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉 遺物は出土しなかった。



第10図 SB 4・5 墓立柱建物跡平面図

3. 溝 跡

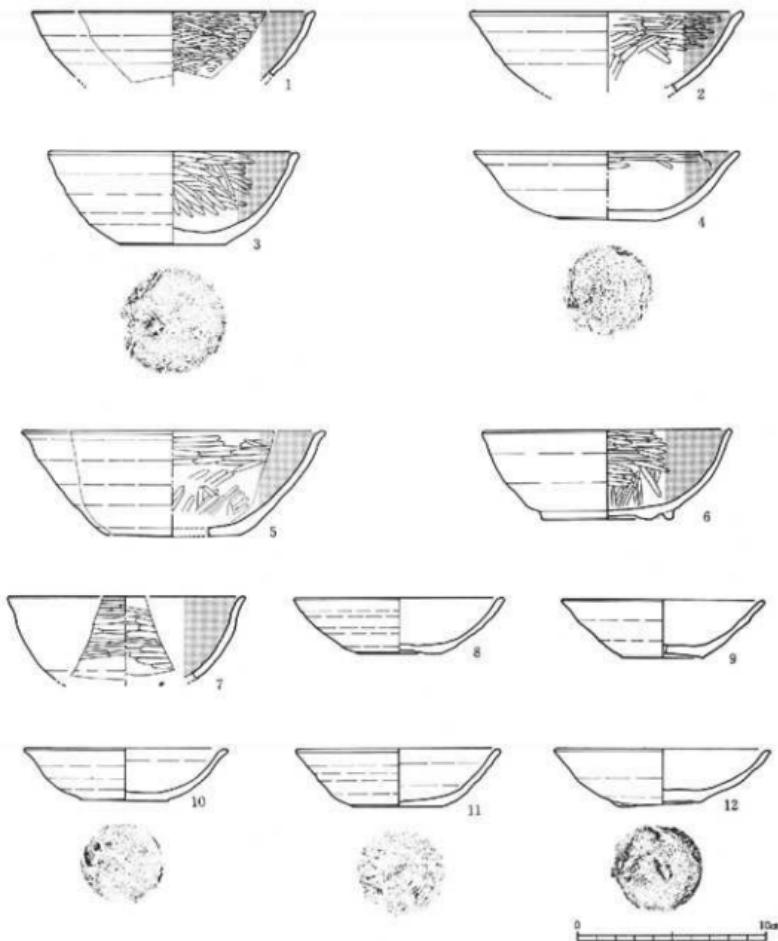
溝跡は調査区内より31条検出されたが、全て他造構との重複ないし、調査区外に延びている。

SD-1 溝跡 調査1区の中央部にはほぼ南北方面に延びる溝跡である。上端幅120~210cm、底幅30~70cm、深さ60~80cm程で、断面形はほぼ逆台形を呈し、調査区中央付近では壁に段を有し、底面はほぼ平坦である。堆積土は大別して4層に分けられ、1層は褐灰色シルト、2層は黒色粘土質シルト、3層は灰黄褐色シルト、及び褐灰色シルト、4層は褐灰色シルトである。SD-5 溝跡、SK-3 土壌を切り、SD-2 溝跡、SE-5、8 井戸跡に切られる。

〈出土遺物〉

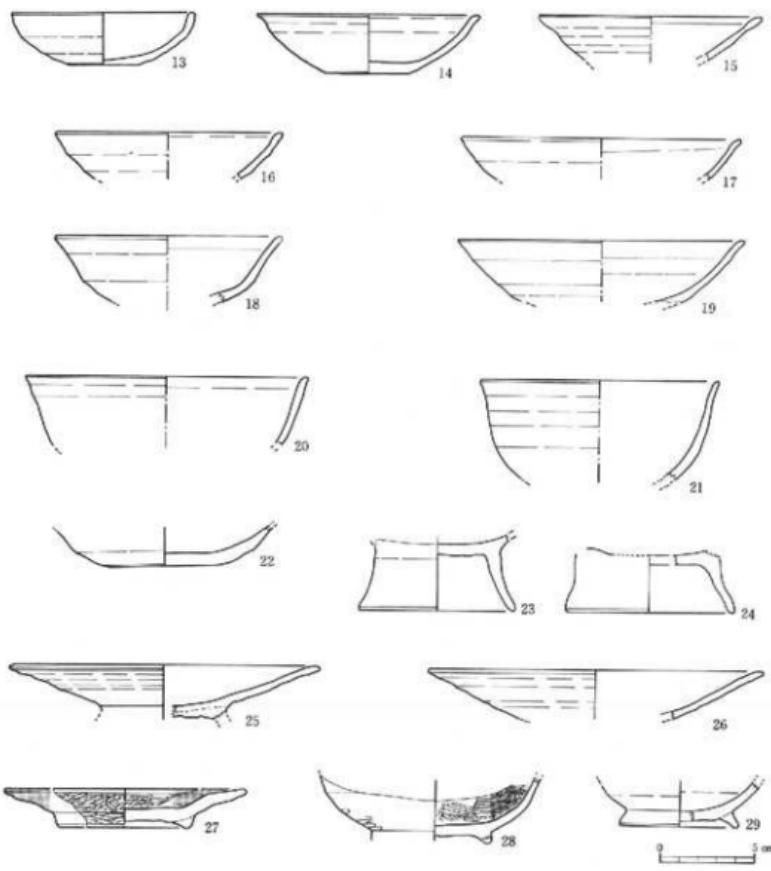
土師器

坏 いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部まで緩やかに外傾する(第11図1~5、7)。いずれも内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている。底部切り離し技法は回転糸切りによるもの(第11図3、4、5)と底部欠損の為不明であるものとがある(第11図1、2)。



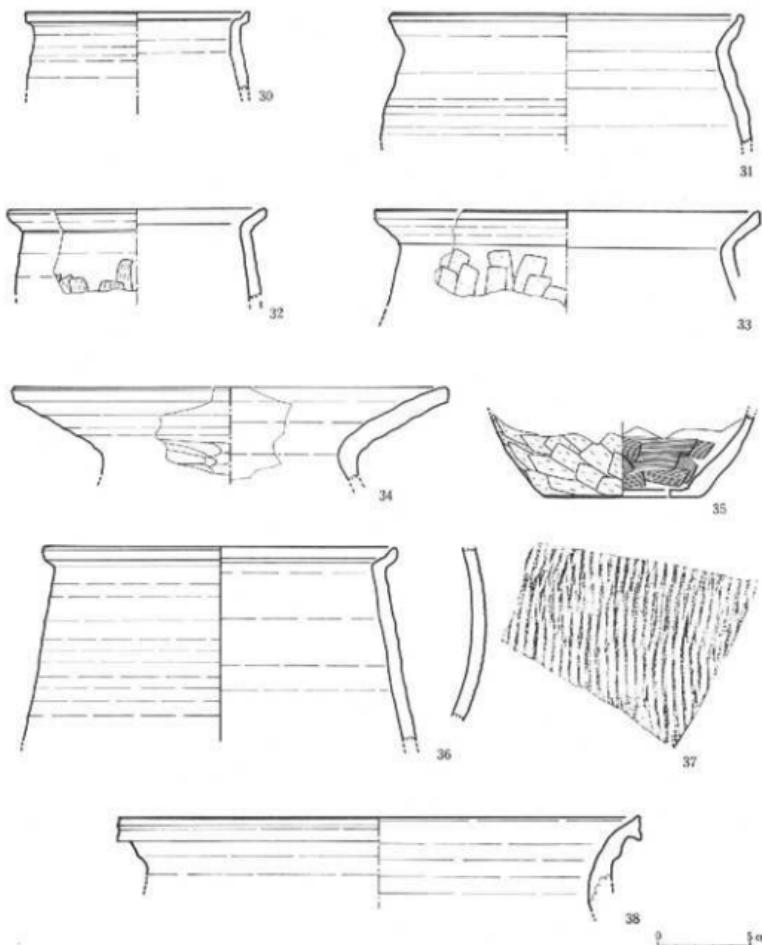
番号	建設年	種別	形状	部位	外観調査			内面調査			高さ	口幅	底径	保存	写真類
					口縁部	体	底	口縁部	体	底					
1	D-4	土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	14.9cm	11.1	10.5	△	
2	D-9	土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	14.5	11.1	10.5	△	
3	D-8	土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	研磨系	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	5.0	13.2	5.5	△	37-1
4	D-3	土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	9.7	13.9	9.2	△	37-3
5	D-20	土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	研磨系	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	5.6	15.6	7.6	△	
6	D-7	土器	高台付盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	研磨系	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	4.8	13.5	7.0	△	37-5
7	D-25	土器	盆	底	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	ハラミガキ	12.6	11.1	10.5	△	
8	D-2	赤繪土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	同施系	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	3.0	11.1	4.4	△	38-1
9	D-17	赤繪土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	同施系	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	9.1	10.0	4.4	△	37-7
10	D-12	赤繪土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	同施系	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	2.8	10.8	4.6	△	37-11
11	D-18	赤繪土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	同施系	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	5.0	11.0	4.6	△	37-8
12	D-11	赤繪土器	盆	底	ロクロナデ	ロクロナデ	同施系	ロクロナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	9.1	11.4	4.2	△	38-2

第11図 SD-1溝跡出土遺物実測図(1)



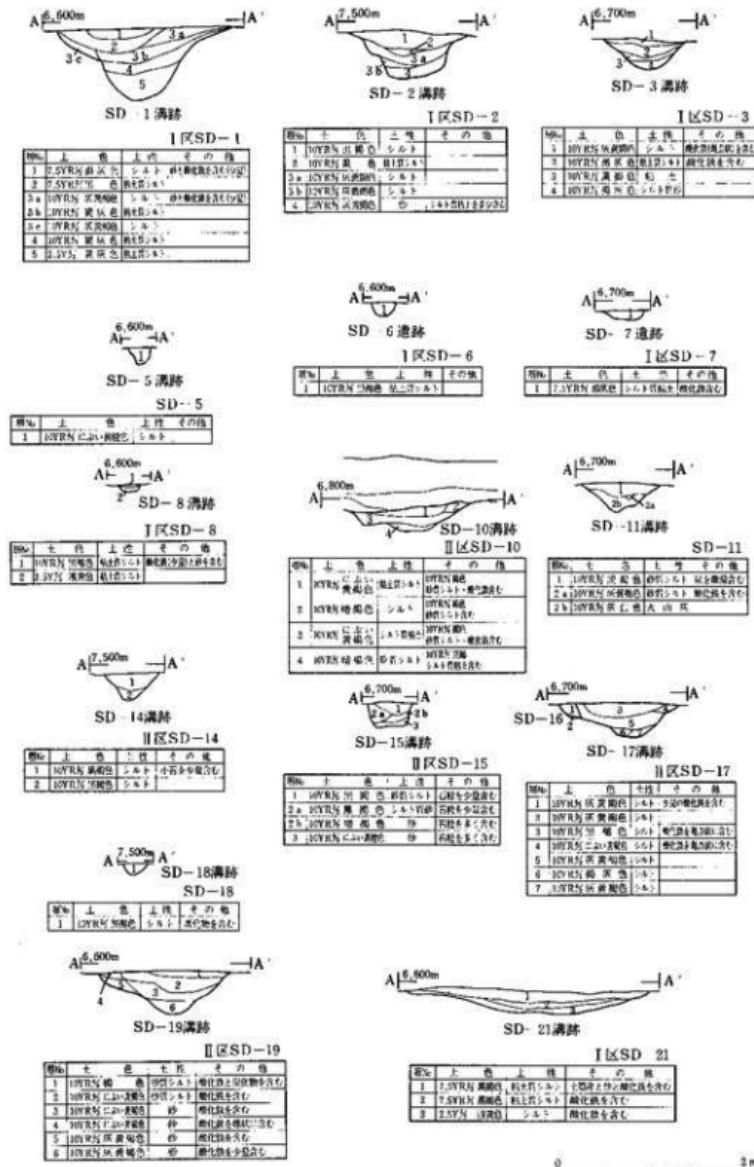
番号	発掘No.	種別	断形	部位	外観調査		内観調査	法面	堆積	写真回数
					寸法	形態				
13	D-19	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	37-6
14	D-10	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	38-3
15	D-27	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
16	D-14	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
17	D-15	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
18	D-24	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
19	D-13	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
20	D-21	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
21	D-22	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
22	D-16	水桶土器	弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
23	D-45	水桶土器	高台付弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
24	D-44	水桶土器	高台付弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	38-10
25	D-30	水桶土器	高台付弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	38-9
26	D-31	水桶土器	高台付弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34
27	D-28	土器	弦	堆	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	34
28	D-29	土器	高台付弦	堆	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	ヘラミガキ	38-11
29	D-71	土器	高台付弦	堆	ロクロナギ	ロクロナギ	同様系切	ロクロナギ	ロクロナギ	34

第12図 SD-1溝跡出土遺物実測図（2）



番号	登録No.	種類	器形	層位	外 壁				内 壁				法 線	現存	可視面積
					上縁部	中 縁	下 縁	左側部	右側部	底 部	左側部	右側部			
30	D-35	土器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	11.5		
31	D-39	土器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	19.0		
32	D-38	土器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	13.8		
33	D-37	土器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	20.6		
34	D-36	土器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	23.4		
35	D-42	土器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	26.4		
36	D-40	土器	壺	地1～2	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	18.6		
37	E-31	瓦器	壺	地1	ロテロナダ	ロテロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	27.4		
38	E-30	瓦器	壺	地1	ロクロナダ	ロテロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	ロクロナダ	27.4		

第13図 SD-1 溝跡出土遺物実測図（3）



第14図 溝跡平面図・断面図

高台付環 いずれも製作に際しロクロを使用し、内面はヘラミガキ、黒色処理が施されている(第11図6、第12図28)。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がる。

妻 妻頸部や口縁部片のため器形は不明である。いずれも頸部でくびれ、口縁部は外反か、もしくは外傾する(第13図30~33、36)。頸部から大きくなびれるもの(第13図34)、体部下半へラケズリ、体部上半欠損のため不明のものなどである(第13図35)。

段皿 内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施され、高台は低く、皿部は直線的に大きく開く(第12図27)。

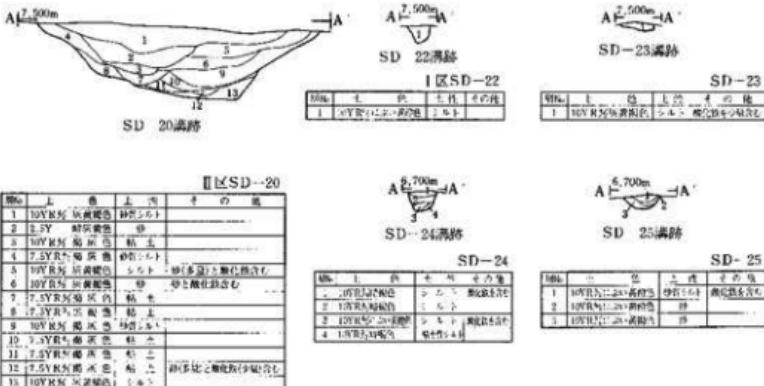
須恵器 妻の口・頸部破片で、頸部が直線的に外傾し、口縁部は外反して端部が上、下側方に突き出す(第13図38)。体部片のみのもの(第13図37)もある。

赤焼土器

环 いずれも製作の際にロクロを使用している。体部から緩やかに立ち上がり、口縁部で直立ぎみのもの(第11図8、第12図20)。体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの(第11図9、11、第12図16~19)。体部から緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外傾するもの(第11図10、12、第12図14、15)。いずれも底部は回転糸切り、無調整である。

高台付环 いずれも製作の際にロクロを使用している。环部は直線的に外傾し、大きく開くもの(第12図25、26)。高台部はわずかに開き、端部でやや細まる(第12図23、24)ものがある。

SD-2溝跡 調査1区の南壁寄りで検出され、ほぼ東西方面に延び、さらに南拡張区まで延びる溝跡である。上端幅120~130cm、底幅30~60cm、深さ50cm程である。断面形はほぼ逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。堆積土は大別して1層に分けられ、1層は黒褐色シルト、



第15図 溝跡平面図・断面図

2層は黒色粘土質シルト、3層は灰黄褐色シルト、及び砂である。SD-1、3、21溝跡を切っている。

〈出土遺物〉 1層中より土師器壺、甕、須恵器壺、馬の歯、4層よりロクロ使用の土師器高台付壺片等を出土している。

SD-3溝跡 調査I区南半で検出され、ほぼ南北方向に延びる。上端幅80~100cm、底幅30cm程、深さ20~30cm程である。断面形は緩やかなV字型である。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は褐灰色粘土質シルト、2層は黒褐色粘土、3層は砂を含む褐灰色シルトである。SD-4、22溝跡を切り、SD-2溝跡、SE-2、3井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉 少量の非ロクロの土師器甕の細片を出土している。

SD-4溝跡 調査I区南半で残存総長3mを検出された。上端幅30cm、深さ5cm程で、断面形は逆台形である。SD-3溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-5溝跡 調査I区西壁に沿って検出され、調査区北壁付近で屈曲し東方に延びる溝跡である。上端幅30~40cm程、底幅10~20cm、深さ15~20cm程、断面形はU字型である。堆積土はにぶい黄橙色シルトである。SD-1溝跡に切られている。SD-22溝跡と同一のものと考えられる。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-6溝跡 調査I区中央東壁付近で検出され、南に延びる溝跡である。上端幅20~30cm、底幅10cm程、深さ10cm程、断面形は緩やかなU字型を呈する。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。SE-5井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉 非ロクロ土師器甕片を数点出土している。

SD-7溝跡 調査I区北半中央部で検出され、やや東西方向に延びる溝跡である。上端幅30~40cm、底幅10cm程、深さ10~15cm程である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は褐灰色シルト質粘土である。

〈出土遺物〉 土師器片を出土している。

SD-8溝跡 調査I区南半中央部で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅20cm、底幅15cm、深さ10cm程である。断面形は逆台形を呈し、堆積土は2層に分けられ、1層は黒褐色粘土質シルト、2層は浅黄色粘土質シルトである。SE-2井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-10溝跡 調査II区北半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅は100~120cm、底幅60~80cm、深さ10~20cm程である。断面形は逆台形で、緩い立ち上がりの壁で、底面はほぼ平坦である。堆積土はにぶい黄褐色粘土質シルト、及びシルト質粘土、暗褐色シルト・砂質シルトである。SD-11、20溝跡を切っている。

〈出土遺物〉 繩文土器片(第40図1)、土師器片、須恵器片でいずれも小破片である。

SD-11溝跡 調査II区北半で検出され、南北方向、南側で東に屈曲して「L」字状に延びる溝跡である。上端幅は70~100cm、底幅20~30cm、深さ20~40cm程である。断面形は舟底型で緩やかに立ち上がる。堆積土は黒褐色及び灰黃褐色砂質シルトである。SD-19、24、25溝跡、SK-17土壌を切り、SD-10、12溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 上師器環(第39図8)、甕(第38図6)、須恵器、瓦、中世陶器、石製模造品(第40図4)、粘土塊等である。

SD-12溝跡 調査II区北半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅は約100cm~130cm、底幅20~40cm、深さ20~60cm程である。断面形は舟底形である堆積土は黒褐色砂質シルト及び褐灰色粘土質シルト、浅黄褐色シルトである。SD-11、14、16、17溝跡を切り、SE-12井戸跡、SK-13土壌に切られている。

〈出土遺物〉 繩文土器片(第40図3)、土師器環(38図3、第39図3)、高环(第38図2)、甕(第38図7)、中世陶器、粘土塊等である。

SD-13溝跡 調査II区中央西端で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅40~50cm、底幅20~35cm、深さ5~20cm程である。断面形はU字型で、堆積土は褐色シルト、黒褐色砂質シルトである。

〈出土遺物〉 ツマミ状の土製品が出土している。

SD-14溝跡 調査II区北半で検出され、南東方向に延びる溝跡である。上端幅40~70cm、底幅20~30cm、深さ10~20cm程である。断面形は逆台形で、堆積土は黒褐色シルトである。SD-9、12、17溝跡、SE-11、12井戸跡、SK-7土壌に切られている。

〈出土遺物〉 土師器の小破片のみである。

SD-16溝跡 調査II区北半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅40~100cm、底幅20~80cm、深さ10cm程である。断面形は逆台形で、堆積土は暗褐色砂質シルト及び灰黃褐色シルトである。SK-11土壌を切り、SD-12、17溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器の小破片のみである。

SD-17溝跡 調査II区北西隅で検出され、南東方向に延びる溝跡である。上端幅60~100cm、底幅30~40cm、深さ30~40cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は大別して2層に分けられ、1層は黒褐色及びにぶい黄褐色シルト、2層は灰黃褐色及び褐灰色シルトである。SD-14、16溝跡、SK-16土壌を切り、SD-9、12溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器の小破片のみである。

SD-18溝跡 調査II区北半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅30cm、底幅20cm、深さ10cm程である。断面形はU字形で、堆積土は黒褐色シルトである。

〈出土遺物〉 土師器の小破片のみである。

SD-19溝跡 調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅80~120cm、底幅20cm、深さ30~50cm程である。断面形は舟底形である。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は褐色砂質シルト、2層はにぶい黄褐色砂質シルト及び砂、3層は灰黄褐色砂である。SD-10、11、31溝跡を切り、SE-9井戸跡に切られている。

〈出土遺物〉 糙繩土器(第40図2)、赤焼土器壺(第39図9)、中世陶器、粘土塊等である。

SD-20溝跡 調査Ⅱ区西半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅280~300cm、底幅100cm、深さ70~80cm程である。断面形は扁平な逆台形である。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は灰黄褐色砂質シルト、2層は灰黄褐色シルト質砂及び砂、3層は褐灰色粘土及び灰黄褐色シルト質粘土である。SD-23、31溝跡を切り、SD-10溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器片、中世陶器片、木片、種子、馬の歯等である。

SD-21溝跡 調査Ⅰ区南西コーナーで検出され、ほぼ南北方向に延びる溝跡である。西側上端部が調査区外に延びている。上端幅250cm、深さ最深部で30cm程である。断面形は平坦な底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は2層に分けられ、1層は黒褐色粘土質シルト、2層は浅黄色シルトである。SK-5土壤、SD-2溝跡に切られている。

〈出土遺物〉

土師器甕 いずれもロクロを使用せず、体部は球形で、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲するもの(第17図1、3、4)や体部上半欠損しているが、体部は球形であると考えられるもの(第17図6、7)などがある。

壺 底部片でロクロを使用していないもの

(第18図8、9)である。

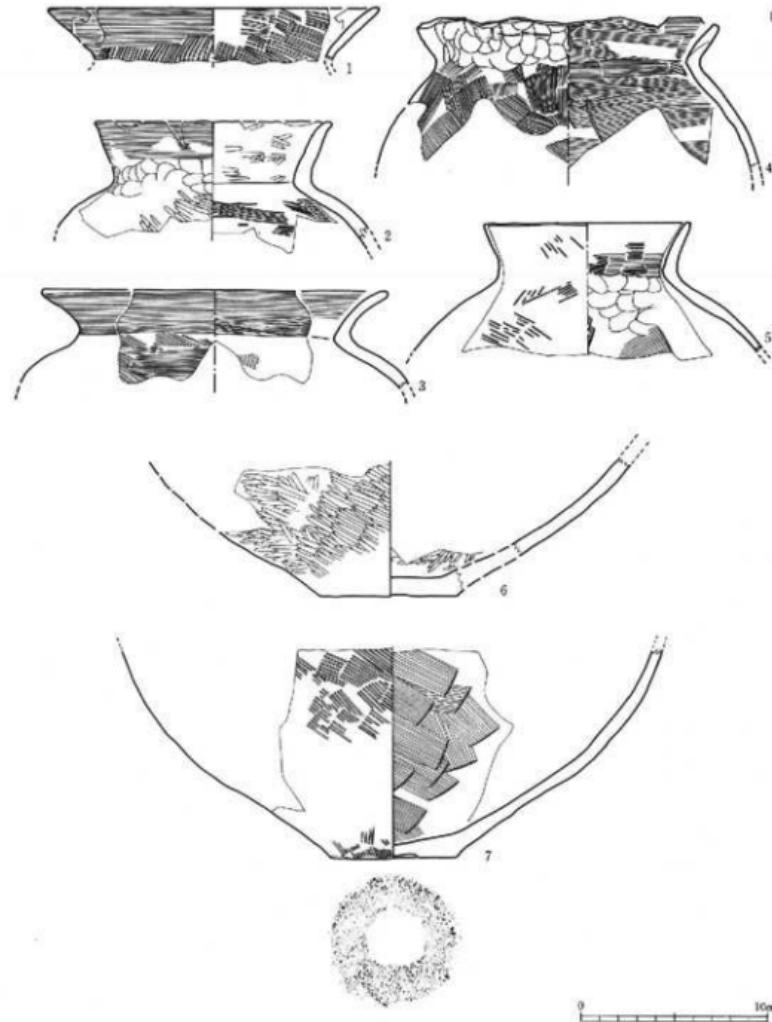
須恵器甕 体部破片である。

土製品 フイゴ羽口は復元径4.1cmで、ほぼ円筒形である(第18図11)。

SD-22溝跡 調査Ⅰ区南半で検出され、ほぼ南北方向に延びる溝跡である。上端幅30~40cm、底幅15cm程、深さ10~20cm程である。断面形は扁平逆台形である。堆積土は大別して2層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層はにぶい黄色シルトである。SD-1、2、3溝跡、SE-3、4井戸跡に切られ、SK-2土壤を切っている。



第16図 SD-21溝跡遺物出度平面図



番号	器種No.	相別	形態	部位	外 壁 面			内 壁 面			整 形			法 量	残存	写真用紙
					口縁部	体 部	底 部	口縁部	体 部	底 部	器品	口径	底径			
1	C-8	土師器	壺	底1	ミコナテバタス			ハラカヌ						17.6		
2	C-5	土師器	壺	底2	ミコナテバタス	ミコナ		ミガニキハラカヌ						12.7		41-3
3	C-6	土師器	壺	底1	ミコナテバタス			ハウヌスコロゴ						18.3		
4	C-4	土師器	壺	底2	ハケメヌダハラカヌ			ハラカヌ						16.2		
5	C-7	土師器	壺	底1	ハラカヌ			ハウヌスコロゴ	ハラカヌ					10.6		41-4
6	C-3	土師器	壺	底1	ハラカヌウタス	ウタス		ハラカヌ	ハラカヌ					7.2		40-1
7	C-2	土師器	壺	底1	ハラカヌ	ハラカヌ		ハラカヌ	ハラカヌ					6.8		

第17図 SD-21溝跡出土遺物実測図(1)

〈出土遺物〉 土師器环、高环、甕、須恵器片等を出土している。

SD-23溝跡 調査II区西半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅30~40cm、底幅10~20cm、深さ5cm程である。断面形はU字形で、堆積土は灰黄褐色シルトである。SD-1~20溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器、器台片（第38図1）のみである。

SD-24溝跡 調査II区南半で検出され、ほぼ東西方向に延びる溝跡である。上端幅40~60cm、底幅10~40cm、深さ10cm程である。断面形はU字形で、堆積土は暗褐色及びにぶい黄橙色シルトである。SD-11、25溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

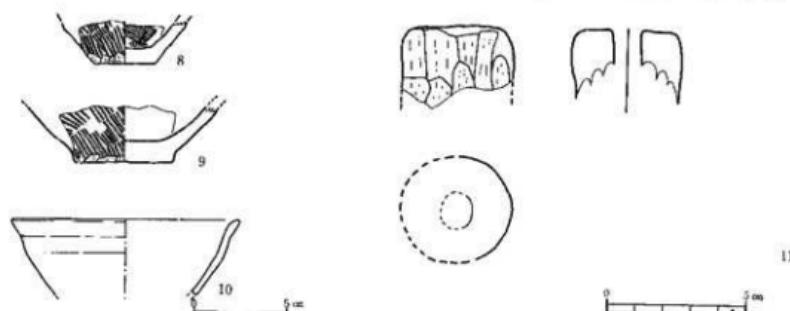
SD-25溝跡 調査II区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅30~40cm、底幅20cm、深さ10cm程である。断面形はU字形である。堆積土は大別して2層に分けられ、1層はにぶい黄橙色砂質シルト及び砂、2層はにぶい黄褐色砂である。SD-24溝跡を切り、SD-11溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器の小破片のみである。

SD-26溝跡 調査II区南半で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端部20~30cm、底幅10~20cm、深さ5cm程である。断面形はV字形で、壁は緩い立ち上がりを呈する。堆積土は黒褐色砂である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-27溝跡 調査II区南半で検出され、ほぼ東西方向に延びる溝跡である。上端幅20~30cm、底幅5~10cm、深さ2~10cm程である。断面形はU字形で、壁は緩い立ち上がりを呈する。



第18図 SD-21溝跡出土遺物実測図(2)

堆積土は黒褐色砂である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-29溝跡 調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅30~50cm、底幅10~25cm、深さ2~8cm程度である。断面形はU字形で、壁は緩い立ち上がりを呈する。堆積土は黒褐色砂である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-30溝跡 調査Ⅱ区南半中央で検出され、南北方向に延びる溝跡である。上端幅50~60cm、底幅30~45cm、深さ5cm程度である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

SD-31溝跡 調査Ⅱ区南半で検出され、東西方向に延びる溝跡である。上端幅40~95cm、底幅25~75cm、深さ5cm程度である。

〈出土遺物〉 出土遺物はなかった。

4. 井戸跡

調査区Ⅰ、Ⅱ区から計12基の井戸跡が検出された。井戸跡は全て素掘りで、井戸枠を据えたものは検出されなかった。

SE-1 井戸跡 調査Ⅱ区の北半で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径360~380cmである。深さは100cm程度で、断面形は逆台形を呈し、深さよりも上端幅の方が大きい。底幅は180~200cmで底面はほぼ平坦である。堆積土は大別して5層に分けられ、1層は黒褐色シルト及び黒色粘土、2層は灰黄褐色砂及び黒色粘土、3層は灰褐色シルト及び砂、4層は褐灰色粘土、5層は灰オリーブ色シルト質砂である。SD-11溝跡を切り、SK-14土壤に切られている。

〈出土遺物〉 土師器环(第23図4)、高环(第23図1)・器台・甕、須恵器环・甕、瓦片(第24図1、3、4)等である。

SE-2 井戸跡 調査Ⅰ区南半で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径250~270cmである。深さは110cmで、断面形は緩やかな円形からすぼまり、底面はレンズ状である。堆積土は大別して4層に分けられ、1層は灰黄褐色粘土質シルト、2層は黒褐色粘土、3層は褐灰色粘土質シルト、4層は黒褐色粘土質シルトである。SD-3、8溝跡を切り、ピット1に切られる。

〈出土遺物〉 1層中より三筋壺肩部片(第23図9)、3、4層中より土師器环・甕、須恵器、中世陶器、砾石(第23図10)である。

SE-3 井戸跡 調査Ⅰ区西壁寄りで検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径110~130cmである。深さは50cm程度で、緩やかな段を有し、さらに直径70cm程度の円筒形の素掘りとなる。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト、2層は黒褐色粘土、3層は黒褐色

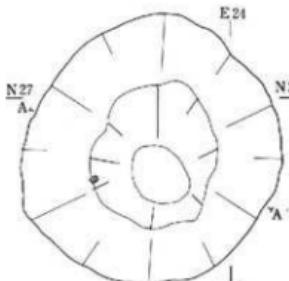
シルト質粘土である。SD-3、22溝跡を切る。

〈出土遺物〉 1層中より土師器壺、平瓦の細片(第24図2)等である。

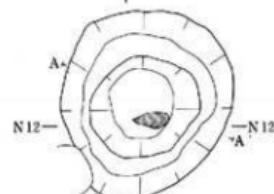
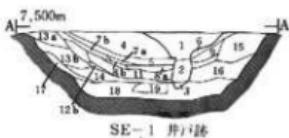
SE-4 井戸跡 調査I
区西壁寄りで検出され、掘り方平面形は橢円形で直径140~170cmである。深さ40cm程で、緩やかな段を有し、さらに直径100cm程の円筒形の素掘りである。底幅は110cmで、壁面は崩落の為削られたと考えられる。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト、2層は黒褐色粘土質シルト、3層は褐灰色シルトである。SD-22溝跡を切る。

〈出土遺物〉 2、3層中より土師器壺・甕、中世陶器(第23図11)、繩、木製品舟形(第25図3)等である。

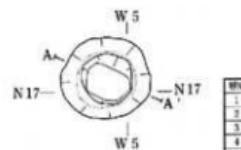
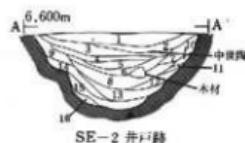
SE-5 井戸跡 調査I
区中央で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で直径200~220cmである。深さは120cm、壁面は緩やかにすばまり、底面はほぼ平坦で底幅130cmを計る。堆積土は大別して3層に分けられ、1層



井名	土色	土性	その他の
1. SD-22	褐色	粘土質	
2. SD-22	褐色	砂質	
3. SD-22	褐色	砂質	植物小(少見)を含む
4. SD-22	褐色	粘土質	植物小(少見)を含む
5. SD-22	褐色	粘土質	植物小(少見)を含む
6. SD-22	褐色	粘土質	砂(少見)を含む
7. SD-22	褐色	粘土質	植物小(少見)を含む
8. SD-22	褐色	粘土質	植物小(少見)を含む
9. SD-22	褐色	粘土質	植物小(少見)を含む
10. SD-22	褐色	粘土質	植物小(少見)を含む
11. SD-22	褐色	粘土質	
12. SD-22	褐色	シルト	
13. SD-22	褐色	シルト	
14. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
15. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
16. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
17. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
18. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
19. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
20. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
21. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
22. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
23. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
24. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
25. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
26. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
27. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
28. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
29. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
30. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
31. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
32. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
33. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
34. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
35. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
36. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
37. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
38. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
39. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む
40. SD-22	褐色	シルト	植物小(少見)を含む



井名	土色	土性	その他の
1. SD-22	褐色	砂質	砂(少見)を含む
2. SD-22	褐色	砂質	砂(少見)を含む
3. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
4. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
5. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
6. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
7. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
8. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
9. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
10. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
11. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
12. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
13. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
14. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
15. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
16. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む
17. SD-22	褐色	砂質	少量の植物小(少見)を含む



井名	土色	土性	その他の
1. SD-22	褐色	砂質	砂質
2. SD-22	褐色	砂質	*
3. SD-22	褐色	砂質	植物小(少見)
4. SD-22	褐色	砂質	*
5. SD-22	褐色	砂質	*
6. SD-22	褐色	砂質	*
7. SD-22	褐色	砂質	植物小(少見)を含む



第19図 SE 1~3 井戸跡平面図・断面図

は褐色シルト、2層は黒褐色シルト質粘土、3層は黄灰色粘土である。SD-6溝跡を切る。

〈出土遺物〉 土師器壺・高环・甕、栗の実、加工された木片、馬の歯等を出土している。

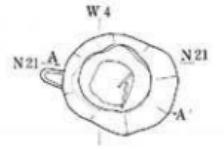
SE-6 井戸跡 調査 I

区東壁で検出され、掘り方平面形は梢円形で直径 210 cm 程である。深さは 90cm で壁面は緩やかにすぼまり、底面はほぼ平坦で底幅 90cm を計る。堆積土は大別して 3 層に分けられ、1 層は黒褐色シルト、2 層は黒褐色シルト質粘土、3 層は褐色粘土である。

〈出土遺物〉 土師器壺・甕、須恵器、井戸跡底面上から木桶の底板が 2 枚、木製品、炭化材等を出土している。

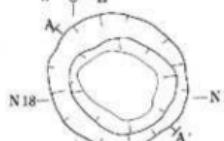
SE-7 井戸跡 調査 I

区北壁にかかる為、さらに北側 1.5 × 2.0m を拡張し平面プランを検出した。掘り方平面形はほぼ円形で直径 160 ~ 170cm である。深さは 70cm 程で、壁面は緩やかな傾きですぼまり、底面はほ

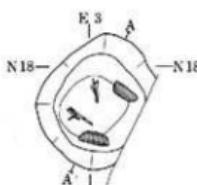


SE-4 井戸跡

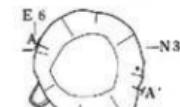
W-O-E



SE-5 井戸跡



SE-6 井戸跡



A-7.500m

SE-7 井戸跡

No.	土色	土性	その他の
1	IYR R 壁 黒色	シルト質粘土	鉄粉有り
2	S YR S 黒 褐色	砂質シルト	
3	IYR 黑 褐色	砂質シルト	炭化灰多量に含む
4 a	IYR R 黑 褐色	粘土質シルト	
4 b	IYR R 黑 褐色	シルト質シルト	
5 a	IYR 黑 褐色	シルト	自然物を少度含む
5 b	IYR 黑 褐 褐色	シルト質粘土	
6 a	IYR R 黑 褐色	シルト質シルト	
7	IYR R 黑 褐色	シルト	

I KSE-4

No.	土色	土性	その他の
1 a	IYR R 黒 褐色	シルト質粘土	炭化灰・少量の鉄粉有り
1 b	IYR 黑 褐色	シルト	
2 a	S YR S 黑 褐色	シルト	粘土を含む
2 b	S YR S 黑 褐色	シルト	物質を含む
3 a	IYR R 黑 褐色	シルト質粘土	少度に埋入
3 b	S YR S 黑 褐色	シルト	物質を含む
4	IYR R 黑 褐 褐色	粘土	物質を含む
5 a	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
5 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
6 a	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
6 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
7 a	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
7 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
8	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む

I KSE-5

No.	土色	土性	その他の
1 a	IYR R 黒 褐色	シルト質粘土	炭化灰・少量の鉄粉有り
1 b	IYR 黑 褐色	シルト	
2 a	S YR S 黑 褐色	シルト質粘土	
2 b	S YR S 黑 褐色	シルト	炭化灰を少度含む
3 a	IYR R 黑 褐色	シルト質粘土	*
3 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
4	IYR R 黑 褐 褐色	粘土	物質を含む
5 a	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
5 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
6 a	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
6 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
7 a	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
7 b	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む
8	IYR R 黑 褐色	シルト	物質を含む

I KSE-6



木材

SE-7 井戸跡



A-7.500m

SE-8 井戸跡

No.	土色	土性	その他の
1 a	IYR R 黒 褐色	シルト	
1 b	IYR R 黒 褐色	シルト質粘土	炭化灰を含む
2 c	S YR S 黑 褐色	シルト	
3 d	IYR R 黑 褐色	シルト	炭化灰を少度含む
4 e	IYR R 黑 褐色	シルト質粘土	*
5 a	IYR R 黑 褐色	シルト	
5 b	IYR R 黑 褐色	シルト	
6 a	IYR R 黑 褐色	シルト	
6 b	IYR R 黑 褐色	シルト	
7	IYR R 黑 褐色	シルト	少度の鉄・管下部に木炭層有り
8	IYR R 黑 褐色	シルト	木炭層・鉄粉層・少量の鉄粉有り

I KSE-7

第20図 SE 4~7 井戸跡平面図・断面図

ほぼ平坦で底幅60cmを計る。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は暗褐色シルト、2層は褐灰色シルト、3層は灰黄褐色砂である。SD-5溝跡を切る。

〈出土遺物〉 土師器壺、甕等の破片を出土している。

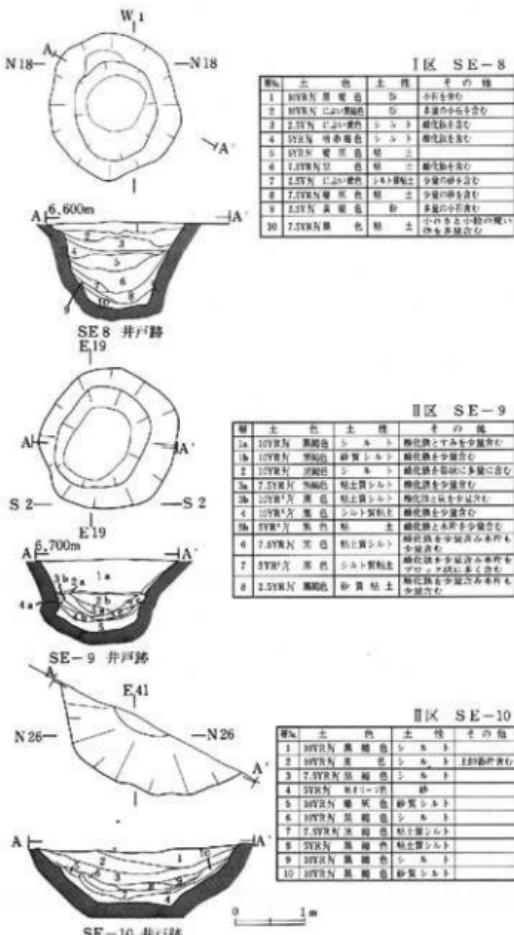
SE-8 井戸跡 調査I区のほぼ中央で検出され、掘り方平面形は梢円形で、直径170~210cmである。深さは125cm程で、断面形は不整逆台形を呈し、底面はほぼ平坦で、底幅は70cm程

である。堆積土は大別して4層に分けられ、1層は黒褐色砂、2層は暗赤褐色シルト、3層は黒褐色粘土質シルト、4層は黄褐色砂及び粘土である。SD-1溝跡を切る。

〈出土遺物〉 土師器壺、甕、須恵器の破片等である。

SE-9 井戸跡 調査II区の南半で検出され、掘り方平面形はほぼ円形で、直径200cm程である。深さは100cm程で上端より徐々にすばまり、深さ50cmの所で緩やかな段を有し、直径130~140cmの方形の素掘りである。堆積土は大別して5層に分けられ、1層は黒褐色シルト及び砂質シルト、2層は黒褐色シルト及び粘土質シルト、3層は黒色粘土及び粘土質シルト、4層は黒色粘土質シルト及びシルト質粘土、5層は黒褐色砂質粘土である。SD-19、30溝跡を切る。

〈出土遺物〉 土師器壺・高台付壺、須恵器甕片、炭化物、木片、粘土塊等である。



第21図 SE 8~20井戸跡平面図・断面図

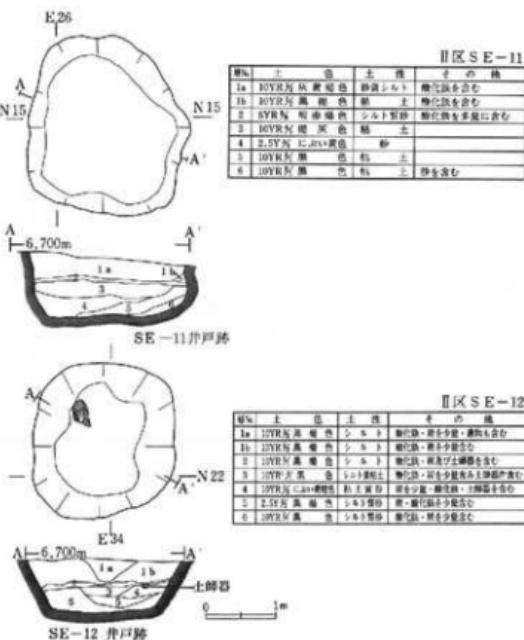
SE-10井戸跡 調査II区の北半で一部検出され、調査区外に延びるものである。掘り方平面形はほぼ円形で、直径240cm程である。深さは60cm程である。堆積土は大別して3層に分けられ、1層は黒褐色及び黒色シルト、2層は黒褐色砂質シルト、3層は灰オーリーブ色砂である。
 <出土遺物> 土師器環・高台付环・甕、赤焼土器皿(第23図5)、平瓦、丸瓦(第24図6)等である。

SE-11井戸跡 調査II区の東半で検出され、掘り方は平面形は不整楕円形で、直径は200~240cm程である。深さは60~100cm程で、断面形は逆台形を呈し、深さより上端幅の方が大きい。堆積土は大別して5層に分けられ、1層は灰黄褐色砂質シルト、2層は明赤褐色シルト質砂、3層は褐色粘土、4層はにぶい黄色砂、5層は黒色粘土である。SB-5掘立柱建物跡、SD-14溝跡、SK-7土壌を切っている。

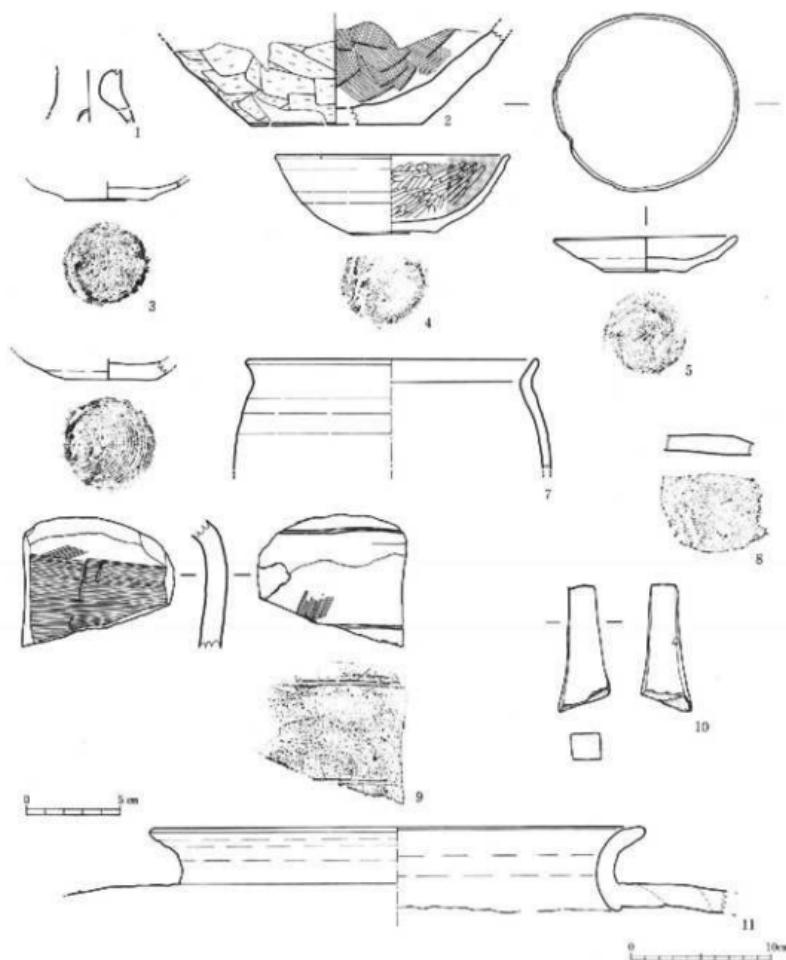
<出土遺物> 土師器環・甕片、丸瓦(第24図5)、中世陶器片、炭化物、粘土塊等である。

SE-12井戸跡 調査II区の北半で検出され、掘り方平面形は楕円形で、直径200~210cmである。深さは70~90cm程で、断面形は逆台形を呈し、深さより上端幅の方が大きい。堆積土は大別して5層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は黑色シルト質粘土、3層はにぶい黄橙色粘土、4層は黒褐色シルト質砂、5層は黒色シルト質砂である。SD-12、14溝跡を切っている。

<出土遺物> 土師器環・高台付环・甕(第23図2)、赤焼土器環、木片等である。

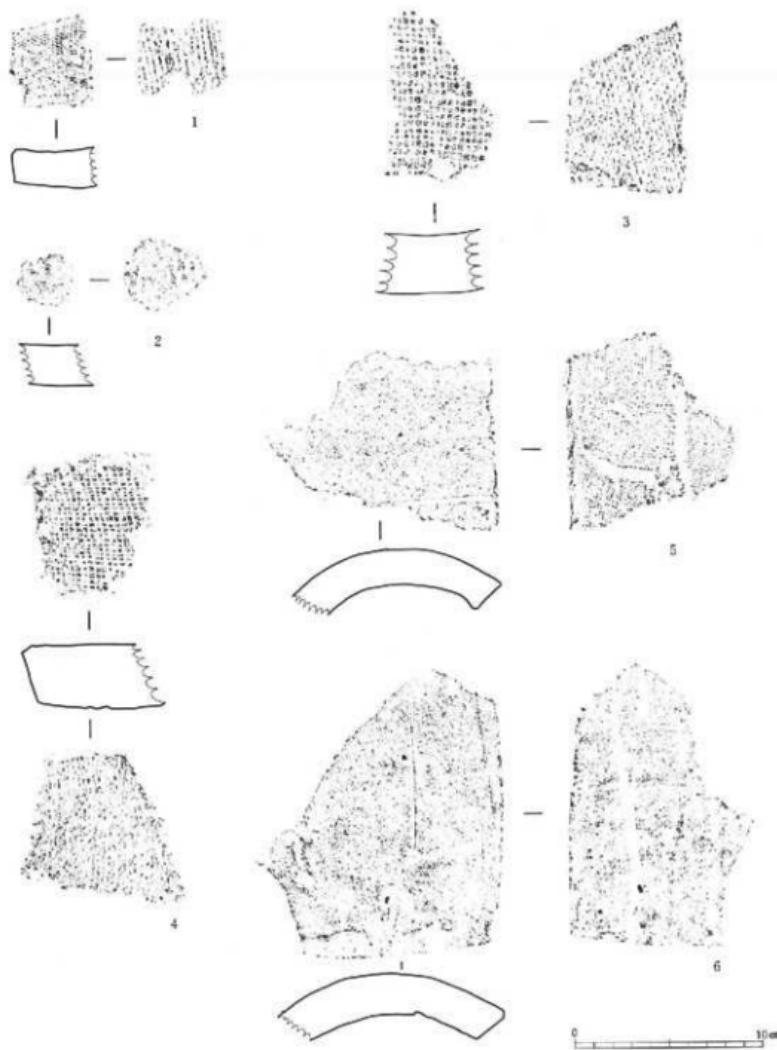


第22図 11・12井戸跡平面図・断面図



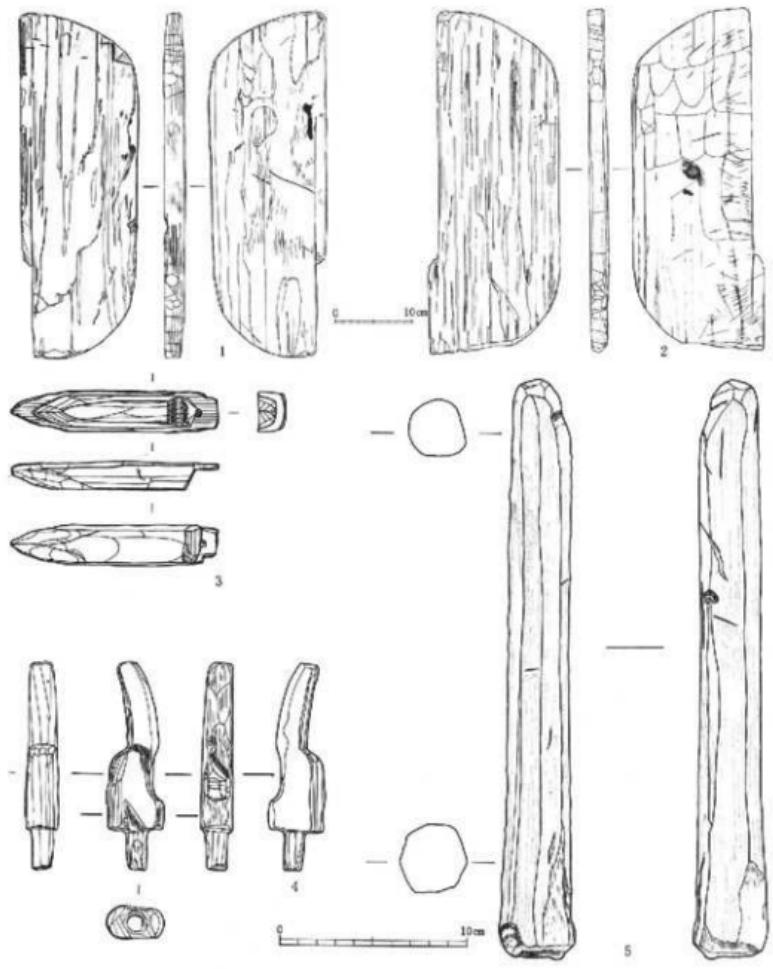
番号	登録No.	種別	基形	遺物名	原住	外観測定			内観測定			法量			保存状態
						口縁周	外幅	内幅	口縁周	外幅	内幅	底幅	器高	口幅	
1	C-75	土師器	高	球	SE-1	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
2	C-34	土師器	壺	球	SE-2	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
3	D-40	土師器	壺	球	SE-3	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
4	D-53	土師器	壺	球	SE-4	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
5	D-53	土師器	壺	球	SE-5	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
6	D-70	土師器	壺	球	SE-6	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
7	D-3	土師器	壺	球	SE-7	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
8	E-4	土師器	壺	球	SE-8	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
9	J-1	中空陶器	壺(二段部)	球	SE-9	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
10	K-3	石製品	壺	球	SE-10	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好
11	J-2	中空陶器	壺	球	SE-11	34.3	17.0	13.0	34.3	17.0	13.0	13.0	12.0	14.4	好

第23図 SE井戸跡出土遺物実測図(1)



番号	件名	種別	着目	通称名	特徴	外観	内観	調査	法	現存	石器灰層
1	G-4	中灰		SE-1	縦縫	△	△	△	△	—	—
2	G-5	中灰		SE-2	縦縫	△	△	△	△	—	—
3	G-5	中灰		SE-1	縦縫	△	△	△	△	—	—
4	G-3	中灰		SE-1	縦縫	△	△	△	△	—	—
5	P-2	黄灰		SE-11	縦縫	△	△	△	△	—	—
6	P-1	灰灰		SE-10	縦縫	△	△	△	△	—	—

第24図 SE 井戸跡出土遺物実測図 (2)



番号	質疑所	種別	遺構名	層位	法量			地名	参考文献
					横	縦	厚		
1	L-4①	木製品	SE-5	最下層	17.1	44.0	2.4	西	44-2
2	L-4②	木製品	SE-6	最下層	15.1	45.0	2.7	西	44-3
3	L-3	木製品	SE-4	最下層	9.0	10.0	0.5	東形品	44-5a-b
4	L-5	木製品	SE-6	最下層	9.0	11.1	1.0	東形品	44-4a-b
5	L-7	木製品	SE-9	最下層	4.0	31.8	3.7	東形品	44-1

第25図 SE 井戸跡出土木製品実測図

5. 土 壤

調査Ⅰ、Ⅱ区から計14基の土壤が検出された。

SK-1 土壤 欠番

SK-2 土壤 調査Ⅰ区南半で検出され、平面形は不整規円形で、長軸180cm、短軸100cm程、深さは5~10cm程である。堆積土は暗褐色シルトである。SD-22溝跡に切られる。

〈出土遺物〉 土師器窓の細片が多量に出土している(第38図8)。

SK-3 土壤 SD-1溝跡に切られ、全形は不明である。残存長軸110cm以上、深さは20cm以上である。堆積土は灰黃褐色シルトである。

SK-4 土壤 欠番

SK-5 土壤 調査Ⅰ区南半で検出され、平面形はほぼ円形で、直径200cm程、深さは60cm程である。断面形は逆円錐形状を呈している。堆積土は2層に分けられ、1層は褐灰色粘土、2層は灰黃褐色シルト質粘土である。遺構確認面では他の井戸跡とほぼ同一の掘り方平面形を呈していたが、深さ、断面形等を観察すると、壁面の立ち上がりが緩やかで井戸として機能していた痕跡は認められない。SD-21溝跡を切っている。

〈出土遺物〉 土師器片を出土している。

SK-6 土壤 VI 6(2)を参照

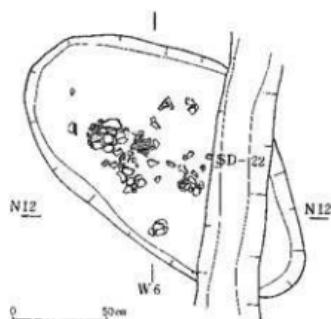
SK-7 土壤 調査Ⅱ区の東半で検出され、平面形は梢円形で、長軸120cm以上、短軸100cm程、深さは50~60cm程である。断面形はU字形である。SE-11井戸跡、SD-14溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器、木片、粘土塊である。土師器はいずれも製作に際しロクロを使用しな

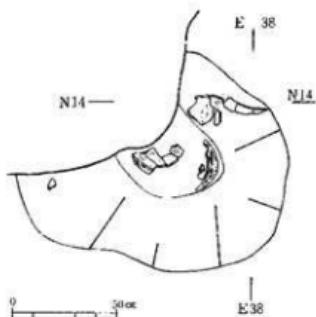
いものである。高環、脚部片で円錐台状にひらき、孔を有するもの(第30図2)、壺、頸部から口縁部に「く」の字状にひらくもの(第30図3、4)、平底の底部で模様のあるもの(第30図1)である。

SK-8 土壤 調査Ⅱ区東半で検出され、平面形は円形で、深さは10cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は大別して2層に分けられ、1層は黒褐色シルト及び粘土質シルト、2層は灰黃褐色シルトである。SB-4掘立柱建物跡を切っている。

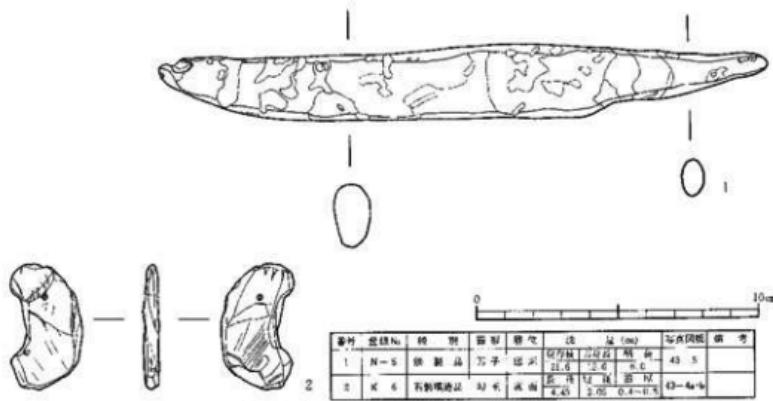
〈出土遺物〉 土師器の小破片のみである。



第26図 SK-2 土壤遺物出土状況平面図



第27図 SK-7 土壤遺物出土状況平面図



第28図 SK-6 土壌出土遺物実測図

SK-9土壤 欠番

SK-10土壤 欠番

SK-11土壤 調査II区の北半で検出され、平面形は円形で直径90cm程、深さは15cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は3層に分けられ、1層は褐灰色シルト、2層はにぶい黄褐色シルト、3層は黒褐色シルトである。SD-16溝跡に切られている。

〈出土遺物〉 土師器片1点のみである。

SK-12土壤 調査II区の南半で検出され、調査区外に延びる為平面形等については不明で、深さは10cm程である。堆積土は灰黄褐色及びにぶい黄褐色砂質シルトである。

〈出土遺物〉 土師器甕体部片のみである。

SK-13土壤 調査II区のほぼ中央で検出され、平面形は円形で、直径90~100cm程、深さは90cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は大別して2層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は黒褐色粘土質シルト及びシルト質粘土である。SD-12溝跡に切られている。

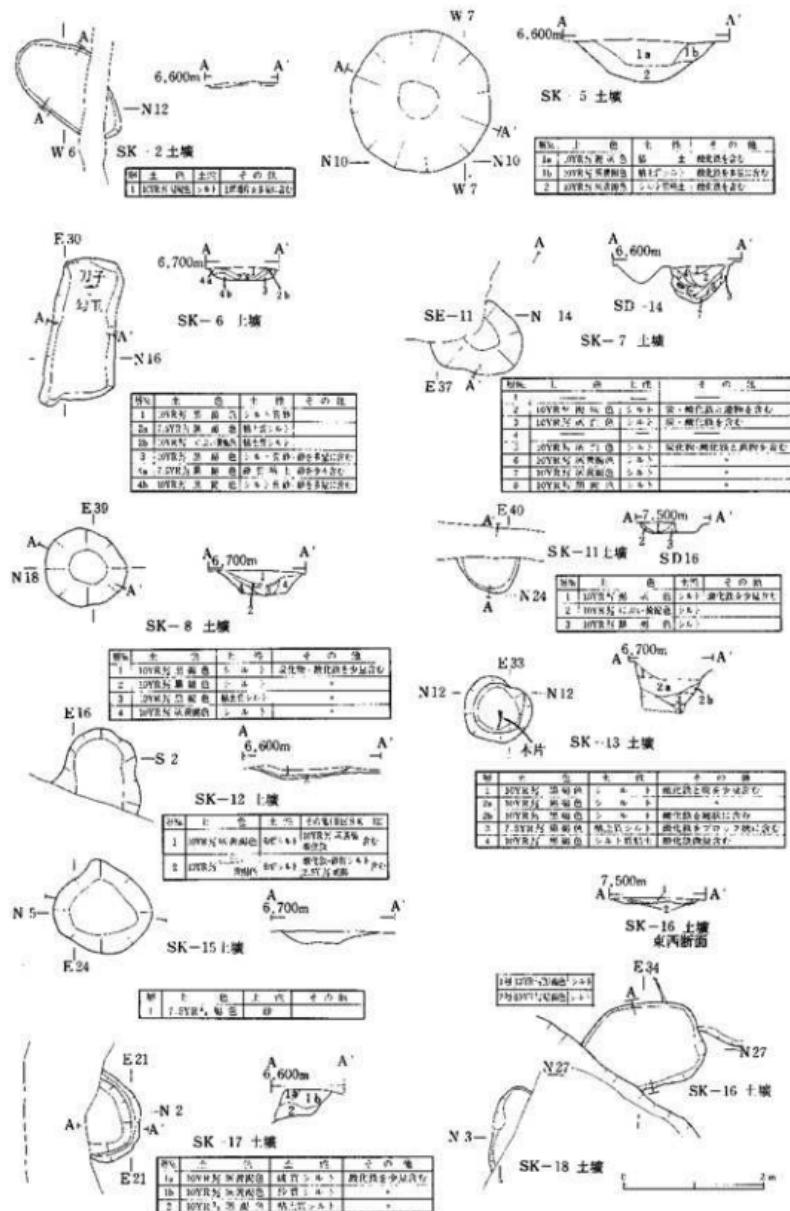
〈出土遺物〉 土師器甕片、須恵器片のみである。

SK-14土壤 調査II区の北半で検出され、平面形は不明で、深さは80cm程である。断面形はほぼV字形である。堆積土は3層に分けられ、1層は黒褐色粘土質シルト、2層は黑色粘土、3層は緑灰色砂である。SE-1井戸跡を切っている。

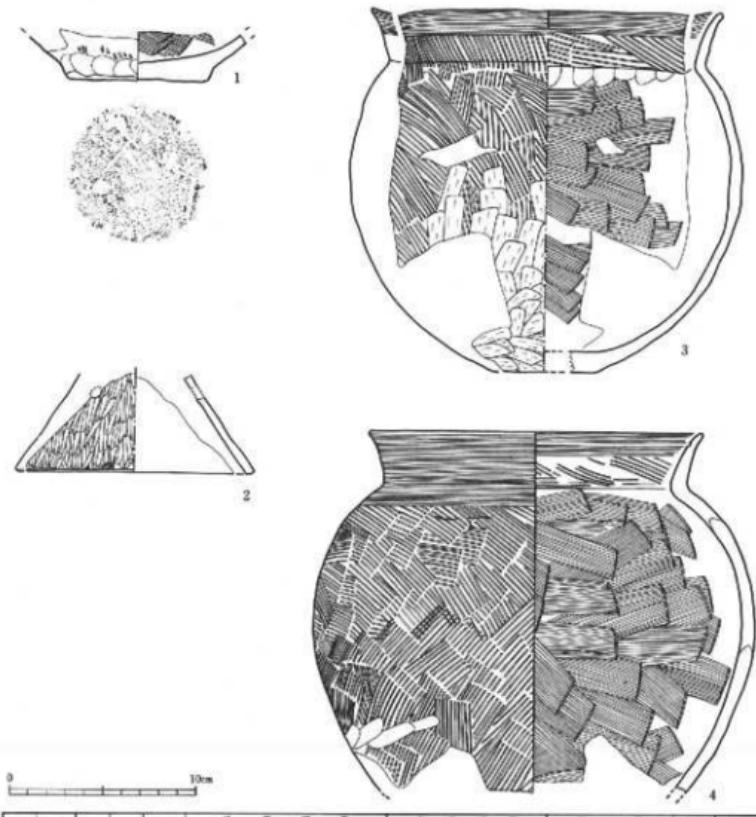
〈出土遺物〉 土師器甕片、須恵器甕、甕片、平瓦片(第40図5)等である。

SK-15土壤 調査II区の南半で検出され、平面形は不整梢円形で、直径60~70cm程で、深さは25~30cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は褐色砂である。

SK-16土壤 調査II区の北半で検出され、平面形は方形である。長軸は140cm以上、短軸



第29図 土壌平面図・断面図



第30図 SK-7土壌出土遺物実測図

は120cm程、深さは5cm程である。堆積土は3層に分けられ、1層は黒褐色シルト、2層は明褐色シルト、3層はにぶい黄褐色シルトである。SX-2性格不明遺構を切り、SD-10溝跡に切られている。

（出土遺物） 土師器环、壺、瓦片等である。

SK-17土壤 調査II区の南半で検出され、SD-11溝跡に切られている為平面形は不明である。深さは40cm程である。堆積土は2層に分けられ、1層は灰黄褐色砂質シルト、2層は黒

褐色粘土質シルトである。SD-11溝跡に切られている。また、ピット127とSK-17が同遺構の可能性もある。

SK-18土壤 調査II区の東半で検出され、調査区外に延びる為平面形等については不明である。深さは20~25cm程である。堆積土は5層に分けられ、1層はにぶい黄褐色砂質シルト、2層は暗灰黄色シルト質砂、3層は灰黃褐色砂、4層は褐灰色粘土質シルト、5層は暗褐色砂である。

6. その他

(1) **SX-1 性格不明遺構** 調査II区南側で検出され、東西540cm、南北240cmを中心に黒褐色砂質シルトが堆積し、土師器片が多数含まれる。とくに東側に集中している。堆積土は大別して2層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト、2層はにぶい黄褐色及び褐色砂である。大半の遺物は1層からの出土である。堆積土の厚さは地山上面から10~25cm程である。SD-12溝跡に切られている。またSX-1性格不明遺構堆積土を除去したのち、SI-1竪穴住居跡、P-4、5、6を検出した。

〈出土遺物〉 繩文土器、土師器、瓦片でいずれも破片である。

繩文土器 体部に単節LR繩文の施された小破片である(第32図1)。

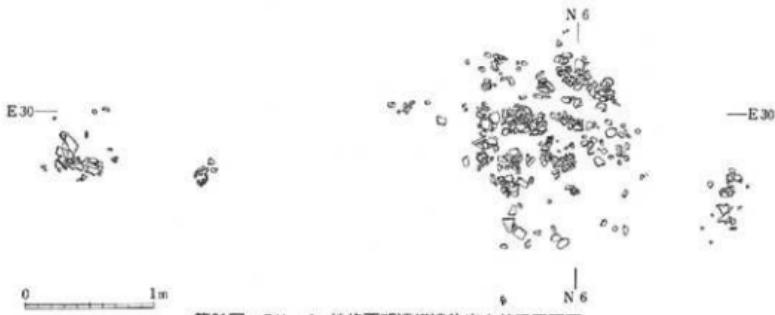
土師器 いずれも製作に際しロクロを使用しないものである。図化できたものはわずかである。

环 体部が丸味を持って立ち上り、頸部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの(第32図9)、頸部から口縁部にかけて緩く外反するもの(第32図10)などがある。

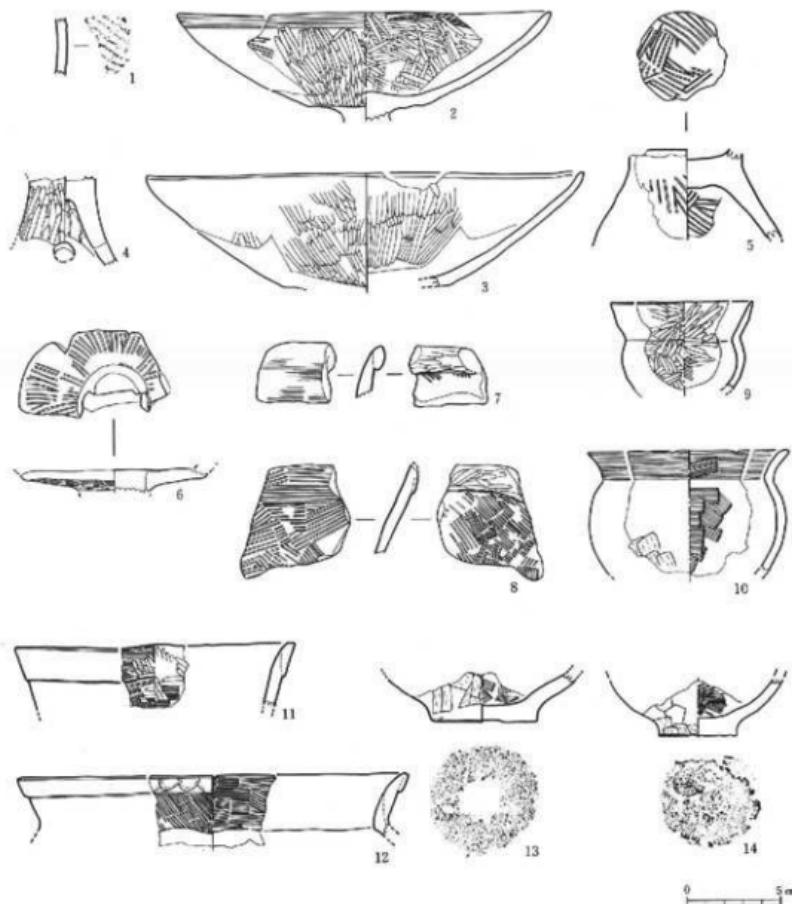
高环 体部から口縁部まで直線的に外傾するもの(第32図2、3)、环部底面にハケメの入るもの(第32図6)、脚部で孔を有するもの(第32図4)などがある。

壺 複合口縁を有するもの(第32図7、11、第33図1)がある。

甕 複合口縁を有するもの(第32図12)と単純口縁で頸部から「く」の字状に屈曲するもの

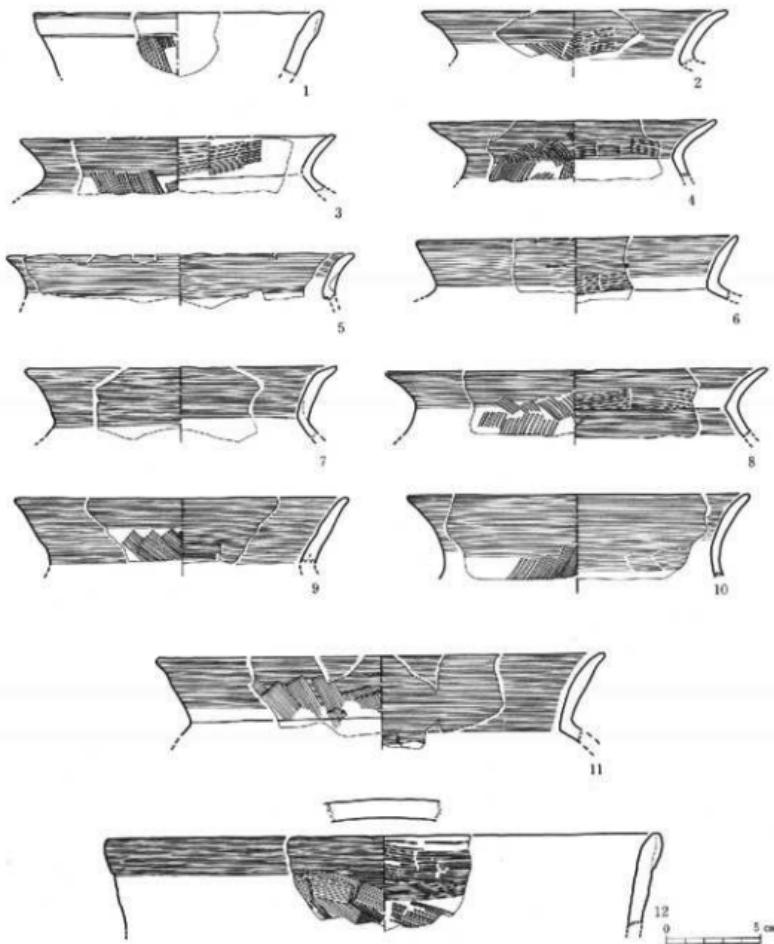


第31図 SX-1 性格不明遺構出土状況平面図



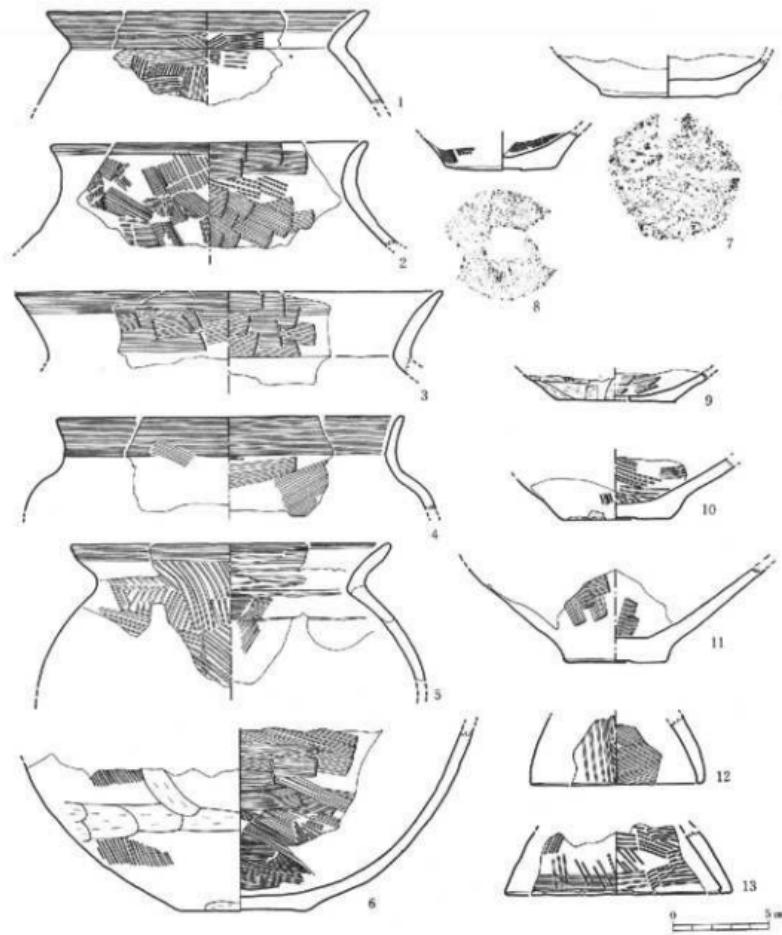
番号	形状	経年	器形	変化	外 国 河 生			内 国 河 生			器 形			材質	寸法	可燃性	
					口 極	底	側 面	口 極	底	側 面	口 極	底	側 面				
1	A-5	土器上部	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.6		
2	C-125	土器	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.6		
3	C-126	土器	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	23.2	29-2	
4	C-79	土器	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.2		
5	C-77	土器	側面	縦	1			ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.1	30-9	
6	C-124	土器	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.2	30-1-1	
7	C-128	土器	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	20-6		
8	C-125	土器	遺物付外壁	縦	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.6		
9	C-140	土器	遺物付外壁	縦	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	1.6	30-1-1	
10	C-208	土器	縦	ココナデ				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	12.8	1.6	30-1-1
11	C-128	土器	遺物付外壁	縦	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	16.8	1.2	
12	C-127	土器	縦	ハコナデ				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	22.4	1.2	30-8-8
13	C-125	土器	縦	ハコナデ				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	2.8	1.1	30-8-8
14	C-90	土器	縦	1				ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	ハコナデ	セメント	4.2	1.6	

第32図 SX-1出土遺物実測図(1)



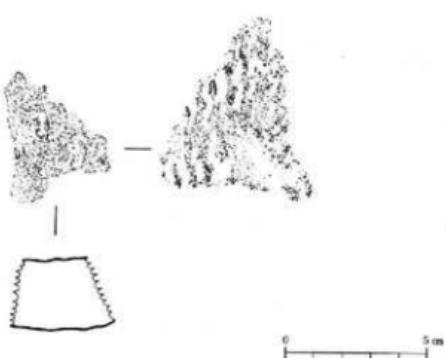
番号	壁厚%	種別	器形	原住	外 縁 部 内 縁 部 底 部 内 縁 部 外 縁 部 底 部 長径 最広 口幅 底径 高さ 地 存 有無						
1	C-13 1.80%	青	碗 1	円筒子ギ	ハケテ				16.7		
2	C-14 1.80%	青	碗 1	円筒子ギ	ハケテ	ハケテメルカトリナ	ハケテメルカトリナ		16.7		
3	C-15 1.80%	青	碗 1	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ		16.7		
4	C-16 1.80%	青	盤特形	ハケテメハケテ	ハケテメハケテ	ハケテメハケテ	ハケテメハケテ		15.3		
5	C-17 1.80%	青	盤特形	ハケテメハケテ	ハケテメハケテ	ハケテメハケテ	ハケテメハケテ		18.4		
6	C-18 1.80%	青	碗 1	ヤドリギ子ギ	ハケテメヨコナリ	ハケテメヨコナリ	ハケテメヨコナリ		17.8		
7	C-19 1.80%	青	深鉢形	ヨコナリ					16.4		
8	C-20 1.80%	青	碗 1	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ		15.0		
9	C-21 1.80%	青	碗 1	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ		17.7		
10	C-22 1.80%	青	碗 1	ヨコナリ	ハケテ	ヨコナリ	ハケテ		16.1		
11	C-23 1.80%	青	碗 1	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ	ヨコナリメハケテ		15.1		
12	C-24 1.80%	青	碗 1	ヨコナリメハケテ	ハケテ	ハケテ	ハケテ		16.3		

第33図 SX-1出土遺物実測図(2)



番号	器種名	性別	部位	外 形 特 徴	内 部 特 徴	施 工	現 存	参考 写真
1	C-34	女性	頭	コラゲーナテ	ビニカルハナメ	17.0		
2	C-35	女性	頭	コラゲーナテ	ハサミハリナメ	19.2		
3	C-161	女性	頭	コラゲーナテ	ハリナメ	18.0		
4	C-89	女性	頭	コラゲーナテ	コラゲ	18.0		
5	C-14	女性	頭	コラゲーナテ	ハサメ	17.0	00-8	
6	C-19	女性	頭	ハサミハリナメ	ビニカルハナメ	16.0	00-2	
7	C-30	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	17.0		
8	C-97	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	16.0		
9	C-100	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	16.2		
10	C-10	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	15.3		
11	C-82	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	15.3		
12	C-107	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	15.3		
13	C-93	女性	頭	ハサミハリナメ	ハラタナメ	11.0		

第34図 SX-1出土遺物実測図 (3)



番号	空器名	種類	甲	乙	丙	丁	等	備考
1	G-5	平瓦	直角形瓦面	スリットシタタケメ	2.4-2.6	-	-	-

第35図 SX-1出土遺物実測図(4)

(2) 周溝墓 (SK-6 土壙、SD-15溝跡)

調査Ⅱ区のほぼ中央で検出され、方形の土壙 (SK-6) の周りを「コ」の字形の溝 (SD-15) がめぐるものである。

SK-6 土壙 土壙の平面形は長方形で、長軸は200~220cm、短軸は80~100cmで、深さは10~20cm程である。断面形は逆台形である。堆積土は4層に分けられ、1層は黒褐色シルト質砂、2層は黒褐色及びにぶい黄褐色粘土質シルト、3層は黒褐色シルト質砂、4層は黒褐色粘土及びシルト質砂である。

〈出土遺物〉 堆積土中より土

師器片が出土している。ハケメ調整の頗著なものがある。底面北

隅より石製模造品と刀子が出土

している。石製模造品 (第28図

2) は勾玉で小孔が穿たれてい

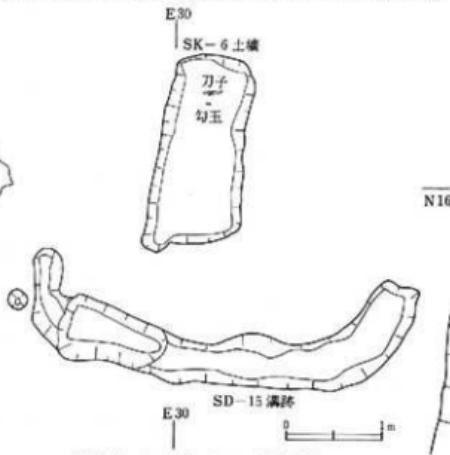
る。刀子 (第28図1) は鏃が著

しいが切先より茎尻まで残存し

ている。

SD-15溝跡 溝跡は「コ」

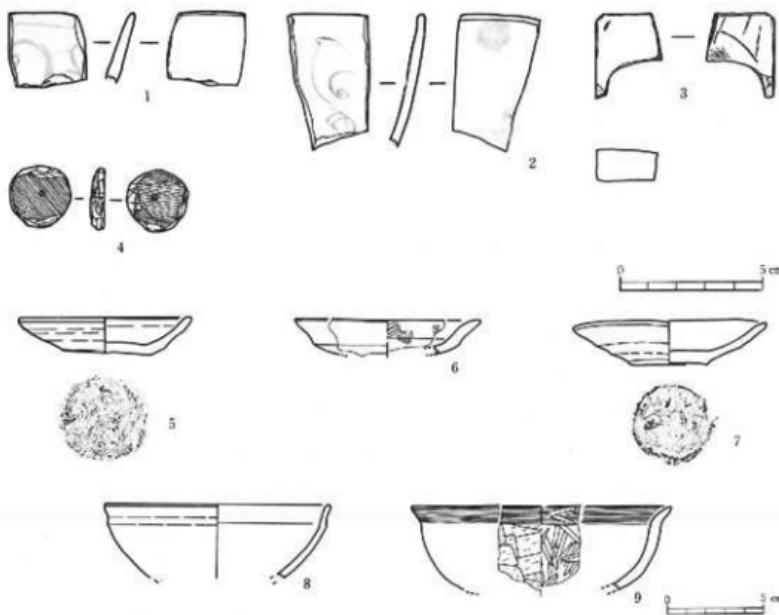
の字状に検出され、上端幅は30



第36図 SK-6 SD-15平面図

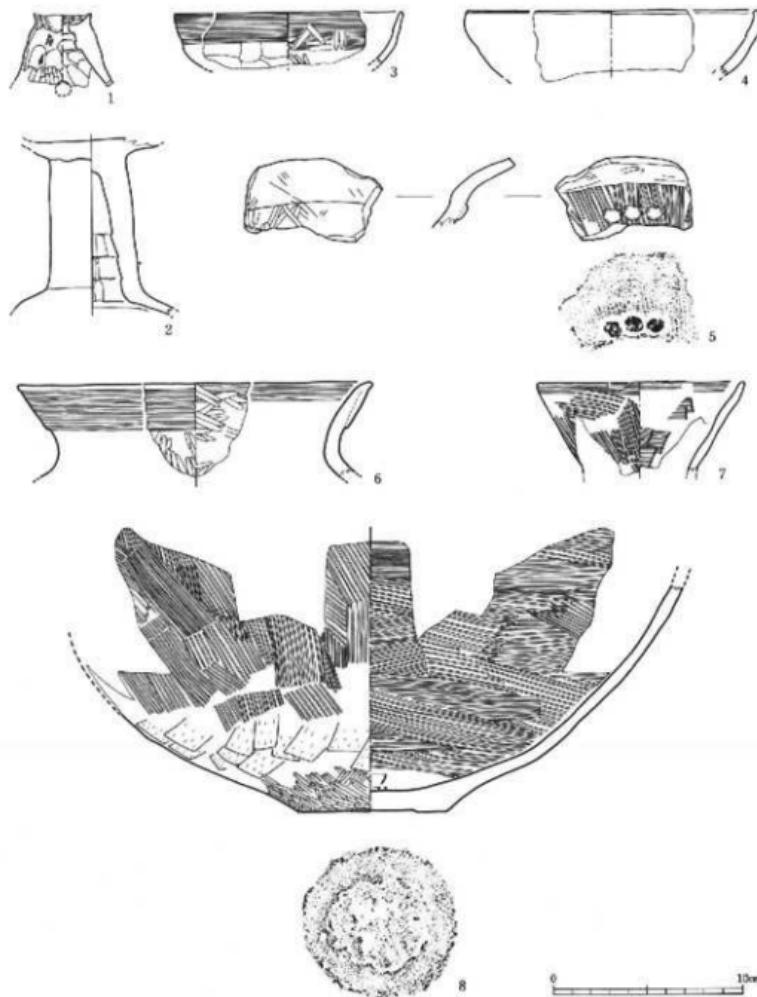
~70cm程、底幅は10~30cm程、深さは5~20cm程である。断面形はV字形及び逆台形である。堆積土は3層に分けられ、1層は黒褐色砂質シルト及びシルト質砂、2層は暗褐色砂、3層はにぶい黄褐色砂である。SK-6 土壌西側に一部土色の変化があり、SD-15溝跡が延びていた可能性がある。

〈出土遺物〉 堆積土中より土師器片が出土し、ハケメ調整の顯著なものがある。



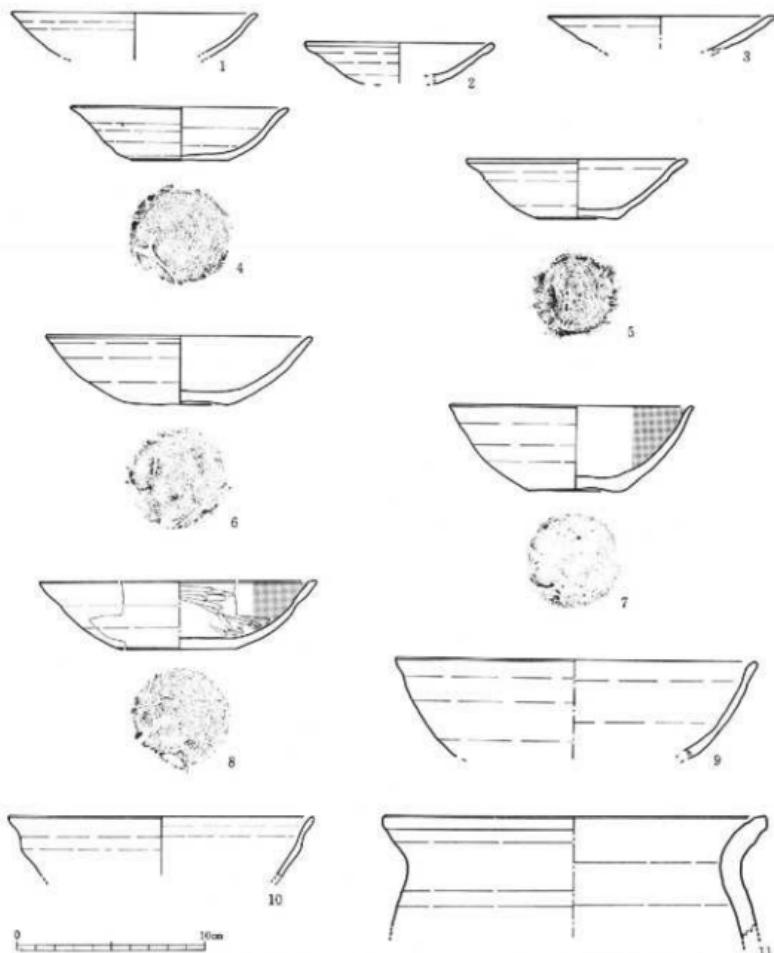
番号	質地%	種別	基形	層位	外面調査			内部調査			法身			焼付	厚さ1mm
					目録	保	底	目録	保	底	目録	保	底		
1	J-2	陶海貝造器	瓶	透視線出面											62-2a-b
2	J-10	陶海貝造器	瓶	透視線出面											62-2a-b
3	K-3	石製品	環	透視線出面											62-2
4	K-4	石製品	有孔内盤	透視線出面	保	保	保	透視	保	保	目録	子底保	目録		43-2 b
5	D-51	赤燒土器	瓶	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	1.9	3.2	4.4		38-7
6	C-68	土加器	盆	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面					9.7
7	D-50	赤燒土器	盆	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	2.3	30.1	4.0		38-6
8	D-49	土加器	盆	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面					31.9
9	C-10	土加器	盆	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面	ロフロフ	ワカナギ	透視線出面					33.8

第37図 遺構検出面出土遺物実測図



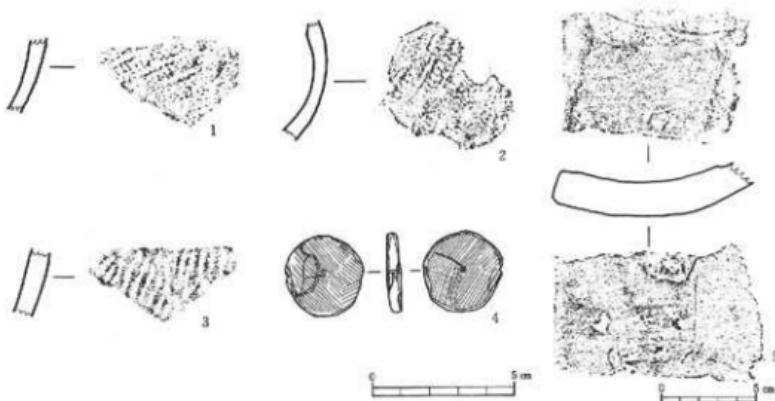
第38図 その他各遺構出土遺物実測図(1)

番号	厚さmm	種別	外形	遺構	壁厚	外 壁 面		内 壁 面		底足	底足	現存	等高線
						口縁	底縁	底縁	内縁				
1	C-13	19.02	器台	SD-12	壁1	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
2	C-25	19.02	器台	SD-12	壁2	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
3	C-11	19.02	器台	SD-12	壁1	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
4	C-30	19.02	器台	SK-36	壁1	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
5	C-25	19.02	器台	SD-11	壁1	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
6	C-18	19.02	器台	SD-12	壁2	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
7	C-1	19.02	器台	SK-2	壁1	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	ハラケアリ	鉄頭	鉄頭	29-4	
8												8.0	40-3



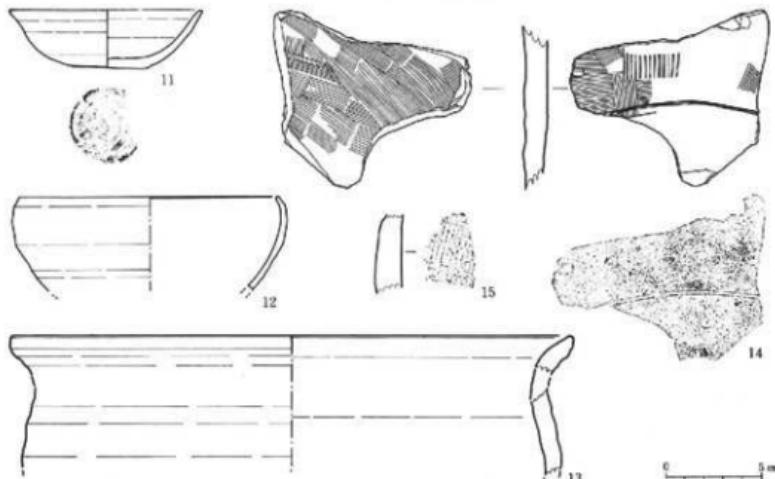
番号	壁厚mm	種別	基部	遺構	部位	外 壁 鋸 齒			内 壁 鋸 齒			沿面	口徑	底径	残存	写真mm
						口縫部	側縫部	底縫部	口縫部	側縫部	底縫部					
1	D-68	土師器	16	P40	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	13.6	16	12.6	—	—
2	D-59	土師器	16	SD-17	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	9.9	10	8.5	—	—
3	D-58	土師器	16	SD-12	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	12.3	14	11.5	—	—
4	D-46	漆塗土器	16	P12	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	5.0	11.6	5.2	24	38-4
5	D-45	漆塗土器	16	SD-1	底	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	3.2	11.7	4.1	24	38-5
6	D-63	土師器	16	P87	底	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	3.7	14.2	5.4	24	37-9
7	D-45	土師器	16	P12	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	4.6	12.7	5.0	24	37-4
8	D-56	土師器	16	SD-11	底	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	4.6	14.7	6.3	24	—
9	D-60	漆塗土器	16	SD-19	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	16.3	24	—	—	—
10	D-67	土師器	16	P16	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	16.5	24	—	—	—
11	D-68	土師器	16	P87	底1	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	ロクロナゲ	20.5	24	—	—	—

第39図 その他各遺構出土遺物実測図（2）



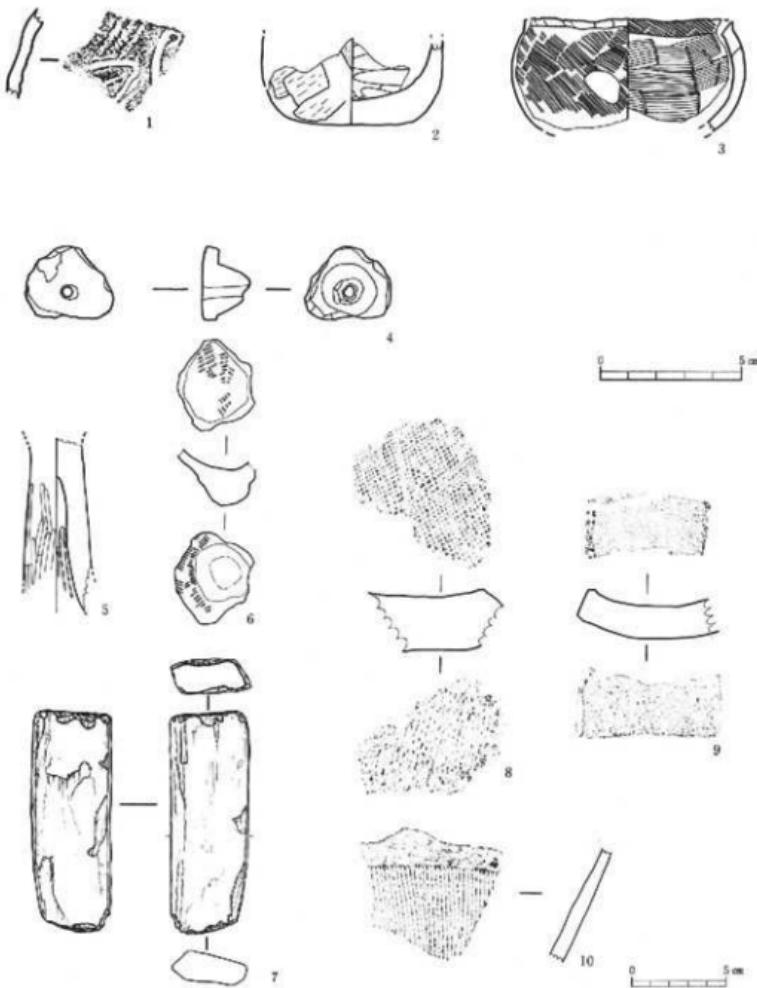
番号	性質	地	形	造	施	外	内	施	法	種	種	参考文献
1	A-2	縄文土器	SD-10	丸	口縁部	手彫り文						—
2	A-4	縄文土器	SD-10	丸	手彫り文							—
3	A-3	縄文土器	SD-12	丸	手彫り文							—
4	K-2	石軸頭遺品	SD-11	丸	滑	滑	手彫り文	手彫り文	手彫り文	手彫り文	手彫り文	43-2-a
5	G-6	平	SK-14	丸	×××	スリット						—

第40図 その他各遺構出土遺物実測図(3)



番号	性質	地	形	施	外	内	施	法	種	種	参考文献	
11	D-80	未成土器	丸	直	ロテラナイト	ロテラナイト	ロテラナイト	ロテラナイト	3.0	10.2	手	37-90
12	D-47	土器	丸	直	ロテラナイト	ロテラナイト	ロテラナイト	ロテラナイト	13.8	—	土	—
13	D-66	土器	丸	直	ロテラナイト	ロテラナイト	ロテラナイト	ロテラナイト	29.6	—	—	—
14	J-29	石	直(三面)	直	マコナイト	マコナイト	マコナイト	マコナイト	—	—	—	42-94-b
15	S-6	土器	丸	直	タクシ	タクシ	タクシ	タクシ	—	—	—	—

第41図 耕作土中出土遺物実測図(1)



番号	登録番号	種別	形態	部位	外観			内部			測量			法	基	現存	参考文献
					骨部	肉部	筋部	LINER	骨部	肉部	筋部	骨部	肉部	筋部			
1	A-1	陶文片	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	無	2.7	2.7	2.7	2.6	2.6	2.6	1	2	41-8
2	C-148	土師器	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	ハリカヌリ	ハリカヌリ	ハリカヌリ	ハリカヌリ	2.6	2.6	2.6	1	2	41-8
3	C-3	土師器	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	無	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	1	2	41-8
4	P-4	土師器	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	ハリカヌリ	ハリカヌリ	ハリカヌリ	ハリカヌリ	2.4	2.4	2.4	1	2	41-8
5	C-57	土師器	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	無	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	1	2	41-8
6	C-45	土師器	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	ハリカヌリ	ハリカヌリ	ハリカヌリ	ハリカヌリ	2.6	2.6	2.6	1	2	41-8
7	K-5	GIFU-2000	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	無	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	2.8	1	2	41-8
8	G-2	手	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	サクヌス	サクヌス	サクヌス	サクヌス	2.2	2.2	2.2	1	2	41-8
9	G-8	手	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	サクヌス	サクヌス	サクヌス	サクヌス	2.2	2.2	2.2	1	2	41-8
10	J-12	直角形	口縁部	横斜面	直斜面	直斜面	直斜面	サクヌス	サクヌス	サクヌス	サクヌス	2.2	2.2	2.2	1	2	41-8

第42図 耕作土中出土遺物実測図（2）

VII 遺構・遺物の検討

今回の調査で検出された遺構は槧穴住居跡1軒、掘立柱建物跡4棟、掘立柱列1列、井戸跡12基、溝跡31条、土壌13基、性格不明造構2等である。主たる遺構、遺物について検討する。

1. 遺構

(1) 槧穴住居跡

調査区内で1軒のみ検出されたが、壁、床面、カマド等の施設が残っておらず、住居跡と認定するのに困難な面もある。しかし、検出された柱穴は、住居のプランを想定した場合、その対角線上に載るようである。柱穴の配列関係も2通り考えられるが、どちらの場合でも柱穴間の距離が200~310cmで、基本的には台形を呈する配置関係におさまる。

このような例は、仙台市中出に所在する栗遺跡の2号住居跡(昭和56年調査)等にあり、本遺跡の場合も住居跡と考えられる。住居跡の年代等については不明である。

(2) 掘立柱建物跡

調査区内より5棟分検出されている。これまで確認された掘立柱建物跡以外にも柱痕跡と思われるピットを検出していることから、さらに検討を加えれば、掘立柱建物跡は増える可能性がある。第1表で示すように各掘立柱建物跡の桁行、梁行が調査区外に延び、及び他の

第1表 掘立柱建物跡一覧表

No	棟方向	桁行×梁行	柱 間	竹 間	梁 間	柱 間	竹 間	梁 間	柱 平均	形 状
1	東西南北 N-S-E-W	2間以上 E×2間	南列 2.6+2.9+1.5以上 北列 2.4+3.1+1.5以上	7以降 8以降	2.7	西列 2.4-2.4 東列 不明	4.8	2.4	円形	
2	東西南北 N-S-E-W	4間×2間	南列 2.4+1.7+1.7-2.4 北列 2.2+1.8+1.5-2.4	8.2 7.9	2 2	西列 2.3-2.4 東列 2.0+(2.3)	4.7 4.3	2.4 2.2	円形	
3	東西南北 N-S-E-W	2間以上 E×3間	南列 1.4+0.7 北列 +4.3+	(5.2) (6.4)		西列 (2.1) 1.2-4-2.5 東列 不明	7	2.3	円形	
4	東西南北 N-S-E-W	4間×2間	南列 2.4+2.4+2.8+(2.8) 北列 (2.4)+(2.4)+(2.8)+2.6	10.4 10.2	2.6 2.6	西列 不明 東列 (2.6)+1.9	4.5	2.3	円形	
5	本柱列 南北 N-S-E	5間	南より 1.4+1.4+(1.4)-(1.4) +(1.4)	7	1.4					円形

単位:m ()は推定

遺構との重複から、全容は明らかではない。各建物跡の方向はほぼ同一で、E-S-N-W-Nの東西棟である。桁行、梁行の柱間寸法は不揃いであるが、柱穴掘り方の形状、規模はほぼ同じである。各掘立柱建物跡の重複は検出されなかった。しかし、他の遺構との重複関係、及びS-B-1、2建物跡の間隔が50cmと近接し、建物の配置からも同一時期の建物跡とは考えられない。これらの掘立柱建物跡の囲りからは井戸跡、溝跡が検出され、何らかの関連を含んでおり、

持長地遺跡	1号掘立柱建物跡	桁行5間×梁行1間	13世紀後半~14世紀前半
駒馬小屋跡	掘立柱建物跡	桁行5間×梁行1間	中世末
宇南遺跡	2号掘立柱建物跡	桁行5間×梁行1間	中世

特に井戸跡は同一箇所に集中して検出され、出土する遺物等から掘立柱建物跡とほぼ同時期と考えられる。SB-1建物跡の柱穴掘り方から平安時代末～鎌倉時代初期の陶器片を出土しており、また井戸跡からも三筋壺、陶器片等を出土していることから、これらの掘立柱建物跡は中世のものと思われる。SB-1は三面庇あるいは四面庇の掘立柱建物跡で、これまで県内で中世の館跡、集落跡から数例四面庇の建物跡が発見されている。本遺跡の他に、藏王町持長地遺跡、大衡村駒馬小屋館、志波姫町宇南遺跡寺である。

中世の掘立柱建物跡は数多く発見されているが、四面庇の建物跡は類例が少ないようである。これら建物跡は、駒馬小屋館では丘陵に立地し、館跡の可能性が指摘されている宇南遺跡では、舌状台地に立地し、何らかの関連があるとされる持長地遺跡は段丘平坦地に立地している。本遺跡では沖積面の自然堤防上に立地していて、自然地形に囲まれた他の遺跡と比較して、立地条件等から建物の性格を異にしていると思われる。高清水町観音沢遺跡、秋田市下夕野遺跡は掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡、土壙が広い範囲にみられる集落跡と考えられている。本遺跡はこれらと同様の造構の分布を示している。本遺跡は過去2回調査が行なわれ、今回の調査区から400m北西地区でも同様の造構を発見しており広範囲な造構の分布が認められる。また青磁、三筋壺を出土する例は少なく、特定の階級層のみが所有していたと考えられている。本遺跡の掘立柱建物跡は、一般階層ではなく上層階級の建物跡の可能が考えられる。

掘立柱建物跡の年代は、出土遺物が乏しく明らかにするのは難しいが、SB-1掘立柱建物跡出土の陶器片、重複するSD-1溝跡出土の遺物から鎌倉時代以降と考えられる。

(3) 溝 跡

調査区から検出された溝跡は、ほぼ南北方向、及びほぼ東西方向に延びている。SD-5、SD-22溝跡はSD-1溝跡に切られているため明らかではないが、ほぼ同時期の溝跡と思われる。また北半で東へ屈曲し、何らかの施設に関連するものと思われる。

SD-11溝跡は、II区の北側から南北方向に延び、南側で東に「L」字状に屈曲する溝である。推積土中からは、古墳時代の石模製造品、及び、中世陶器片を出土し、溝が機能していた年代を正確におさえることは難しい。この溝跡は、II区で検出したSB-4掘立柱建物跡、SB-5掘立柱列を取り囲むように巡っており、掘立柱の柱筋とほぼ同一方向を示している。また、SD-11溝跡より西側と南側では、掘立柱建物跡は検出されず、ピットの数も減少する。このような例は、昭和55年仙台市教育委員会の調査で検出した1号溝にも見られ、「L」字状の溝に囲まれた中に掘立柱建物跡が集中するものである。これらのことから、SD-11溝跡も、掘立柱建物群を取り囲む施設と考えられる。よってSD-11溝跡の年代も掘立柱建物と同じ年代と考えられる。

溝跡は、殆ど井戸跡に切られており、SD-1溝跡出土遺物等から平安時代後半と考えられる。またSD-21溝跡は調査区内では、塩釜式～南小泉式の遺物を出土していることから、溝跡の

No	上端幅	底幅	深さ	断面形	その他の	
					単位 cm	
1	120~210	30~70	60~80	逆台形	土師器・須恵器・馬の角	
2	120~130	30~60	50	逆台形	土師器・須恵器	
3	80~100	30	20~30	V字型	土師器片	
4	30		5	逆台形		
5	30~40	10~20	15~20	U字型		
6	20~30	10	10	U字型	土師器片	
7	30~40	10	10~15	逆台形	土師器片	
8	20	15	10	逆台形		
9		欠		番		
10	100~120	60~80	10~20	逆台形	縦文土器片・土師器片・須恵器片	
11	70~100	20~30	20~40	舟底型	土師器・須恵器・瓦・中世陶器・石製改造品・粘土塊	
12	100~130	20~40	20~60	舟底型	土師器・赤焼土器・中世陶器・粘土塊	
13	40~50	20~35	5~20	U字型	土器片	
14	40~70	20~30	10~20	逆台形	土師器片	
15	30~70	10~30	5~20	U字形・逆台形	土師器片	
16	40~100	20~80	10	逆台形	土師器片	
17	60~100	30~40	30~40	逆台形	土師器片	
18	30	20	10	U字形	土師器片	
19	80~120	20	30~50	舟底型	縦文土器片・土師器・中世陶器・粘土塊	
20	280~300	100	70~80	扁平逆台形	土師器・中世陶器・木片・種子・骨片	
21	250	—	30			
22	30~40	15	10~20	扁平逆台形	土師器片・須恵器片	
23	30~40	10~20	5	U字型	土器片	
24	40~60	10~40	10	U字型		
25	30~40	20	10	U字型	土師器片	
26	20~30	10~20	5	U字形		
27	20	10	3~7	U字形		
28	20~30	5~10	2~10	U字形		
29	30~50	10~25	2~8	U字形		
30	50~60	30~45	5	—		
31	40~95	25~75	5			

中では最も古い時期に位置づけられる。

(4) 井戸跡

調査区 I、II 区から合計 12 基検出された。形態的に 3 つに分類される。分類の形態の項目は昭和 55 年度仙台市教育委員会（第 32 集鴻ノ巣遺跡調査報告書）に準じて分類する。新たな分類項目はないが、D 類を掘り方上端幅の大きさと深さによって細分を新たに加えた。

- A 類……円形の掘り方に井戸枠を組んでいるもの。
- B 類……円形の掘り方の中に方形の素掘りがあるもの。
- C 類……円形、橢円形の掘り方で円筒形の素掘りのもの。
- D 類……円形、橢円形の掘り方で底に近づくに従って段々にすぼまっていく素掘りのもの。

1. 掘り方上端幅が深さより大きいもの。

2. 掘り方上端幅が深さより小さいもの。

本遺跡の井戸跡は C 類、D 類が多く検出され、B 類は 1 基のみである。A 類の井戸枠を伴うものは検出されなかった。C 類は SE-3、4 で掘り方を比較すると、平面径は SE-3 が 110cm

第3表 井戸跡一覧表

No.	平面形	分類	大きさ(cm)	深さ(cm)	その他の
1	円形	D I	360~380	100	土師器片・須恵器片・瓦
2	円形	D I	250~270	110	中世陶器・三筋甕・須恵器・瓦石・木片
3	円形	C	110~130	95	
4	椭円形	C	140~170	100	木製品舟形・中世陶器・土師器片
5	円形	D I	200~220	120	土師器・馬の齒
6	椭円形	D I	210	90	木製品・桶底板
7	円形	D I	160~170	70	土師器片
8	椭円形	D I	170~210	125	土師器片・須恵器片
9	円形	B	200	100	土師器片・須恵器片・炭化物・木片・粘土塊
10	円形	D I	240	60	土師器片・瓦片
11	椭円形	D I	200~240	60~100	土師器片・中世陶器・炭化物・粘土塊
12	椭円形	D I	200~210	70~90	土師器片・木片

~130cm、SE-4が140~170cmと小型であるが、深さは1m前後と同じである。B類は掘り方平面径が200cm、深さ100cmである。D類は9基と多く、掘り方平面形が円形、椭円形で、上端幅がまちまちであるが、SE-7、8が160~200cm、SE-2、5、10、11、12が200~270cmと大きくなり、SE-1は360~380cmと検出されたうちで最も大きい。深さはほぼ各遺構共通して100cm前後である。形状は掘り方上端から徐々にすばまっていくものである。SE-1は掘り方平面形、深さ、底幅等の形態からみれば土壙とも考えられる。出土遺物はSE-2、4、6から中世陶器、SE-4から舟形木製品、SE-6から桶の底板、また他の井戸跡から中世陶器等が出土し、近世以降の遺物を共存していないことから井戸跡の年代は、鎌倉時代以降と考えられる。またI区からは多数の井戸跡が隣接して検出され、重複関係は認められないが同時期に使用したとは考え難く、溝跡との重複関係から少なくとも2時期以上と考えられる。これから井戸跡は、数回にわたり掘り替えたと思われる。

(5) 土 壙

調査区から計14基の土壙が検出されている。殆が遺構の重複関係で切られており、全容は明らかではない。特にSK-5土壙は、平面形が円形で、直径200cm、深さ60cm程である。土壙としては大型のものであり、堆積状況を見ると自然堆積と思われ、性格を決定づけられない。またSK-7土壙は、平面形は椭円形で、長径120cm以上、短径100cm、深さ50~60cm程であり、土師器器皿、高环片が出土している。高环脚部片は、孔を有するものである。甕片は、頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲するものであり、体部がハケメ調整の顕著なものである。また、环片にはヘラケズリが施されているものもある。これらの破片は塙釜式期の特徴をもつものであり、それ以外の破片を含まないことから塙釜式期のうちに埋まりきったと思われる。人為的な堆積かどうかは不明である。

(6) SK-1

出土遺物は全て破片で復元出来るものはきわめて少ない。SI-1堅穴住居跡との関連も考えられるが、出土状況等から人為的な廃棄と考えるのが適当と思われる。

部品	部位	持葉	遺構検出面	持葉七手類	
				共	共
环	口 線 部	5	42	47	
	口縁部～体部	1	1	2	
	体 部	0	13	13	
	体部～底部	0	0	0	
	底 部	0	1	1	
高环・ 筒 口	口 縫 部	0	0	0	
	脚 部	0	10	10	
	環部～脚部	2	4	6	
	口 縫 部	0	0	0	
	複合口縫	3	8	11	
度	口 縫 部	10	145	155	
	複合口縫	0	0	0	
	単純口縫	0	2	2	
	口 縫 部	184	2039	2233	
	体 部	0	2	2	
束	体部～底部	2	26	28	
	底 部	0	0	0	
	複合口縫	0	0	0	
	単純口縫	0	0	0	
	口 縫 部	1	5	6	
台付型	脚 部	0	17	17	
	口 縫 部	208	2305	2513	
計					

遺物は、ロクロ未使用の上師器片によって占められている。塗釜式の特徴を持つものが多い。しかし环の中には南小泉式と考えられるものもある(図2(2)参照)。また遺構確認の際に瓦片を一点出土しているが、古墳時代中期以降の遺物は他にないことから、旧耕作土中からの混入と考えられる。SX-1性格不明遺構は、出土した遺物から南小泉式期でも早い時期のものと考えられる。

(7) 周溝墓 (SK-6土壙、SD-15溝跡)

SK-6土壙は、底面北隅から刀子と石製模造品が出土し、その出土状況や土壙の形態・規模から墓壙と考えられる。SD-15溝跡は、堆積土中から土師器片が出土し、SK-6土壙内堆積土から出土したものと類似する。

またSK-6土壙の周囲をめぐるような位置関係にあり、これらのことから、同時期に存在していた周溝と考えられる。周溝の残存形態は「コ」の字形であるが、本遺跡の場合削平のため本来の形態とは断定しがたい。周溝の規模については、SK-6土壙西側の落ち込みも考慮に入れ、円形と推定した場合、溝の心地直徑で5m前後である。このような土壙の長軸長および周溝の規模からみて群集化する古墳時代末期の古墳と類似するが、墓壙内出土遺物は後述する様に古墳時代中期のものと考えられることや、墓壙と周溝が近接することにより、墳丘を成し得るような高い封土があったとは考え難い。よってSK-6土壙とSD-15溝跡を古墳とみるよりも周溝墓とみる方が妥当であると思われる。

次にこの周溝墓の年代であるが、SK-6土壙より出土した石製模造品によって検討してみたい。このような石製模造品は、丸森町矢ノ目、亘理町宮前、大河原町台ノ山、多賀城市山王遺跡などで、南小泉式の土師器と共に伴っている。しかし、石製模造品の中でも劍形、有孔円板が主であって、本遺跡のような勾玉形のものは出土例が少ないようである。勾玉形の石製模造品で南小泉式の土師器と共に出土している例としては、仙台市遠見塚古墳の第12トンチ(註5)において出土したものを上げることができる。土師器環、高环、壇、甕、須恵器環と共に勾玉形の石製模造品が共伴している。これらのことから、周溝墓の年代も南小泉式期と考えられる。

このような周溝墓あるいは墓と考えられる周溝の調査例は、宮城県内において名取市今熊野、西野川、仙台市安久東、多賀城市多賀城跡五万崎地区、高瀬水町東館、志波姫町鶴ノ丸、宇南遺跡などがあり、総数22基を数える(第5表)。本遺跡のものと比較すると、規模において鶴ノ丸遺跡発見の円形周溝に近似するものがあるが、直徑は一辺が10mを超えるものが一般的

第5表 宮城県内発見方形周溝墓、円形周溝一覧

(昭和57年10月現在)

遺物名(数)	No.	立地	周溝					土質
			形態	規模	上端巾	底面巾	深さ	
今泉野 (9基)	1	低丘陵	コーナー3ヶ所にブリッヂを有する方形	21~23			0.5~1.5 で一定しない	土師器壺(底部穿孔) 無
	2	*						
	3	*						
	4	*	コーナー1ヶ所にブリッヂを有する方形	8.5×8.5			0.7	土師器壺 有
	5	*		(4分にはば同じ)				無
	6	*		(1号にはば同じ)				土師器壺 無
	7	*						
	8	*						
	9	*						土師器壺
東館 (1基)	1	台地	隅形長方形(全周)	15.4×13.2	1~2.2	0.4~1.4	0.7	土師器壺(体部穿孔) 無
	1	丘陵の先	コーナー1ヶ所にブリッヂを有する方形	19.5×17			0.8	土師器壺(複合 口縁、底部穿孔なし) 右
鶴ノ丸 (8基)	1	台地	隅丸長方形(全周)	10.4×9.2	0.7~1.3	0.2~0.9	0.3~0.4	土師器壺(体部穿 孔) 焼 有
	2	*	隅丸長方形(全周)	10.3×9.5	1~1.6	0.5~1	0.2~0.4	無 無
	3	*	隅丸長方形(全周)	14.5	1.7~1.9	0.8~1.6	0.25~0.5	土師器壺 有
	4	*	円形(推定)	10.5	0.8~1.1	0.3~0.8	0.3~0.45	繩文土器・弥生土 器・土師器 有
	5	*	構円形(全周)	6.65×6.05	0.2~0.7	0.1~0.4	0.1~0.5	土師器壺 無
	6	*	円形(推定)	7.5	0.6~1	0.4~0.6	0.1~0.4	無 無
	7	*	円形(推定)	12	1.2~2.2	0.6~1.8	0.35~0.4	無 無
	8	*	円形(全周しない)	12.2	0.6~1.5	0.3~1.1	0.1~0.65	土師器 無
安久東 (1基)	1	沖積地	1ヶ所にブリッヂを有する長方形	24.5×18	1.8~2.6	1.4~3	0.2~0.9	土師器壺(底部穿 孔)、壺、高環 無
	1	台地	円形	14.5~15.5	0.8~2.7	0.4~1	0.45	弥生土器・土師器 有
西野田 (2基)	2	*	円形	11.5~12.0	0.9~1.8	0.5~1.2	0.05~0.1	弥生土器・土師器 無
	1	*	隅丸方形(全周)	10.2×9.5	0.3~0.9	0.1~0.4	0.1~0.5	有

(単位 m)

であり、築造年代も古墳時代前期一塙式期とみられていることなど、本遺跡のものとは様相を異にしている。

このような墓と集落との関係については、今熊野、宇南、西野田遺跡などで、両者が位置的な隔たりを示し、住居を造り生活を営んだ「場」と墓を営んだ「場」とに違いのあることが指摘されている。しかし鶴ノ丸遺跡などではその違いは見られない。本遺跡の場合、南小泉式期の堅穴住居跡は、本調査区の北方約250mで2軒検出されているが、今回の調査区からは発見されなかった。また南小泉式期の遺物の出土量も少なく、居住の場として使用されていた跡は認められない。しかし、生活の営まれた「場」と墓の営まれた「場」の検討は、鴻ノ巣遺跡内の遺構の広がりを明確に把握していない以上、資料の増加を待つべきであると思われる。

また、ここで注目したいのは、調査区の東北東1.8kmの多賀城市山王遺跡についてである。山王遺跡については、概報のみで本報告が未刊なため詳細を知り得ないが、遺跡内で石製模造品が製作され、さらにそれらの石製模造品が「墓」と考えられる遺構より出土している。(石製模造品については(Ⅳ-2(8)を参照)山王遺跡において墓と考えられる遺構は、楕円形状及び溝状を呈し、石製模造品の他に白玉、ガラス玉、琥珀玉などの玉類、古墳時代中期の土師器(調査者より南小泉式との御教示を得た)を出土し、木炭の含まれているものもある。これらの楕円形状及び溝状の遺構を墓とすると、同じ南小泉式期と考えられる本遺跡の周溝墓とは形態、副葬品等に違いが見られる。山王遺跡の上塙墓の場合、平面形にはらつきがあり、かならずしも一定ではない。また、出土遺物を見ても、多量の土師器が出土していることや、石製模造品が剣形、有孔円板によってしめられ、勾玉形は見られない。

このような墓の形態、副葬品等の違いが、何に起因するものなのかは、現時点では不明である。南小泉式期の集落における墓の位置、形態についての類例の増加を待たなければ、明言することはできない。

2. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は縄文土器、土師器(环・高台付环・高环・器台・壺・甌・台付甌・段皿)、須恵器甌、赤焼土器、瓦、自然遺物、陶磁器、石製品、木製品、鉄製品、土製品、動物遺存体等で、平箱に13箱程である。

この中で土師器甌、赤焼土器環の出土量が多い。これらの土器は各遺構内から出土しているが、特にSD-1溝跡、SD-21溝跡、SX-1性格不明遺構、SK-7土塹からの出土量が最も多い。その中でSD-1溝跡、SX-1性格不明遺構出土の土器を図示したものだけが全体の60%にも及ぶ。

次に各器種、器形の特徴について記述する。

(1) 縄文土器

縄文土器は細部の破片5点が出土し、SD-10、12、19溝跡、SX-1性格不明遺構から出土している。器形や文様構成が判明するものはほとんど認められない。(第32図1、第40図1・2・3、第42図1)は単節L.R縄文が横位に回転施文されている。(第42図1)は単節L.R縄文が横位に回転施文された後、工具により沈線が描かれている。

(2) 土師器

土師器には壺、高台付壺、高壺、器台、壺、甕、鉢、台付甕、段皿等の器種がある。製作に際し大きく2つに分類され、ロクロ未使用とロクロ使用のものがある。ロクロ未使用のものはA類、ロクロ使用のものはB類とする。

壺

製作技法の相違により、大きく2つに分類できる。

A類……製作に際し、ロクロを使用しないもの

A類は体部の器形によって3類に分類される。

A I類一体部が丸味をもって立ち上がるものであるが、その形態には、(1)口縁端部がわずかにくびれて、内面に稜をつくるもの(第43図1)、(2)口縁部が緩く外反し、内面に稜をつくるもの(第43図2)、(3)口縁部が直線的に外傾し、内面に棱を有するものがある(第43図3)。A I(1)類は体部外面と口縁部内面にハケメ、体部内面はヘラナデが施される。A I(2)類は体部外面へラケズリ、内面にヘラナデ口縁部は内外面ヨコナデ、一部ハケメが施される。A I(3)類は内外面ヘラミガキで、体部内面ヘラナデ後ヘラミガキが施される。

A II類一体部が緩やかに立ち上がるもので、口縁部はほぼ直立気味となる。磨滅が激しく器面調整は不明である(第43図4)。

A III類一体部外面中位に段を有するものである。外面は口縁部ヨコナデ、体部から底部にかけへラケズリ、内面はヨコナデ後ヘラミガキが施され、黒色処理は施されていない(第43図5)。

B類……製作に際しロクロ使用のもの

B類は体部から口縁部まで大きく外傾するもので、細かな器形の変化により2類に分類される。

B I類一体部から口縁部まで緩やかに外傾するもの、底部は平底、底部切り離しは回転糸切りである。外面ロクロ調整、内面は横方向へラミガキで黒色処理されている(第43図6)。

B II類一体部から口縁部まで緩やかに外傾する。B I類と比して、口径に対し器高が低い(第43図7)。

高台付壺

いずれも製作に際しロクロを使用している。体部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がり、底部切り離しは回転糸切りで高台を貼りつけている。外面ロクロ調整、内面はヘラミガキで黒

色処理されている(第11図6、第12図28)。

高 壱

全てロクロ未使用のものである。全体の器形のわかるものは出土しなかった。

壠 部一壠部で図化したのは僅か3点である。口縁部まで残存しているのは一点のみで、体部から口縁部まで直線的に外傾するものである(第32図2・3)。内外面ハケメ後ヘラミガキが施されている。

脚 部一円錐台状の脚部で孔を有するもの(第30図2)と、筒状の脚部で裾部に至って広がるもの(第38図2)とがある。

器 台

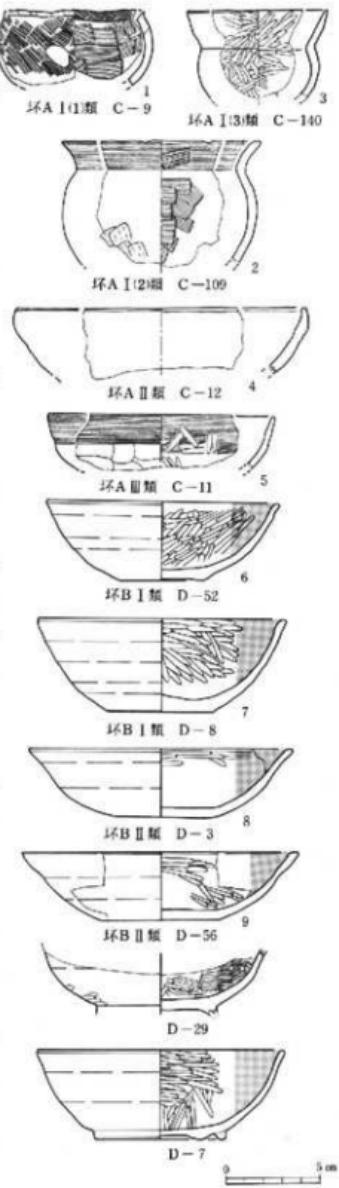
図化したのは1点のみである。脚部下半を欠損しているが、脚部に比して受部がきわめて小さく浅いものである(第38図1)。器形は円錐台状に開くもので、受部から脚部に貫通孔を有している。脚部には、孔が1個穿たれた痕跡がある。外面はハケメ後ヘラミガキ、さらに内外面ともナデが施されている。

壺

壺として扱ったものは、頸部から口縁部までが甕に比して長いものである。口縁部の形態によって3類に分類される。

I 類一複合口縁を有するもので、内外面ハケメ、一部ヘラミガキ、ヨコナデが施されているもの(第44図1)である。

II 類一有段口縁を有するもので、(1)ボタン状の浮文がつくものと、(2)そうでないものがある。II(1)類は内面ヘラミガキ、外面ハケメ後ヘラミガキが施され浮文をつけるものである(第44図2)。II(2)類は内面ヘラミガキ、外面は



第43図 土器・壺

磨滅のため不明である。(第44図3)

III類一單純口縁を有するもので、口縁端部はヨコナデ、外面ハケメ、内面ヘラナデが施されているものである(第44図3)。

■

A類……製作に際しロクロを使用しないもの

A類は口縁部の形態によって2類に、体部から底部の器面調整によって3類に分類される。

A I類一複合口縁を有するもので、口縁端部はヨコナデ、内外面ハケメが施されるものが多い(第45図1)。

A II類一単純口縁を有するもので、その形態には(1)頸部から口縁部にかけて「く」の字状に屈曲して外反するもの(第45図2)、(2)頸部から口縁部にかけて緩やかに外反するものがある(第45図3)。**A III類**

(1)類は体部外面ハケメ、内面ヘラナデ一部ハケメ、口縁部はヨコナデが施されるものが多い。

A III(2)類は内外面ヨコナデ後ハケメ、あるいはヘラナデが施されている。

A IV類一体部外面はハケメ後一部ヘラケズリ、内面はヘラナデ一部ハケメが施されている(第45図4)。口縁部が**A II(1)類**の形態を示すものがある。

A V類一体部外面はハケメ後一部ヘラケズリ、ヘラミガキ、内面はハケメが施されている(第45図5)。

A VI類一体部内外面ヘラミガキが施されるもの(第45図6)。

基本的には、**A III～A VI類**は平底で、体部が球形を呈する壺と考えられる。

B類……製作に際しロクロ使用のもの

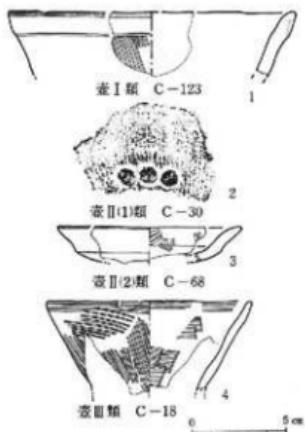
B類は最大径の位置によって2類に分類される。

B I類一最大径が口縁部にあり、頸部でくびれて口縁部で外反する。頸部、体部下半欠損の為、器面調整が不明のものが多い。内外面ともロクロ調整である(第45図7・8・9)。

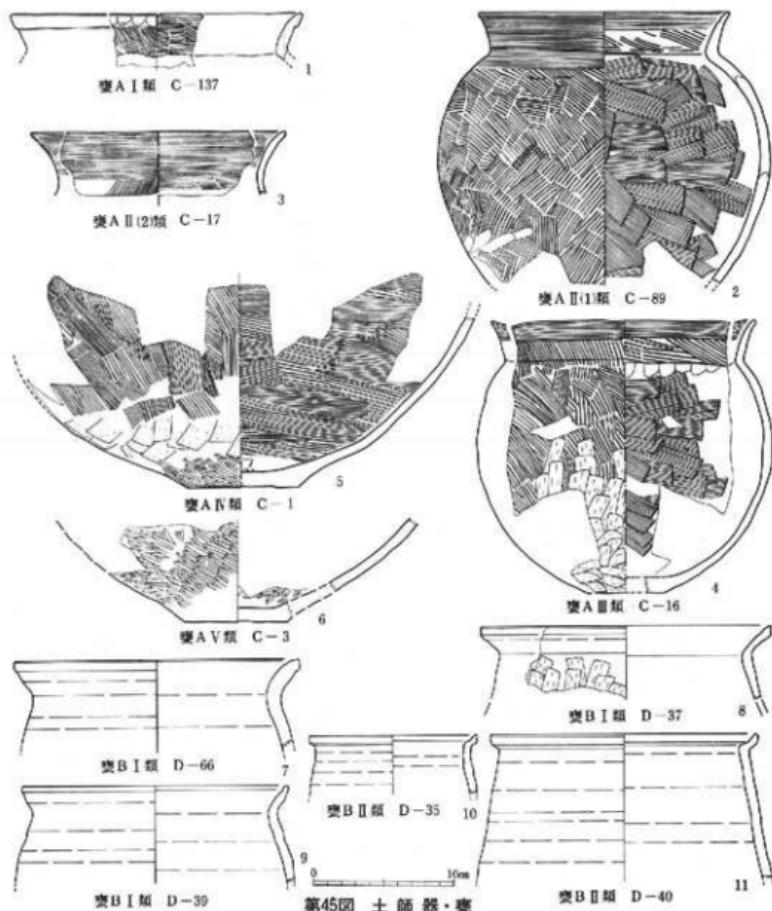
B II類一最大径が体部にあり、頸部でくびれて口縁部で外反しており、端部は上方に立つ。体部下半欠損の為、器面調整が不明のものが多い。内外面ともロクロ調整である(第45図10・11)。

■

製作に際しロクロを使用し、体部から内窪して立ち上がり、口縁部は僅かに直立する。口縁



第44図 土師器・壺



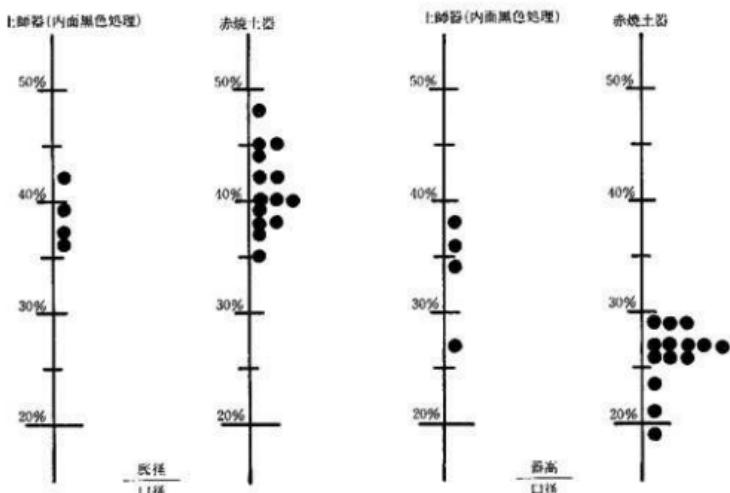
径13.7cmである。(第41図12)

台付甕

台部のみで、口縁部から体部については不明である。図化したのは3点で、器形は円錐台状に開くものである。内外面ハケメが施されるもの（第32図5・第34図13）と、外面ハケメ、内面はヘラナデが施されるもの（第34図12）がある。

段皿

製作に際しロクロを使用し、内外面ともヘラミガキ、黒色処理が施されている。高台は低く、



第46図 坯口径と底径の比・坯口径と器高の比

底部から直線的に大きく外傾する。内面は中位で段を有し、口縁端部は短く外反している。法量は、口径12.7cm、器高2.1cm、器厚1.1~1.3cmである(第12図27)。

出土土師器の年代について

土師器は前項のように分類されるが、次に製作に際してロクロ未使用、ロクロ使用のものを、一器種ごとに、他遺跡からの出土例を踏まえながら年代を検討する。(尚、文中の“岩切鴻ノ巣遺跡”は昭和48年宮城県教育委員会による調査をさす。)

坏

A I(1)類は小形で、精製されたものである。形体的に類似したものに西野田遺跡第10号住跡ピット1出土の小形手澄ね土器がある。このピットからは、脚部が中実を呈する高坏や、ハケメ調整の顕著な變片が出土している。よって塙釜式と考えられる。

A I(3)類は、清水遺跡第38号住跡推積土、ならびに遺物包含層出土の坏(第1群土器)、鶴ノ丸遺跡坏I B II類と類似するものである。よってこれらは塙釜式と考えられる。

A I(2)類は、岩切鴻ノ巣遺跡の坏A I C類、塙沢北遺跡A類ときわめて類似するものである。またA II類も、岩切鴻ノ巣遺跡の坏B II d類と類似するものである。よってこれらは、南小泉式と考えられる。

A III類は、体部に段を有し、黒色処理されていない。このような特徴をもったものは、住社

遺跡、川町裏遺跡、山ノ上遺跡より出土しており、住社式と考えられる。

高 ジ

(环部) 体部から口縁部まで直線的に外傾し、ハケメのちヘラミガキが施されている。

この特徴をもつものは、大橋遺跡高環B類、岩切鴻ノ巣遺跡高環D類と類似し、塩釜式から南小泉式のものであろう。

(脚部) 円錐台状に開き孔を有するのは、大橋遺跡、清水遺跡、安久東遺跡、岩切鴻ノ巣遺跡などから出土し、從来塩釜式期の高環脚部の特徴とされてきたものである。また筒状の脚部を有するもののうち、脚部内面が中空でヘラケズリを施されたもの(第38図2)は、岩切鴻ノ巣遺跡高環D類の脚部に類似する。

器 台

受部が小さく浅いものである。脚部に孔が穿たれていることと、器台が南小泉式になると出土例が知られていないことなどから、塩釜式と考えられる。

壺

I類は、大橋遺跡の壺A2類、西野田遺跡壺B類に類似している。またII(1)類は同様のものを他遺跡に類例を見出せないが、壺の中でも装飾的要素が強いものである。このように壺に装飾的要素のあるものは、塩釜式のものでも古いものと考えられる。さらにII(2)類は、今泉城19号土壙、安久東遺跡方形周溝墓出土壺に類似している。III類も、大橋遺跡の壺B類、西野田遺跡A類に類似したものである。よってこれは塩釜式と考えられる。

甕

A I類は、複合口縁を有している。またA II類は、大橋遺跡甕B 2類、岩切鴻ノ巣遺跡B類安久東遺跡方形周溝墓出土甕に類似する。さらにA III類は、頸部から口縁部にかけてA II(1)類の形態を示すものがある。よってA I、A II(1)、A III類は塩釜式と考えられる。

A II(2)類とA V類はこの特徴だけで年代の検討をするのは困難である。しかしA II(2)類については、共伴する遺物に塩釜式の特徴をもつものが多いことから、塩釜式の可能性がある。

A IV類は、内外面のハケメ調整が顕著なものである。また図示した遺物と同一個体と考えられる口縁部が、単純口縁で直線的に直立するきわめて特徴のあるものである。このような形態を示すものに、岩切鴻ノ巣遺跡壺C類を上げることができ、南小泉式のものである。しかし壺C類は器面調整という点において違いがありヨコナデが施され、ハケメ調整は見られない。ハケメ調整は土師器の調整技法上古いという指摘(註6)もあり、ここではA IV類を塩釜式から南小泉式と位置づけたい。

台付甕

台付甕は、今泉城19号土壙、西野田遺跡5号住居跡より塩釜式の土師器と共に出土し、南小

泉式になると発見例が知られていないことから塙釜式と考えられる。

ロクロ未使用の土師器は塙釜式のものが多い。とりわけSX-1性格不明遺構からは、壺A I(2)、A I(3)類、壺I類、甕A I、A II(1)類、台付甕等が出土されている。しかし、それらとともに南小泉式と考えられる壺A I(2)類も出土している。土器の組み合わせから考へるなら、壺A I(2)類も塙釜式に含まれるべきである。ただ、SX-1性格不明遺構の遺物出土状況を見る限り、細破片が多く入為的な廃棄によって堆積したものと考えられる。住居跡出土の一括遺物などとは別に扱うべきであろう。よって、壺A I(2)類は器形の特徴から南小泉式に位置づけたい。

- 製作に際しロクロを使用しているB類土器は、壺、高台付壺、甕、鉢、段皿等で、土師器全体の出土量と比して少量である。

本遺跡SD-1溝跡から、土師器壺・高台付壺・甕・盤・段皿・赤焼上器壺・高台付壺が共伴して出土している。土師器壺B I、II類は、底部切り離しが回転糸切りで、再調整の施されていないものである。上師器と共に出土している赤焼土器は、底部切り離しが回転糸切り技法で、底部切り離し後内外面に再調整が施されていないもので外面のロクロ目の凹凸が少ないという共通した特徴を持っている。また全体的に見ると、土師器壺は底径に比して口縁径が大きく、器高が高く、赤焼土器は底径に比して口縁径が小さく、器高が低めである。これらの土師器壺、赤焼土器の出土量が多い。

本遺跡出土遺物のB類壺は、清水遺跡Ⅳ群土器C群上器に類似性が見られる。C群土器の土師器壺は回転糸切り技法、無調整の壺が主体を占め、再調整も含まれる。またC群土器は底径が他より小さい。安久東遺跡第2号住居跡出土の土師器壺、赤焼土器についても類似性が見られ、底部切り離し技法が回転糸切り技法、無調整である。壺体部は緩かに立ち上がり、口縁部でわずかに外傾するものが主体を占めている。本遺跡出土の壺B類は、清水遺跡Ⅳ群土器C群土器壺、安久東遺跡第2号住居跡出土の土師器壺と同様の特徴を持っている。また安久東遺跡第2号住居跡から、11世紀に比定されている灰釉陶器が出土していることから、上師器、赤焼土器の年代を11世紀に比定している。さらに清水遺跡Ⅳ群土器C群土器の年代でも11世紀に比定している。本遺跡出土の土師器壺B I～II類も、ほぼ同時期のものと思われる。このような特徴を持つ土師器は「氏家和典氏東北地方の土師器型式編年」の中に位置づけると、最終型式にあたる表杉ノ入式に比定され、その中でも平安時代後半のものと思われる。

(3) 須恵器

須恵器は大部分が破片で、全体の器形のわかるものはない。

甕口縁部片は頸部でくびれ、口縁部は外反し、端部が上・下側方に突き出すもの(第13図38)と、体部片で外面平行タタキメ、内面ナデ調整のもの(第13図37)がある。

(4) 赤焼土器

器形は壺、高台付壺、皿で全て製作に際しロクロを使用している。底部切り離し技法は、回転糸切りである。色調は灰白色、橙色、浅黄褐色と様々である。壺・皿は法量で区別でき、口径、底径はほぼ同一であるが、壺の器高は3cm前後、皿の器高は2cmと分かれる。これらの土器は大半がSD-1溝跡出土で、若干他の造構からも出土している。

壺

全て底部切り離し技法は、回転糸切り技法によるものである。

形態的に分類すると、

I類 - 体部から緩やかに立ち上がり、口縁部で直立ぎみのもの(第47図1)。

II類 - 体部から口縁部まで直線的に外傾するもの(第47図2・3・4)。

III類 - 体部から緩やかに立ち上がり、口縁部でやや外傾するもの(第47図5・6・7・8・9・10)。

I～III類の法量はほぼ同一で、口径9.8～11.7cm、器高2.8～3.2cm、底径3.8～4.8の範囲で収まる。

II類のD-63だけは、口径14.2cm、器高3.7cm、底径5.4cmと全体的に法量が大きい。

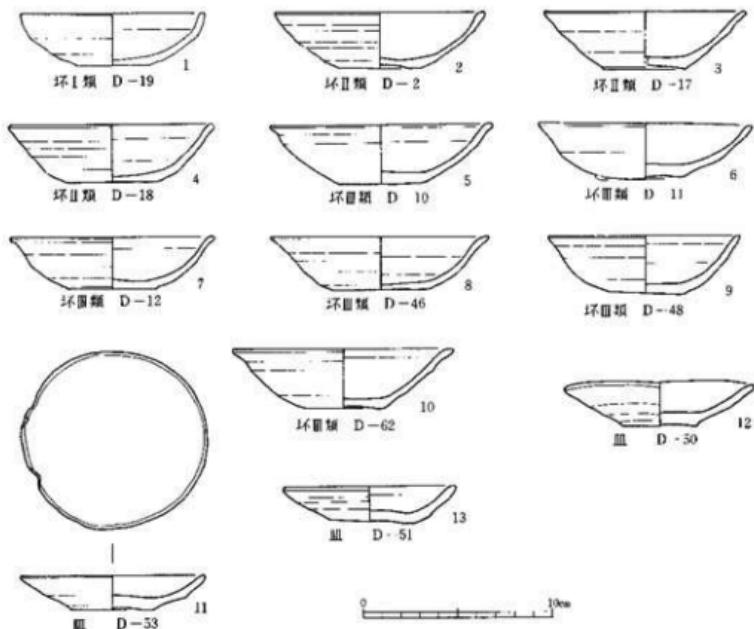
皿

平底で体部から直線的に外傾し、口縁部までが短い。法量は口径が9.2～10.1cm、器高1.8～2.3cm、底径4.0～4.4cmの範囲に収る(第47図13・14・15)。D-53は口縁部に2つ凹が施されている。

高台付壺

高台付壺は壺部、高台部片5点のみである。高台部(第12図23・24)は僅かに開き、端部でやや細まる。土師器高台付壺より高く、法量は3.5cmを計る。壺部(第12図25・26)は、壺底部から直線的に外傾し大きく開く。口径は16.0～17.8cmを計る。

いわゆる赤焼土器は、器内面にヘラミガキ、黒色処理を行なわず、底部切り離し技法は、回転糸切り技法によって切り離されている。再調整のない土器について、1975年頃から使用されてきた名称である。近乍、上新田遺跡、水入遺跡の報告の中で、本米、赤焼土器は土師器の範囲に入り、器形は壺類等小形品に限るべきだとして、壺形小形品の中でも両面にヘラミガキ、黒色処理が施されていないものとしている。本遺跡でも、基本的に土師器と色調、胎土とも類似し、異なった焼成方法による土器とは考えられないことから、器内面にヘラミガキ、内面黒色処理されない壺、高台付壺、皿と、内黒土師器を区別する意味で、赤焼土器とした。本遺跡出土の赤焼土器は、製作に際しロクロを使用し、共伴する土師器等から表杉ノ入式に比



第47図 赤焼土器

定される。また、表杉ノ入式の土師器、赤焼土器については、最近発掘調査が増加するのに伴い、種々検討が加えられて、変遷が指摘されている。最近報告された上新田遺跡第8号住居跡内出土の赤焼土器は、9世紀初頭と考えられる土師器環、須恵器環と共に作し、9世紀中葉にはすでにロクロ技術導入の段階で存在していたことが確認されている。また、安久東遺跡第2号住居跡内出土の赤焼土器は、口径に対し底径が小さく、体部から口縁部にかけて丸味をもつて外傾し、底部回転糸切りで、共伴する土師器環、灰釉陶器から年代を11世紀と考えている。また、五輪C遺跡第4号、10号住居跡内出土の赤焼土器は体部から口縁部にかけて、やや丸味をもつて外傾するもので、底部回転糸切り、無調整である。年代は共伴する土師器環、また安久東遺跡出土の赤焼土器から平安時代後半と考えられている。また、植田前遺跡第2溝状遺構出土の小形環は、平底で体部から直線的に外傾し、口縁部までが短いもので、年代を平安時代末期に位置づけている。これら赤焼土器は、平安時代の中で器形、形態が大きく変化したと考えられる。初期から前半にかけては器形、底部切り離し技法が多様であり、後半には器高、底径が小さくなり、器種が限られ、底部切り離し技法が一様化していくようである。

本遺跡出土の赤焼土器は、SD-1溝跡堆積土1~3層出上で、赤焼土器の他に土師器内壺、段皿、高台付壺、甕、須恵器蓋等を出土している。出土遺物の中で赤焼土器は主体を占め、須恵器片は出土しているが、壺は一点も出土していない。上新田遺跡で指摘しているが、須恵器小形品に変わって赤焼土器が主体になっていくと推察している。

遺物量が少なく資料的にやや乏しい感もあるが、壺I~III類は、「安久東遺跡」「五輪C遺跡」「多賀城出土土器E・F群」に類似性が求められる。皿は、「植田前遺跡」と比較して、器厚やや薄いと思われるが類似性が認められる。これらから壺I~III・V類は平安時代後半に位置づけ、皿は12世紀後半に位置づけたい(註7)。

(5) 瓦

瓦はI区から1点、II区9点、表採1点、合計11点のいずれも小破片が出土している。溝跡、井戸跡から出土しており、丸瓦が2点、平瓦8点、破片の為不明なものが1点である。丸瓦(第24図5・6)は凸面を繩叩きのちスリ消しているが、部分的に繩叩き目が残るものがある。凹面は布目である。平瓦(第24図1~4、第35図1・第40図5・第42図8・9)は凸面が繩叩き目、凹面は布目であるが、G1・9は布目をスリ消している。瓦を出土する各遺構からは土師器(クロクロ使用)、中世陶器等を出土していることから、奈良時代~平安時代の瓦が混入したものと考えられる。

(6) 自然遺物

自然遺物は、ほとんどSE井戸跡から出土している。炭化した繩、栗の実等である。

(7) 陶磁器

出土量は少なく全て破片で、合計13点出土している。器形は大甕、壺の2種類で、個体数は甕の口縁部片1点、体部片10点、壺は三筋壺の肩部と体部片各1点である。図化し得たのは4点である。その他は小破片である。

大甕(第23図11)は調査I区SE-4井戸跡、耕作土中出土の肩部、及び口縁部の破片である。口径34cm、頸部から肩部にかけて強い張りが見られ、さらに大きく外反しながら口縁部に至る。調整は頸部、口縁部、内外面とも横ナデ、内面肩部に粘土紐の接合痕の凸凹が観察される。色調は黒褐色を呈し、胎土は砂粒が多く含み、小さな気泡が認められる。

三筋壺(第23図9)は調査I区SE-2井戸跡堆積土2層から出土している。肩部破片であるが肩部に2本の浅い沈線(幅2mm、深さ0.3mm)が巡る。外面は一部ハラケズリ痕が残り、内面は粗くナデ調整がなされている。色調は外面が暗灰色一部肩部上半は暗オリーブ色、内面が褐灰色を呈する。器厚は1.0cm程で、胎土は砂粒を含み硬い。

三筋壺(第41図14)は調査I区耕作土中から出土している。体部下半の破片であるが、体部に一本の浅い沈線(幅1.5mm、深さ0.2mm)が巡る。体部外面は一部ハケメ後ナデ、内面は粗く

ナデ調整されている。色調は外面が赤褐色、内面は灰赤色である。胎土は砂を含み硬い。尚、(第23図9と第41図4)は同一個体の可能性がある。

甕(第41図15)は大甕の体部細片で押印が施されている。細片の為押印の全容は不明であるが籠状格子目押印に類似している。

中世陶器のうち大甕(第23図11)は口縁部の形態、肩の張り具合、胎土等から源氏窯と推察される。その他の甕については、体部破片である為、生産地、生産時期は不明であるが、その中の1点、内部から噴き出るような気泡のある暗赤褐色の破片は白石市東北窯跡のものと考えられる。

複線で引かれた三筋壺は古式に属するとされ、古常滑の代表的なもので平安末期のものが上で、鎌倉初期が三筋壺の終末とされている。このことから、年代は平安時代末(12世紀後半)とされ、生産地は常滑と考えられる。これまで宮城県内で発見された三筋壺の出土地は次の通りである(註8)。

遺跡名	種類	所在地
伊達神社	絆塚	加美郡色麻町
不動山	絆塚	玉造郡岩出山町
田東山	絆塚	本吉郡歌津町
原	絆塚	玉造郡岩出山町
多賀城跡		多賀城跡大畠地区
高藏寺		角田市高倉字大門

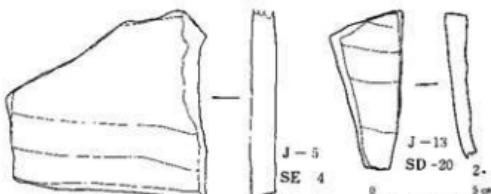
青磁・青白磁

調査区耕作土中より、口縁部片2点出土している。器形は碗形と思われる(第37図1)。釉はオリーブ灰色、胎土は灰色を呈する。(第37図2)は釉は灰白色、胎土は灰色を呈する。各々2点とも文様は認められるが、細片の為全体の文様、年代については不明である。

その他

陶磁器の細片が3点出土している。(第42図10)は近世以降の破片であるが、擂鉢と考えられる。内面に縦の節目がある。色調は暗赤褐色である。

研磨痕のある須恵器片、陶器片



第48図 研磨痕のある須恵器、陶器片

研磨痕のある陶器片はSE-4井戸跡、須恵器片はSD-20溝跡より出土している。これ等の破片は甕片と思われ、(第48図2)は三面の周辺部を研磨している。色調は灰色である。(第48図1)は一面を研磨している。色調は黒色で胎土は紗を含み硬い。いずれも共伴する出土遺物から平安時代後半以降のものと思われる。尚、用途については不明である。

(8) 石製品

石製模造品

石製模造品は、有孔円板2点がSD-11溝跡、調査II区遺構検出面から、勾玉がSK-6土城から出土している。有孔円板(第40図4)は、ほぼ楕円形を呈し、扁平な円板のほぼ中央部に1個の小孔が穿たれているので、孔は全て一方向から穿たれている。製作にあたっては表裏両面及び側面に研磨しており、擦痕が認められる。(第37図4)は直径2.2cm、厚さ0.4cm、孔径1cm。(第40図4)は直径2.9cm、厚さ0.5cm、孔径0.2cmである。石材は結晶片岩である。勾玉(第28図2)は扁平な半円形状を呈し、片端寄りに1個の小孔(直径0.2cm)が穿たれている。表裏両面及び側面に剝離痕跡が認められ、全体が研磨されている。色調は灰色、石材は結晶片岩で一部風化により変質している。

ここで注目したいのは、本調査区の東北東1.8kmの多賀城市山王遺跡についてである。

山王遺跡では、剣形、円板形(有孔円板)、刀子形の石製模造品、さらにその未完成品、原石等が出土し、遺跡内において石製模造品を製作していたと思われる。山王遺跡出土の石製模造品のうち、孔が2個あるものが多い。本調査区から出土した有孔円板は、孔が1個あるもののみである。しかし昭和48年の宮城県教育委員会の調査においては、有孔円板が11点出土し、うち7点までは孔が2個あるものである。これらが山王遺跡内で製作されたものかどうかは、不明であるが、遺跡の位置関係からみて、古墳時代中期における集落内、あるいは集落間の問題として追求して行くべき課題と思われる。

鏡

長方形の鏡で、海部周縁被片の為、全容は不明である。(第37図3)

砥 石

砥石は1点のみ出土し、SE-2井戸跡堆積土中からである(第23図10)。石材は灰白色の細粒質凝灰岩である。破損面を除く砥面は、皿状に凹んだ面を呈し滑らかである。砥面として使用された面は、上下両面、両側面の4面で、長さ6.7cm、幅1.4~2.6cm、厚さ1.0~2.7cmと小片になるまで使いこまれ、丁寧な整形を受けていること等から、仕上げ砥のか中砥的なものと考えられる。

(第42図7)は耕作土から出土している。磨面及び打痕が認められる石材は粘板岩で風化している。器形は不明の為、石製品とする。

(9) 木製品

桶、船形、その他の木材片等が出土している。桶はSE-6井戸跡の底面直上で出土している。桶の底板と思われ、(第25図1・2)は1対になる。形は梢円形で最長幅45cm、最小幅30cm、厚さ3cm程で板状の柾目材を使用している。表裏両面、両側面を削りの整形が施された痕跡が見られる。(第25図5)は、木を棒状に削り上げたもので、長さ31cm、断面形はほぼ円形で直径4cm程、面は削りの整形が施され、上下端部は太さが徐々に細くなり、その先端部は使用による摩滅と思われる。農具あるいは生活用品に使用されたと考えられる。(第25図4)は、薄い板状の柾目板を使用している。長さは11.3cm、幅3.0cm、厚さは1.8cmである。表裏両面は削りで整形され、両側面は一部削り取られ加工されている。下端部は直径0.9~1.2cm、長さ2.0cmに突出し、突出先端はやや細く、柄に差し込むもので、家具及び農具の一部に使われたと考えられる。(第25図3)はSE-4井戸跡堆積土中より出土している。船形は全長10.9cm、幅2.2cm、高さ1.5cm程である。船形は長方形の柾目板を削り出し、船体内側はノミ状工具で船底を彫り込んでいる。舷側は削り出し、舷上部は細く、舳は角形で、張出し部に舵用と思われる孔を穿つ。舳裏面は鋸で切込み段をつけている。船底はほぼ平底である。現在まで井戸跡内からの木製品の発見例は県内で最近多く調査されるようになったが、全体として発見例は少ないと思われる。その中で調査地の土壤、地下水位の関係などから井戸跡出土の木製品は極く限られ、遺存状態等からしても極く少數である。ほぼ定形で出土した船形(第25図3)は、井戸跡からの発見例はあまり知られていない。類例として広島県草戸千軒町遺跡第26次調査SE-1670、1710井戸跡、第27次調査SG-1791池跡出土の船形と類似し、調査者は「当時の人々の信仰に関する」ものとし、年代は鎌倉時代~室町時代と考えている。また鳥羽離宮跡調査第59次SD-5溝跡でも出土している。本遺跡出土の船形の用途については不明であるが、当時の地域性、生活様式を考える上で民俗学的な面からも検討する必要があると思われる。

(10) 鉄製品

刀子は調査II区SK-6土壤底面直上で出土した。全体的に錆化が進み、不明瞭であるが、現存長は21.6cmを計る。刀身長は15.6cm、身幅は刀身中央で2.3cm、棟幅は刀身部で1.2cmを計る。柄の長さは6.0cm、幅は1.4cmである。断面形は梢円形である。(第28図1)

(11) 土製品

調査区内から4点出土している。器形、器種の判るものは2点である。(第18図11)はフイゴ羽口の破片であるが、残存部から推定して直径は4cm程の円筒形である。(第42図4)は、器種、部位等は不明である。

(12) 動物遺存体

馬の歯 調査I区SE-3、5井戸跡、調査II区SD-1、20溝跡等から歯の細片6点出

土したが、遺存状態が不良の為、詳細は不明である。

種別	器形	部位	表面・調整		層位	計
			外 面	内 面		
土 环	口縁部 体部 底部	口 緣 部	ロ ク ロ	内 黒	40	4 44
		口 縁 部	ロ ク ロ	内 黑	60	60
		底 部	糸 切 り	内 黑	7	7
師 器	口縁部 体部	口 縁 部	ロ ク ロ	ロ ク ロ	11	11
		ケズリロクロ	ロ ク ロ	ロ ク ロ	5	5
	高台付环	底 部	糸 切 り	内 黑	6	6
須 恵 器	口縁部 体部	口 縁 部	ナ デ	ナ デ		
		平行タタキ	ナ デ	ナ デ	20	20
赤 燒	口縁部 体部 底部	口 縁 部	ロ ク ロ	ロ ク ロ	120	120
		口 縁 部	ロ ク ロ	ロ ク ロ	151	151
		底 部	糸 切 り	ロ ク ロ	33	33
土 器	高台付环	高台部	ロ ク ロ	ロ ク ロ	2	2
		环 部	糸切ロクロ	ロ ク ロ	3	3
合			計		458	4 462

第6表 SD-1 滝跡出土土器破片集計表

Ⅴ ま と め

本遺跡の遺構・遺物については記した通りである。これらの検討から次のような成果と問題が指摘される。

1. 挖立柱建物跡は、5棟分検出されたが、ほとんど全容を明らかにすることは出来なかった。SB-1 挖立柱建物跡(2間×3間以上)は三面に1.0~1.2mの庇がつく建物跡で、全容は明らかでないが、四面庇の建物跡になる可能性もある。検出された建物跡は、出土する遺物、柱穴掘り方の規模からおむね鎌倉時代以降と考えられる。

2. 周溝墓(SK-6・SD-15)は、出土遺物から南小泉式期と考えられる。南小泉式期の墓としては、古墳を除いてあまり知られていない。このような周溝墓は、東北地方において塙釜式期のものが知られている。本遺跡で検出された周溝墓は、塙釜式期のものと比して規模の小さいものである。また明らかに上体部と考えられる墓壇を検出した例は、福島県須賀川市いかづち古墳群内の方形周溝墓、山形県米沢市八幡堂遺跡内の方形周溝墓(註9)のみである。

3. 古墳時代の遺物としては、土師器、石製模造品等が出土している。特に土師器は、SX-1性格不明遺構、SK-2・7土壙より埴釜式期の土師器を出土している。塙釜式の土師器については県内の大橋、西野田、留沼、鶴ノ丸遺跡出土の土師器によって細分が試みられている。本遺跡の場合は、細片のため復元できるものが少ないと、住居跡等の遺構に伴っていないため、参考資料に留めたい。

古墳時代以降の遺物は、土師器、須恵器、赤焼土器、中世陶器等である。特に県内では、あまり出土例が知られていない三筋壺を出土している。また段皿は、岩手県江刺市瀬谷子遺跡出土の段皿に類似しており、本遺跡出土の段皿と比して、口径、盤高は大きいが器形的には、ほぼ同一と思われる。なおこの段皿については、小笠原好彦氏は『東北における平安時代の土師器について2・3の問題』の中で次のように述べている。「同時期に共存する土師器、あかやき土師の器種には、須恵器と密接な関連をもっているが、中には須恵器にみられない、高台付の小形皿、耳皿、段皿のものがある。これらは須恵器より灰釉陶器、綠釉陶器の影響を受けている」と指摘し、多賀城跡第15次調査区堆積土6層出土の耳皿、瀬谷子遺跡出土の段皿等に見られるとしている。本遺跡出土の段皿も、これらの影響を受けていると思われる。

4. ほとんどの溝跡は、平安時代~中世のものと考えられ、本遺跡が自然堤防上に立地していることから、当時自然堤防上に何らかの区画した溝と考えられる。またSD-21溝跡は、出土する遺物からみて古墳時代前期のものであると考えられる。

5. 井戸跡は12基検出され、掘り方は素掘りのものである。これらの井戸跡は、それほど深くではなく、ほぼ近隣し間隔が狭く、特に調査T区中央で6基検出されている。また井戸跡堆積土中から中世陶器等の遺物が出土し、近世以降の遺物が共存して出土していないことから、中世

に當まれた井戸跡と考えられる。

以上のことから本遺跡は、古墳時代前期から集落として當まれていたことがこれまでの調査で知られている。また平安時代末からは、中世史研究上、本遺跡を中心とした岩切周辺の究明が行なわれて、大きな成果を得ている。昭和57年、国指定史跡になった岩切城・高森城は、本遺跡から北東1.5kmに位置し、留守氏の居城として周辺一帯を統治していたことで知られている。留守氏の領内を流れる七北田川流域を中心に、商業の中心的地域として栄え「冠巣市場」、「五日市場」等の市場が開かれ、また官営工場が當まれているなど、中世には、最も進んだ先進商業地域として栄えていたものと考えられている。これらを裏づけるように、今回の調査で、三面庇、あるいは四面庇の掘立柱建物跡を発見し、また、あまり出土例が知られていない三筋壇等を出土している。これらからも本遺跡は、中世に商業を中心とした当時の集落として、七北田川（冠川）流域を中心に、周辺に多くの建物群が建ち並び、政治、商業、文化、交通の重要な地域として、展開していたことが、推察される。また河川流域を中心に発達を遂げた中世の商業地域の特徴等を知る上で、本遺跡は、中世商業活動の拠点として歴史的に位置づけられるものと考えられ、今後の調査に待つものが大きいと思われる。

註

- 註1. 安田喜志「仙台灣周辺における後水期の地形変化・海水準変動と人類の居住」宮城県文化財調査報告書第52集 1978・3
- 註2. 紫桃正隆「仙台領内古城・館」第4巻 1974・7
- 註3. 白鳥良一・加藤道男「岩切鴻ノ巣遺跡」宮城県文化財調査報告書第35集 1974・3
- 註4. 金森安孝・工藤哲司「鴻ノ巣遺跡」仙台市文化財調査報告書第32集 1981・3
- 註5. 結城慎一・工藤哲司「史跡遠見塚古墳」仙台市文化財調査報告書第15集 1978・3
- 註6. 太田昭夫「大橋遺跡」宮城県文化財調査報告書第71集 1980・9
- 註7. 宮城県教育委員会文化財保護課小井川利夫・加藤道男・森貞喜各氏のご教示を得た。
- 註8. 名古屋大学教授樽崎彰一氏のご教示を得た。また東北歴史資料館藤沼邦彦氏「中世陶器の紹介」の三筋壇出土地を引用、ご教示を得た。
- 註9. 川崎利夫「宮城地方の古墳」まんがりNo.1 1982・10

参考文献

- 結城慎一・工藤哲司 「史跡遠見塚古墳」 仙台市文化財調査報告書第15集 1978・3
- 篠原信彦ほか 「今泉城跡」 仙台市文化財調査報告書第24集 1980・3
- 岩瀬康治・田中則和 「安久東遺跡発掘調査概報」 仙台市文化財調査報告書第10集 1976・3
- 金森安孝・工藤哲司 「瀬ノ果遺跡」 仙台市文化財調査報告書第32集 1981・3
- 結城慎一 「南小泉遺跡」 仙台市文化財調査報告書第13集 1978・3
- 遊佐五郎 「宇南遺跡」 宮城県文化財調査報告書第69集 1980・2
- 齊藤吉弘 「宇南遺跡」 宮城県文化財調査報告書第59集 1979・3
- 小野寺祥一郎 「五輪C遺跡」 宮城県文化財調査報告書第61集 1979・8
- 森 貢喜 「水入遺跡」 宮城県文化財調査報告書第84集 1982・3
- 黒川利司 「持長地遺跡」 宮城県文化財調査報告書第72集 1980・9
- 早坂春一・阿部恵 「西手取遺跡」 宮城県文化財調査報告書第63集 1980・3
- 丹羽・阿部・小野寺 「清水遺跡」 宮城県文化財調査報告書第77集 1981・3
- 白鳥良一・加藤道男 「岩切浦ノ果遺跡」 宮城県文化財調査報告書第35集 1974・3
- 小川洋一 「塩沢北遺跡」 宮城県文化財調査報告書第69集 1980・3
- 加藤道男 「東鏡遺跡」 宮城県文化財調査報告書第65集
- 小井川和夫 「上新田遺跡」 宮城県文化財調査報告書第78集 1981・3
- 太田昭夫 「大橋遺跡」 宮城県文化財調査報告書第71集 1980・9
- 上岐山武 「安久東遺跡」 宮城県文化財調査報告書第72集 1980・9
- 「猿投塚・須恵器・壺から中世陶へ」 爰知県陶磁資料館 1981・10
- 白鳥良一 「研究紀要Ⅱ・多賀城跡出土土器の変遷」 宮城県多賀城跡調査研究所 1980・3
- 「草戸千軒町遺跡・第15~17次」 草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1975
- 「草戸千軒町遺跡・第24~26次」 草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1978
- 「下夕野遺跡」 秋田市教育委員会 1979・11
- 藤沼邦彦 「宮城県地方の中世陶器窯跡（予察）」 東北歴史資料館「研究紀要第二卷」 1976・3
- 藤沼邦彦 「宮城県出土の中世陶器について」 東北歴史資料館「研究紀要第三卷」 1977・3
- 藤沼邦彦 「中世陶器の紹介」 東北歴史資料館「研究紀要第四卷」 1978・3
- 氏家和典 「北奥古代文化第4号」 北奥古代文化研究会 1972・4
- 石井則孝 「古代の集落」 歴史新書34 1982・1
- 斎藤 忠 「日本考古学概論」 1982・7
- 近藤義郎・藤沢長治 「日本の考古学Ⅳ・古墳時代（上）」 1966・6
- 大塚初重 「日本考古学の現状と課題」 1974・5
- 地学団体研究会仙台支部 「新編・仙台の地学」 1968・3

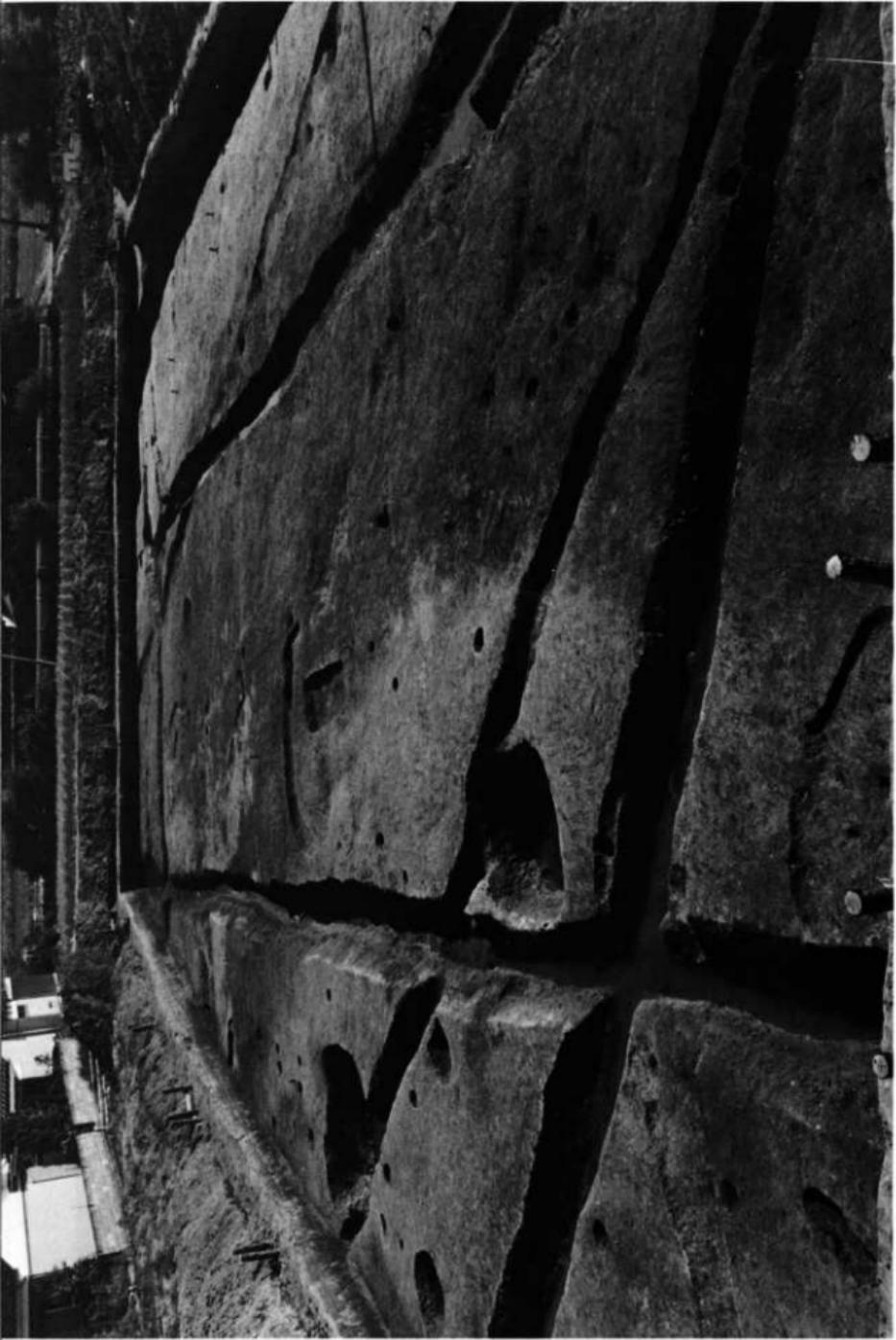
- 大塚・戸沢・佐原 「日本考古学を学ぶ・3」 1979・7
- 安田喜憲 「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」
宮城県文化財調査報告書第52集 1978・3
- 小笠原好彦 「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」 東北考古学会 1976・10
- 氏家和典 「東北上師器の型式分類とその編年」 「歴史」第14輯 1957
- 岡田・桑原 「多賀城周辺における古式杯形土器の変遷」 「研究紀要」
宮城県多賀城跡調査研究所 1974
- 桑原・滋郎 「ロクロ土師器壺について」 「歴史」第39輯 東北史学会 1969・12
- 紫綾正隆 「仙台領内古城・館」 第4巻 1974・7
- 川崎利夫 「霞陽地方の古墳」 まんぎりNo.1 1982・10

写 真 図 版

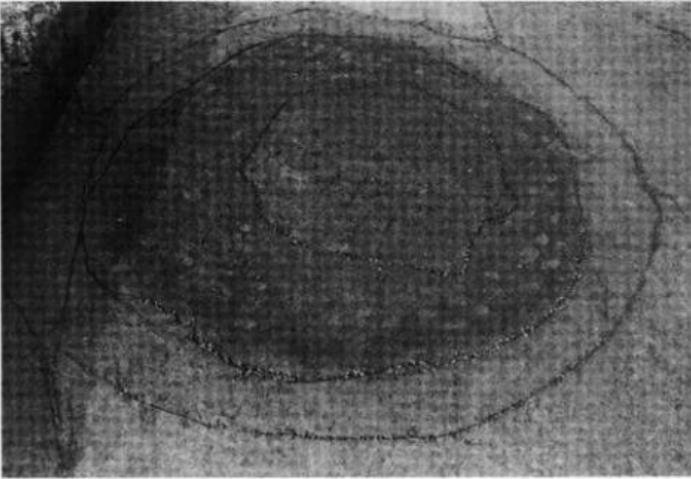
圖版 I I 區全景



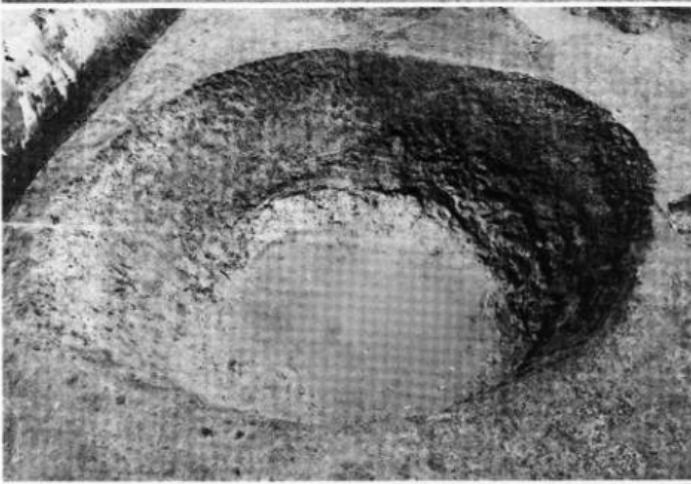
圖版 2 II 地區全貌



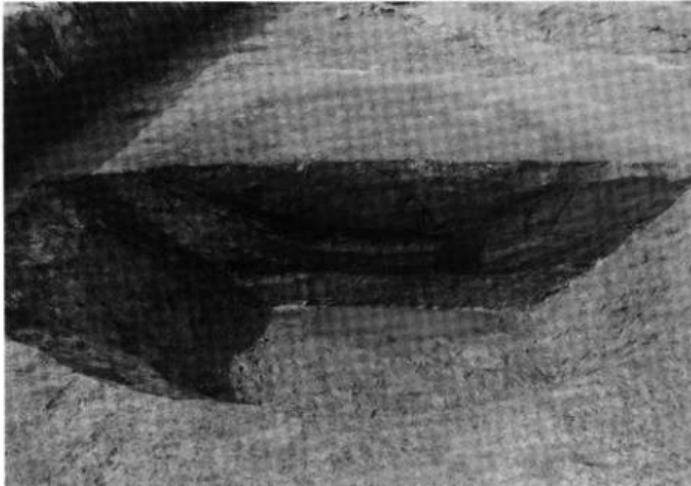
図版3
SE-1 井戸跡検出状況

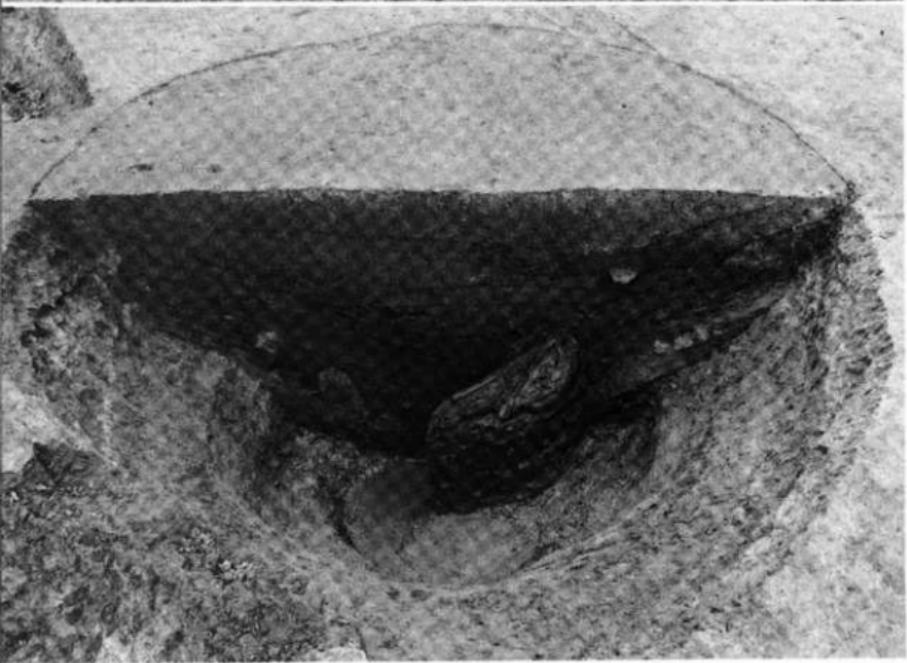
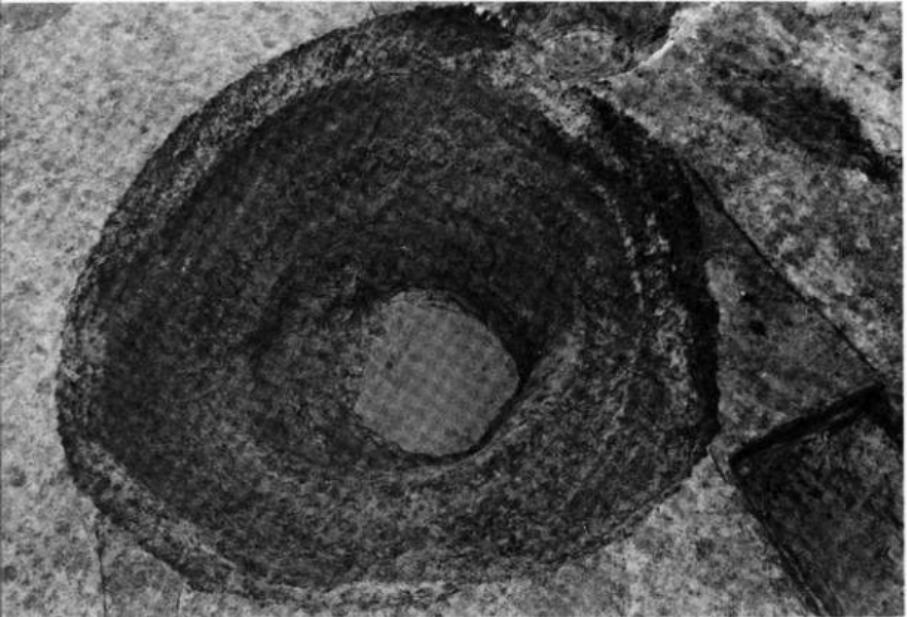


図版4
SE-1 井戸跡



図版5
SE-1 井戸跡セクション

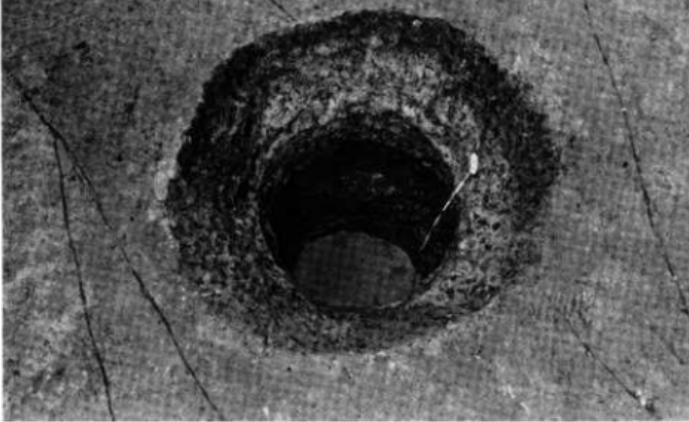




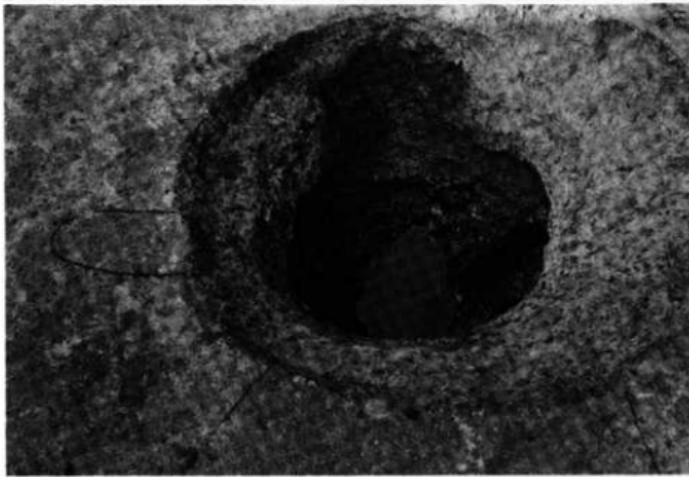
図版6 上 SE-2 井戸跡

図版7 下 SE-2 井戸跡セクション

図版8
SE-3 井戸跡



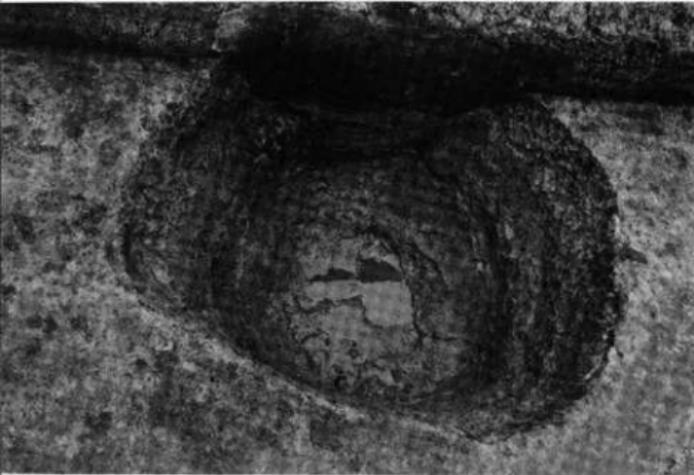
図版9
SE-4 井戸跡



図版10
SE-5 井戸跡



図版11
SE-6 井戸跡

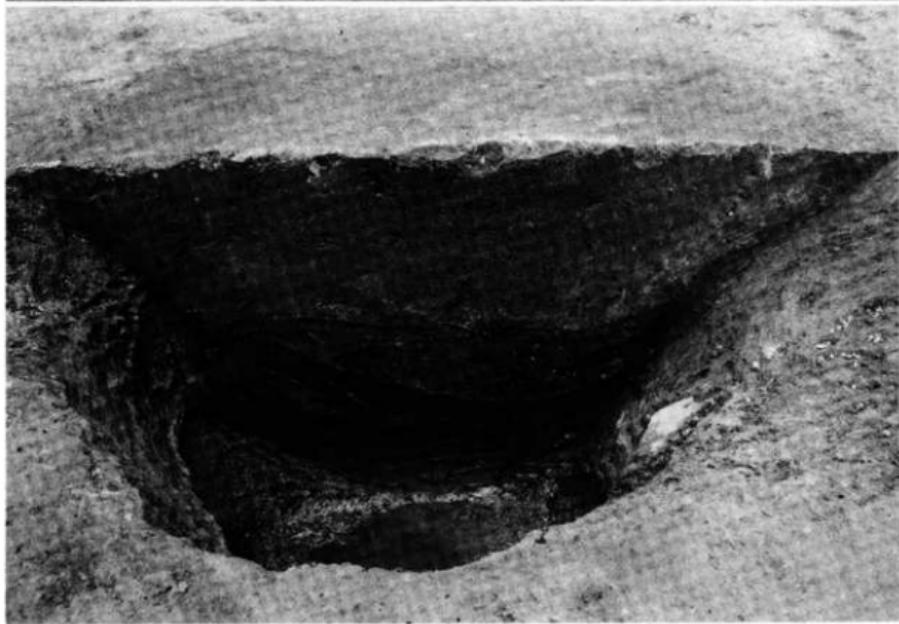
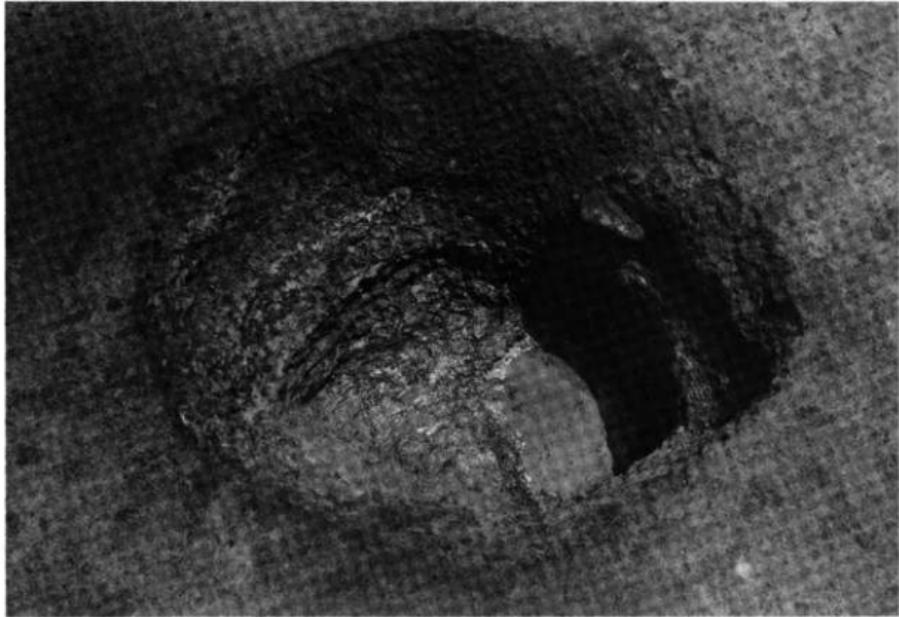


図版12
SE-6 井戸跡遺物出土状況



図版13
SE-6 井戸跡セクション





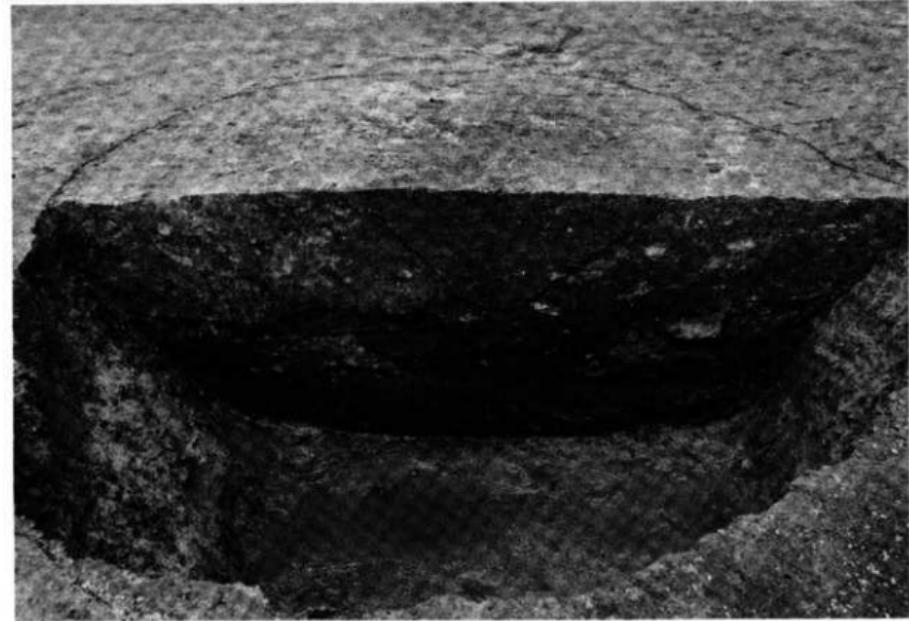
図版14 上 SE-9 井戸跡

図版15 下 SE-9 井戸跡セクション



図版16 上 SE-11 井戸跡

図版17 下 SE-11 井戸跡セクション



図版18 上 SE-12 井戸跡

図版19 下 SE-12 井戸跡セクション

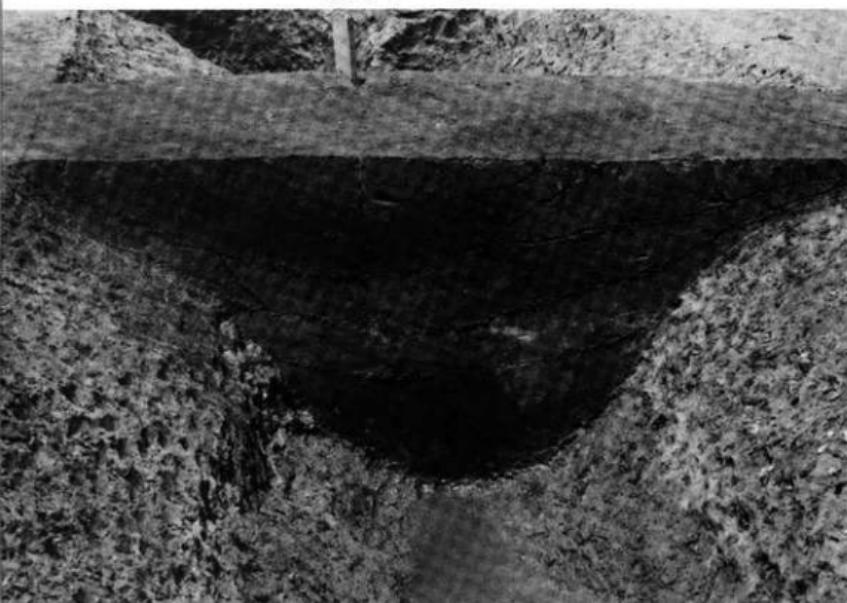


図版20
SD-1 溝跡

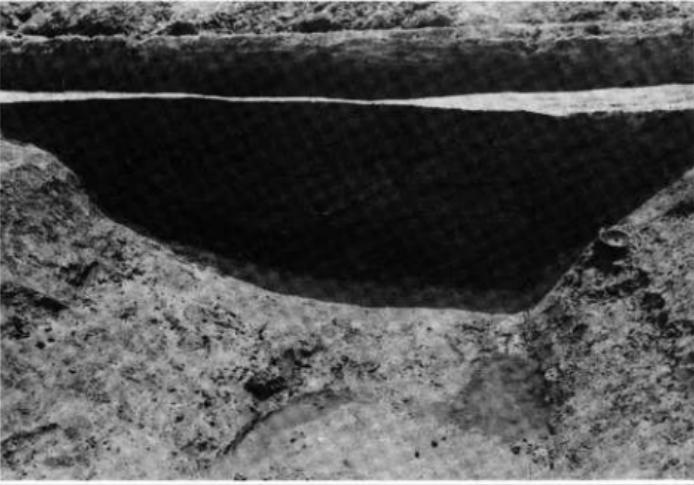


図版21
SD-1 溝跡遺物出土状況

図版22 SD-1 溝跡セクション



図版23
SD-20 溝跡セクション



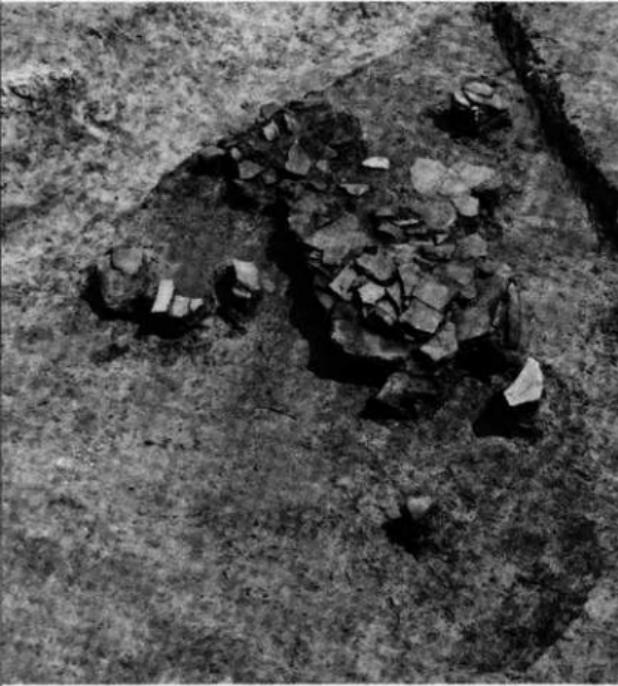
図版24
SD-21 溝跡
遺物出土状況



図版25
SK-13 土 塵



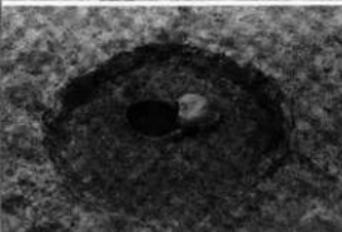
圖版26
SK—2 土壤遺物出土狀況



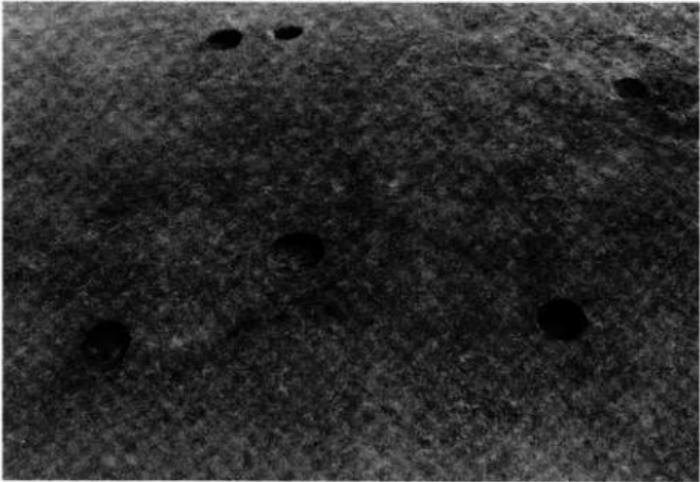
圖版27
SK—16 土域遺物出土狀況



圖版28
P—12 遺物出土狀況



圖版29
SI-1 住居跡



圖版30
SK-6, SD-15 周溝墓



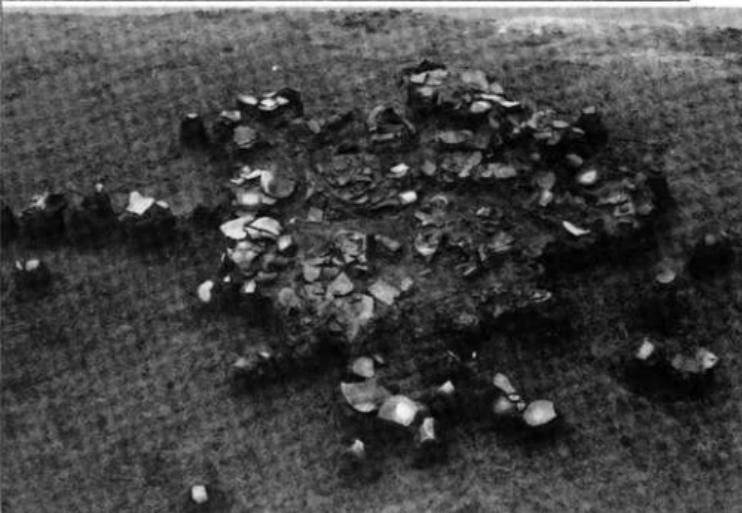
圖版31
SK-6 土壤 遺物出土狀況



圖版32
SX-1 性格不明遺構
遺物出土狀況



圖版33
SX-1 性格不明遺構
遺物出土狀況



図版34

SX-3 性格不明遺構
遺物出土状況



図版35

現地見学会



図版36

調査参加者

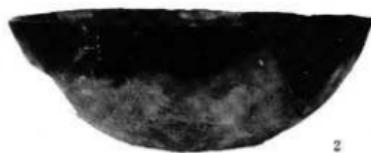




1



6



2



7



3



8



4



9



5



10



11

1. D-8 土師器 壺 SD-1 清跡
 2. D-52 土師器 壺 SE-1 井戸跡
 3. D-3 土師器 壺 SD-1 溝跡
 4. D-45 土師器 壺 P12
 5. D-7 土師器 壺 SD-1 清跡

6. D-19 赤燒土器 壺 SD-1 溝跡
 7. D-17 赤燒土器 壺 SD-1 清跡
 8. D-18 赤燒土器 壺 SD-1 溝跡
 9. D-63 赤燒土器 壺 P87
 10. D-48 赤燒土器 壺 表 土
 11. D-12 赤燒土器 壺 SD-1 溝跡

図版37 出土遺物 土師器・赤焼土器



1



6



2



7



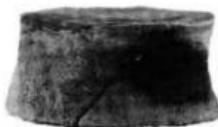
3



8



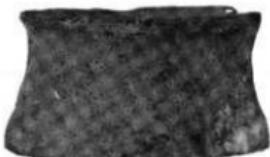
4



9



5



10

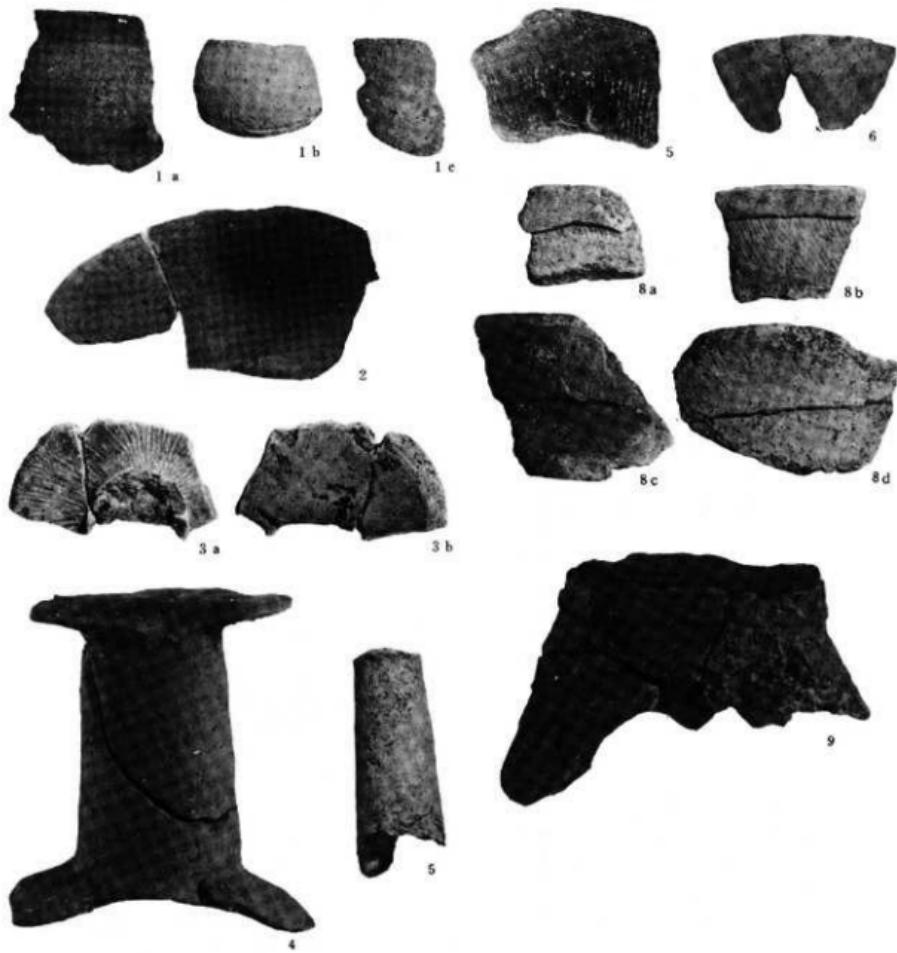
1. D-2 赤燒土器 壺 SD-1 满跡
2. D-11 赤燒土器 壺 SD-1 满跡
3. D-10 赤燒土器 壺 SD-1 满跡
4. D-46 赤燒土器 壺 P12
5. D-62 赤燒土器 壺 SD-20 满跡
6. D-50 赤燒土器 盆 北側遺構檢面
7. D-51 赤燒土器 盆 北側遺構檢面
8. D-53 赤燒土器 盆 SE-10 井戶路
9. D-44 赤燒土器 高台付壺 SD-1 满跡



11

10. D-43 赤燒土器 高台付壺 SD-1 满跡
11. D-28 土師器 斷皿 SD-1 满跡

図版38 出土遺物 赤燒土器



- 1 a C-109 土師器坏 SX-1
 1 b C-9 土師器坏 表土, 1 c c-140 土師器坏 SX-1
 2. C-106 土師器高坏 SX-1
 3 a C-104 土師器高坏 SX-1
 3 b *
 4 . C-75 土師器高坏 SD-12 满跡
 5. C-57 土師器高坏 表土
 6. C-40 土師器壺 SK-16 土壤 9. C-77 土師器台付壺 SX-1
 7. C-18 土師器壺 SU-12 满跡 8 b C-137 土師器壺 SX-1
 8 a C-126 土師器壺 SX-1, 8 d C-24 土師器壺 SD-10 满跡
 8 c C-25 土師器壺 SU-11 满跡

圖版39 出土遺物 土師器



1



4



2



3



5



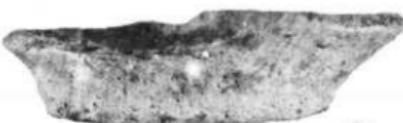
6

1. C-3 土師器甕 SD-21 溝跡
2. C-19 土師器甕 SK-1 土塹
3. C-1 土師器甕 SK-2 土塹
4. C-17 土師器甕 SK-7 土塹
5. C-16 土師器甕 SK-7 土塹
6. C-143 土師器甕 SK-1

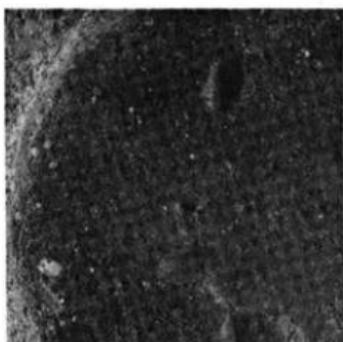
図版40 出土遺物 土師器



1 a



2 a



1 b



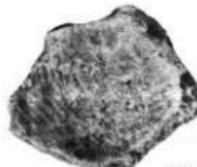
2 b



3



5 a



5 b



4



6 a



6 b



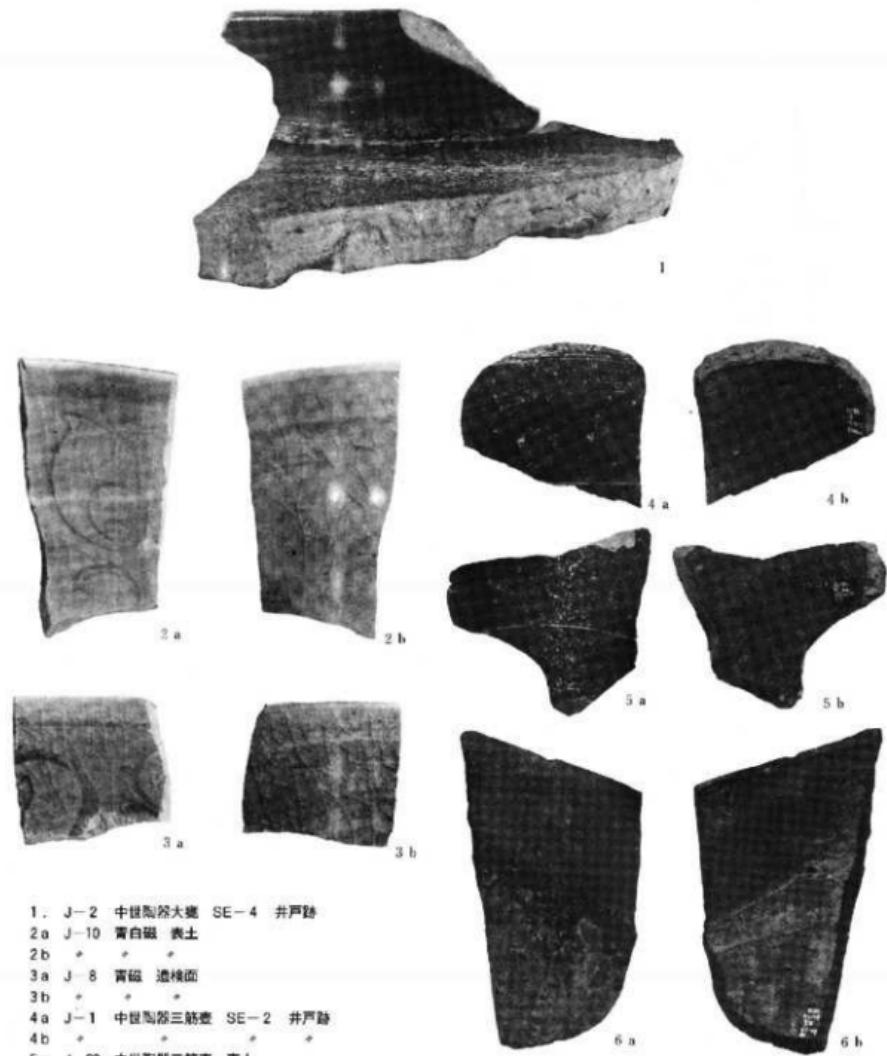
7



8

- 1 a C-132 土器器蓋 SX-1
1 b " 底部モミ痕
2 a C-145 土器器蓋 SK-7 土壙
2 b " 底部モミ痕
3. C-5 土器器蓋 SD-21 溝跡 SD-21 溝跡
4. C-7 土器器蓋 SD-21 溝跡
5 a C-45 土器 表土
5 b "
6 a P-4 土製品 表土, 6 b P-6 土製品 表土
7. C-146 土器 表土
8. A-1 繩文土器 表土

図版41 出土遺物 土器器・土製品・縄文土器



1. J-2 中世陶器大甕 SE-4 井戸跡
 2a J-10 青白磁 表土
 2b * * *
 3a J-8 青磁 造様面
 3b * * *
 4a J-1 中世陶器三筋壺 SE-2 井戸跡
 4b * * * * *
 5a J-20 中世陶器三筋壺 表土
 5b * * * * *
 6a J-9 中世陶器 SD-19 溝跡
 6b * * * * *

図版42 出土遺物 中世陶器・青磁



1 a



1 b



3 a



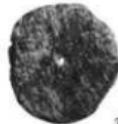
3 b



4 a



4 b



2 a



2 b



5

1 a K-2 石製品 純作土

1 b " " "

2 a K-4 石製模造品 有孔円盤 遺構検出面

2 b K-5 石製模造品 有孔円盤 SD-11 满跡

3 a K-1 石製品 積石 SE-2 井戸跡

3 b K-3 石製品 通檢面

4 a K-6 石製模造品 SK-6 土壌

4 b " " "

5 N-5 鉄製品 刀子 SK-6 土壌

図版43 出土遺物 石製品・鉄製品



1. L-7 木製品 SE-9 井戸跡

2. L-4 ①木製品 桶の蓋 SE-6 井戸跡

3. L-4 ② * * * *

4a L-5 木製品 SE-5 井戸跡

4b * * * *

5a L-6 木製品 舟形 SE-9 井戸跡

5b * * * *

5c * * * *

図版44 出土遺物 木製品

職 員 錄

社会教育課

課長 永野昌一
主幹 草坂春一

文化財管理係

係長 大沢伸夫
主事 山口宏
。 渡辺洋

文化財調査係

係長(兼) 草坂春一
教諭 辻裕一
渡辺忠
佐藤正則
加藤昭一
中城田
城城
結成
瀬沼
音治
木村
糸佐
安田
森岡
吉弘
工部
主野
高橋
長井
斎藤
高
勝
木
也
実

・

派遣員
職員
嘱託

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物瀬戸下セコイア化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕浜善應寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡陸奥国分寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法螺塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松室跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市高畠裏町古墳群発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町赤柳寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台市中田町安久連跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡足見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡足見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小糸遺跡一範開墾認可調査報告書（昭和53年3月）
第14集 犀造跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡足見塚古墳昭和53年度環境整備下準備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北壁敷遺跡（昭和54年3月）
第18集 桥江洪跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡足見塚古墳昭和54年度環境整備下準備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市簡免関係遺跡調査報告書1（昭和55年3月）
第22集 緑ヶ原（昭和55年3月）
第23集 年報1（昭和55年3月）
第24集 今東城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集 仁神道跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集 史跡足見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年3月）
第27集 史跡足見塚古墳昭和55年度発掘調査概報（昭和56年3月）
第28集 年報2（昭和56年3月）
第29集 郡山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報一（昭和56年3月）
第30集 山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年3月）
第31集 仙台市簡免関係遺跡調査報告書II（昭和56年3月）
第32集 湾ノ糸遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第33集 仙山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年3月）
第34集 六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集 南小糸遺跡都市計画街路建設工事関係第1次調査報告（昭和57年3月）
第36集 北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第37集 仙台平野の遺跡群I・昭和56年度発掘調査報告書一（昭和57年3月）
第38集 郡山遺跡II・昭和56年度発掘調査概報一（昭和57年3月）
第39集 施設遺跡発掘調査報告書（昭和57年3月）
第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報I（昭和57年3月）
第41集 年報3（昭和57年3月）
第42集 郡山遺跡一宅地造成工事緊急発掘調査（昭和57年3月）
第43集 犀造跡（昭和57年8月）
第44集 湾ノ糸遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）

仙台市文化財調査報告書第44集

昭和57年度

鴻ノ巣遺跡

昭和57年12月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL. 63-1166
